

語り継ぐ 22

～一歩ずつが道になる～

兵庫県立舞子高等学校
環境防災科 22期生

語り継ぐ

題名	名前	頁
何を語り、どう伝えるか ～これからの語り継ぎ～	浅井 颯人	1～
残す	朝藤 里歩	3～
私たちの未来への責任	池本 廉	5～
判断力	内林 小都泉	7～
私たちがつなぐ未来	梅林 涼太郎	9～
「あの日」を忘れさせない	大山 翔輝	11～
未来からそのまた未来へつなぐ記憶	岡本 篤大	13～
思いを次の世代へ	片山 暖人	15～
残したい思い	加藤 朱里	17～
震災を語り継ぐ防災の学び	加藤 海音	19～
未来へ残す	鎌野 萌生	21～
未災者の私が	岸 宥里	23～
託された思い	河野 黎	25～
命をつなぐ	小林 珠生	27～
過去から学ぶ防災	坂居 成美	29～
繰り返さない	阪上 菜穂	31～
今、から未来へ	佐藤 雅希	33～
語り継ぐ	杉本 友彌	35～
自分の命は自分で守る	砂川 翔瑚	37～
1歩ずつ前へ	関 歩飛	39～
未来につなげる	高橋 人逢	41～
震災の記憶	高畑 成	43～
つないでいくもの	田中 千恵美	45～
「気象」と過去・未来の災害	田上 空也	47～
未来へ託された思い	田村 洸太	49～
災害の教訓を未来に繋ぐために	為村 龍星	51～
伝えたい	寺崎 慎人	53～
想いを繋ぐ	二宮 杏樹	55～
違いと差	長谷川 虎粹	57～
若者が語り継ぐ理由	秦野 佑真	59～
備えの意味	春名 嵩悟	61～
日々を大切に	藤原 功光	63～
つなぐ	本田 茉音	65～
復旧・復興	益田 滯	67～
あの日を忘れないように	松浦 博央	69～
生存者になるために	松下 承太郎	71～
言葉を繋ぐ	森本 みなみ	73～
過去を活かす	柳瀬 眺大	75～
過去から学ぶ	吉田 七果	77～

卒業研究・作品紹介

「輪」～We are ONE PIECE～	79～
-----------------------	-----

何を語り、どう伝えるか ～これからの語り継ぎ～

浅井 颯人

1 考えたこと、将来について

「風化は進行してはいけないのか」

2025年1月の災害メモリアルアクション KOBE の活動報告会で、その発表を聞いたとき、それまで幽かに感じていた違和感が明らかになった気がした。発表していたのは滋賀県立彦根東高校新聞部の方だった。「福島学カレッジ」の研究コースに参加し、「東日本大震災の風化に伴う報道の変化」をテーマに研究を行い、その中で風化の是非について疑問が生まれたという。現状として震災後に福島を離れた人の多くは戻っていないことから、「風化してもいい、忘れてもいい、この言葉が被災者を悲しみから救うこともあると思います」と述べていた。

私はこれまで環境防災科の生徒として、「震災の風化を防ぐ」ことが正しいものだと思って活動してきた。しかし、実際に東日本大震災で福島第一原子力発電所事故の被害を受けた地域を訪問し、一概にそうとは言い切れないと考えるようになっていた。私がそう考えるようになったきっかけは、前述の彦根東高校の方と同じ、「福島学カレッジ」への参加だった。これは、福島県双葉郡双葉町に位置する東日本大震災・原子力災害伝承館を拠点にした中高生対象の体験型プログラムで、参加者はそれぞれの興味がある分野について問いを立てて研究し、学会発表を行う。この活動は私に研究活動の楽しさを感じさせるだけでなく、防災についての価値観を変えるものでもあった。私が「福島学カレッジ」の活動に初めて参加したのは2024年10月のオータムFWのときだ。福島県を訪問し、現地の方との交流や、関連施設の見学などを経験した。その中で変化したのが、「風化」に対する価値観だ。福島県では、震災からの復興の中で、原発事故によって放出された放射線によって汚染された土を掘りだして処分する「除染作業」が行われている。それにより発生した除去土壌の仮置き場に立候補した福島県相馬郡飯舘村の方にお話を聞く機会があった。飯舘村は面積の7割以上を森林が占めており、南北に4本の川が流れているため、昔から農業が盛んだ。しかし、原発事故の影響により、生体濃縮の危険性を理由に農作物の栽培ができなくなり、制限が解除されてからも、風評被害の影響で震災後数年、売れ行きは悪かった。「ニュースで震災のことが取り扱われなくなってから売れ行きが回復していった」、村内で農場を営んでいる男性はそう語っていた。そのほかにも、震災後に福島に移住してきた方は「家族からは放射線を理由に移住に反対された」と話していた。このことから、震災の記憶の風化が必ずしも悪いことではないと考えるようになった。

一方で、過去起きたものと同様の災害が起きた際に以前の記録が役立つときもある。岩手県宮古市重茂姉吉地区には、昭和三陸地震の津波をきっかけに「此処より下に家を建てるな」と刻まれた「大津浪記念碑」があり、実際に東日本大震災のときには、津波はこの石碑の50m前で止まったというエピソードも残されている。そのほかにも、日本には自然災害の被害にあった場所に災害に関連する地名を付けることで、記憶を後世につなごうとする取り組みが多くある。例えば、水害の多い地域では「川」「沼」「池」、土砂災害の多い地域では「崩」「蛇」「龍」などの漢字が使われることがある。実際に、2014年に大規模な土砂崩れにより100人以上が亡くなった広島県広島市安佐南区には、戦国時代から「蛇落地」「蛇王池」といった地名があった。縁起をよくするためや、土地のイメージ向上を理由に、こうした地名が失われたことで、住民の防災意識が薄れ、多くの被害が出たという事例は少なくない。こうした記録は語り継がれるべきではないだろうか。このように、経験をつなぐことで命を助けようとする取り組みと、前述した福島の事例のように風化することによる復興もある。

冒頭で取り上げた彦根東高校の発表では、この点について、「現代の技術があれば、一般の人々の記憶が風化しても被害は防げると考えることもできると思います」と説明していた。実際に、富士山の噴火による被害が懸念される静岡県裾野市に位置するトヨタが開発する実験都市、ウーブンシティでは、AIによる個別の避難誘導や自動運転による避難の支援、IoTを活用した災害監視や情報共有などの取り組みが行われている。このことから、近未来型の最新技術と防災の掛け合わせを実現させることで、こうした課題の解消につながるのではないかと考えた。

時に災害は、人や社会を大きく変化させ、技術の進歩やその普及を大きく推し進める。スマートフォンで撮影されたインドの津波の映像を見て感化されたアメリカの青年は、後に世界中の人に利用される動画投稿サイトであるYouTubeを立ち上げた。日本においても、関東大震災をきっかけに情報伝達手段としてラジオが急速に普及し、阪神・淡路大震災のときには携帯電話の所持率が向上した。そのほかにも、アメリカでの公民権運動の背景には、大規模な洪水が起きた時に氾濫した川の近くで銃を突き付けられ、

堤防を作るために働かされた黒人たちによる抗議運動がある。洪水と社会の変化の関係性を示す事例としては、バングラディッシュの独立運動がある。当時のバングラディッシュは東西に分かれたパキスタンの一部であったが、災害に対し西側からの援助がなかったことに対する反発心から独立運動が始まった。このように、災害は社会を大きく変化させるとともに、技術の発展や拡大の要因にもなる。そのため、私はこうした最新技術や社会の変化に向き合い、防災の視点から研究する仕事に就きたいと思った。過去の記録を最新の技術と融合させて、これからに生かすことをしたいと考えている。震災から時がたつほど社会の形態は大きく変化しているため、過去の教訓がそのまま使えるとも限らないが、多くの人の記憶や記録を集めて分析し、未来の礎とすることはできる。私はこのような立場から今後防災に関わっていきたいと考えている。

2 震災体験インタビュー

(1) 母の話

母は当時、阪神・淡路大震災により、1000人以上の方が亡くなり、10万棟を超える建物が全壊した、兵庫県西宮市に住んでいた。地震が発生した、1月17日の朝5時46分には、早朝ということもあり、まだ布団の中で寝ていた。大きな揺れで目が覚めたが、そのあまりの激しさから、収まるまで布団にくるまりじっとしていることしかできなかった。突然の大きな揺れには驚いたが、幸いなことに、家族や家にも直接大きな被害はでなかった。揺れが収まってからテレビを点けると、神戸市長田区の火災の映像が流れていて、強い衝撃を受けたようだ。

「今でも、震災の映像を見ると、そのときのことを思い出す」と、NHKが保存している戦後の映像史の中から「罪と勇気の連鎖」をキーワードに様々な歴史を振り返っていく番組「映像の世紀バタフライエフェクト」の「世界を変えた巨大災害」という特集を見ながら言っていた。その中で取り上げられていた映像の中には、あのとき見たものと同じ、長田の火災の様子を記録したものもあった。「(地震が起きたときのことについて)寝ていて気付かなかったという人もいるけど、あんなに大きく揺れたのに目が覚めないなんて信じられない」という母の声と、テレビから聞こえるオーケストラによる「パリは燃えているか」のBGMが合わさり、それは確かに歴史の一部であり、語り継いでいかなくてはいけないものであると感じられた。「神戸に地震は来ない」というのが当時の常識だった。母自身も、遠くに住む友人から「地震がなくて羨ましい」と言われたことがあった。それほど、神戸に地震が来ないという、一種の神話のようなものが広まり、多くの人々がそれを信じていたということを知り、とても驚いた。

(2) 話を聞いて感じたこと

インタビューを通して、震災当時、多くの人々が「神戸で地震は起きない」という思い込みを持っていたと知った。しかし、神戸市気象台のホームページによると、それ以前から兵庫県南西部を震源としたマグニチュード5～6程度の地震が一定の周期で発生していたことが分かる。実際、震災発生から11年前の地震の被害を観測した報告書も残っている。また、環境防災科の授業の中で受けた、六甲山周辺の地質が専門のかがかく教育研究所所長の菅本格様の講義の中で、「地学を学んでいる人なら、六甲山地の写真を見れば、一目で大きな地震が起きるとわかる」と仰っていた。同講義では「日本では、災害が多いにもかかわらず、地学を学ぶ学生が少ない」と、日本の教育についても言及されていた。このことから、過去に起きた災害の記憶が失われていたことや、住民が自分の住む地域の地質や災害のリスクについて知らなかったことが、震災による被害拡大の原因の一つではないかと考えた。

私たちの住む神戸市には六甲山地を中心に多くの活断層が存在する。誰も阪神・淡路大震災のことについて話さなくなり、忘れられたら、数十年後にあのときと同じことがおきるかもしれない。先ほど取り上げた楽曲「パリは燃えているか」について、作曲家である加古隆氏は「人間の持つ愚かさや素晴らしさの二面性を表現したかった」と述べている。奇しくも、災害もそれを露わにする力を持っているのではないかと感じた。阪神・淡路大震災では、ボランティアの活躍など、人間の素晴らしさとともに、身近に忍び寄る災害という魔物の危険性に気づけなかった人々の愚かさも明らかになったのではないだろうか。今この瞬間も魔物は、私たちのすぐそばに眠っている。それは、いつ目覚め、再び多くの被害を生み出してもおかしくない。これは、これから私たちが震災について語り継いでいくことの意義であると強く感じた。私はこの3年間、環境防災科の生徒として、語り継ぐことで守られる命も、忘れられることで救われる人たちもいるということを知った。あの震災について何を語り、どう伝えるのか考え、自分なりの答えを見つけ出して実行することが、震災を直接経験した方から直接話を聞ける世代である私たちに課された使命なのではないだろうか。

残す

朝藤 里歩

はじめに

近年はデジタル化が進み、スマホ 1 台あれば知りたいことをすぐに調べられる。しかし、私はこの 3 年間で直接人と関わることで得られるエネルギーがあることを知った。だから、興味のあることは自らの足を使って確かめに行くことを大事にしたい。そこでの出会いを大事にして、多くの人と防災でつながりたい。また、私は自分の思いを文字に表すことが好きなので、言葉を武器に自分の知識や経験を広めていきたい。まずはその第一歩として、この「語り継ぐ」を執筆する。

1 阪神・淡路大震災

(1) 加古川市に住む親戚の話

揺れで目が覚め、すぐに地震だと分かった。夫が「危ないから動くな」と言っていたが、揺れで壁がゆがみドアがあけられなくなったら困ると思い、ドアを開けに行った。震災が起きた前年の 1994 年に建てたばかりの家だったことや、日ごろから高いところにもものを置かないようにしていたことが救いとなり大きな被害はなかった。周辺の昔からある家は瓦屋根がズレるなどの被害があった。勤務先の姫路商業高校へ車で通勤したところ、神戸方面からの車がないため道はいつもより空いていた。加古川－姫路方面はあまり大きな被害がなかったため、生徒も無事で通常通り授業があった。

発災から 2、3 日後、姉の家が被害を受けており、水が止まっているため家に泊めてあげた。他にも職場の人が寝泊まりしに来た。

夫の恩師は御影で被害を受けた。ガレキを避けていったら恩師の家は石造りのため木造住宅と違い崩れていなかった。少しでも力になればと思い、すき焼きができるようなものを持って行った。今思えば、水が止まっているので調理ができないと分かるが、阪神・淡路大震災以前に大きな地震がなかったため、地震でライフラインが止まるということが分からなかった。

(2) 話を聞いて

小学校や中学校で阪神・淡路大震災の話を聞いても、生まれた時から加古川市に住んでいる私にとって兵庫で起きたこととはいえ、知らない場所のことで、あまり自分事として捉えることができていなかった。環境防災科に入学し授業で知識をつけるうちに、自分が災害を生き延びるための防災、Survivor としての力が身に付き、これから起こる災害を自分事として捉えられるようになった。今回、親戚から話を聞いて誰かを支援する防災、Supporter として何ができるかを改めて考えさせられた。遠方からの支援で、救援物資を送ったり募金をしたりすることは頭にあったが、被災地に近い地域だからこそできる支援もあると学んだ。特に被害はなくライフラインも止まっていなければ、自宅が倒壊した知人や親戚を自分の家に泊めたり、自分の足で家を訪れ話をしたりと、近くに住んでいないとできないようなこともあると気づいた。被災して自分の家を置いて遠くに避難するのは不安だと思うし、避難所で窮屈な暮らしをするのはしんどいと思うので、親戚の家に泊まりに来た人はそこが落ち着く場所になっていたのではないかと感じた。

また、地震はいつどこで起きるかわからないということも改めて考えさせられた。もし、時間や場所が少しでもズレていたら、自分は今こうして生活できていないかもしれないと思うととても怖い。平時からの備えを大切にして、どこで何をしても自分の命を守れるよう、常に防災意識を持っておく必要があると感じた。

2 環防生として

(1) 環境防災科

中学 3 年生の時は防災が好きというより、他の学校とは違って面白そうだなと思い、環境防災科を受験した。しかし、この 3 年間学んできて防災のことが好きになり、もっとたくさんの人に防災の“楽しさ”を知ってほしいと思うようになった。環境防災科の授業の中でも「災害と人間」「社会環境と防災」の 2 つは特に意欲を持って学習した。この授業を通して防災の知識が付き、過去の災害からの教訓を知ることができた。これは、今の自分の大きな力になっていると感じる。なぜ防災が好きなのかと考えてみると、正解がないからだと思う。地震が起きたら、津波がやってきたら、こうすればいいというものはないが必

ずしも正解とは限らない。そのときに合わせて臨機応変に対応する必要がある。学んでいけばいくほど防災は難しく奥深いものだと思う。その時々“成解”を出すために環境防災科の生徒として、これからも防災と関わっていききたい。

(2) 防災ジュニアリーダー

環防生として1番頑張ったのは、兵庫県防災ジュニアリーダー育成事業に3年間継続して参加したことだ。この活動には兵庫県の多くの高校が参加しており、学校ごとに1年間どのような防災活動に取り組むかを記した計画、アクションプランを作成する。各校違ったアクションプランを行っており、地域にあった防災を行うことが大事だと学んだ。同じ兵庫県の高校生と防災を通して交流することで、自分にももっとできることがあると気づかされ、やる気が湧いた。また、同じ視点で楽しく話ができるので、防災を難しく考えず身近なものとして捉えることができる機会でもあった。ジュニアリーダーの活動は、1番楽しんで防災に向き合える時間だったので良い経験となった。

高校1年生の夏、ジュニアリーダーの活動の一環として、東北訪問に参加した。私は環境防災科のオープンハイスクールでこの活動の存在を知ってから、入学したら絶対に参加したいと思っていた。東日本大震災は私が生まれた後に起きたものだが、ニュースなどで見た記憶はない。実際に現地を訪れて直接お話を聞けるため、絶対にこれからの力になると思った。入学前から参加したかったものにやっと参加できるのでワクワクした気持ちを持っていた。一方で、被災した場所に訪れるのにこのような気持ちでいいのか悩んだこともあった。しかし、前年度参加した先輩から、来てくれることを楽しみにしている人もいるので、メリハリを大事にしたら良いとアドバイスをもらい心が軽くなった。大川小学校やMEET 門脇に行き、子どもを亡くされた方からお話を聞いて、つらく苦しい気持ちになったが、そう思うだけで終わってしまうと自分がここにきた意味はないと感じた。帰ってきてから、家族や友人に話をして何が起きたのか、自分が何を感じたかを伝えた。テレビでそういったことが取り上げられていても関心を持たない両親さえも私の話は真剣に聞いてくれた。この経験から、自分が語り継ぐことの重要性を感じるようになった。高校生だから、経験していないから、ではなく事実や感想を伝えていくだけでも風化させないようにすることができる。これからも、この3年間で学んだことや聞かせて頂いたお話を自分の言葉で伝えていききたいと思う。

(3) 夢と防災

私は、この3年間の学びで防災における地域コミュニティの重要性を知った。阪神・淡路大震災で共助による救助が多く見られたことや、災害後に仮設住宅で孤独死する方がいたことから、人と人とのつながりが命を救うことがあると認識した。そこから、地域振興に関わる仕事に就きたいと思うようになった。地域に関わる仕事は多くあるが、そのまちの魅力を発信しながら、防災も広めることができるものはないか考えたときに新聞記者になりたいと思った。特に神戸新聞は地域版があり、その地域に住む人にとってより面白く役立つ情報になっている。そこに住む人々が自分のまちを好きになれるよう、観光スポットだけでなく、地域の憩いの場や特産品、旬の食べ物についての記事をつくる地域に寄り添った記者になりたい。新聞記者という職業は入社後、いろいろな取材を経験する。自分が置かれた場所でのように防災とつなげるかを考えながら記事をつくりたい。

おわりに

この「語り継ぐ」を執筆する中で、自分の防災に対する思いやこれまでの活動で感じたことを改めて整理することができた。たくさんの方を経験させていただいているので、頭から抜け落ちてしまっているものもある。日本は災害大国で、これからも多くの災害が起こる。自分の命も隣の人の命も救うために、環境防災科として学んだことをこれから役立てていくために、卒業までに今まで行ってきたことをまとめて自分の力にしたい。そして、まとめたことをここだけで終わらせるのではなく、まずは身近な人に話して私の語り継ぎを残していきたい。

私たちの未来への責任

池本 廉

はじめに

今まで数多くの災害が日本を襲った。近年、激甚化する災害によって甚大な被害をもたらされたが、復旧・復興を重ね、人々は生き続けている。過去に起きた災害は、時間が経つにつれて未被災者が増え、記憶から風化しつつあるのも事実である。

1 父の話

(1) 当時の様子

1995年1月17日、当時19歳だった父は運送の仕事があり、午前4時に兵庫県明石市を出発し、4時半ごろには阪神高速を走っていた。目的地は名古屋だった。滋賀県栗東市付近を走っているとき、トラックのラジオから「神戸で地震があった」との速報が流れたが、その時点では詳細は何も分からなかった。そのまま名古屋の運送先に到着すると、「神戸ですごい地震があったらしい」と聞かされ、初めて事態の深刻さを実感した。詳細を知ることができず神戸の状況がわからない。心配になった父は携帯電話で実家に電話をかけたが、まったくつながらなかった。家族の安否を確認するために明石へ戻ろうとしたが、関西方面へ通じる道路はすべて封鎖されていた。神戸に戻れたのは翌18日の朝だった。幸い家族は全員無事で、家も被害を受けていなかった。

その後、当時新長田に住んでいた交際相手の無事を確かめるため、車で向かうことにした。須磨あたりまで来たとき、目の前に広がる光景に言葉を失った。見渡す限り建物は倒壊し、あちこちで火災が発生していた。東へ向かうにつれて被害はさらにひどくなっていった。交際相手は無事で安心した。

特に印象に残っているのは、倒壊した阪神高速だった。ほんの数時間前に自分が通っていた道路が崩れ落ちているのを見て、背筋が凍る思いがした。実家や自宅には大きな被害はなく、ライフラインもすぐに復旧したため仕事を再開することができた。しかし、関西の物流の要である大阪や神戸へ通じる道路が使えなかったため、どの運送会社も業務を続けられない状況だった。それでも、大阪より東側から九州方面への物流は、日本海側を通る迂回ルートを使うことで、なんとか維持されていた。

(2) 話を聞いて

運送業は国の流通を支える大事な事業である。災害が起き、その仕事が中断すると、国の流通が止まり、すべての地域に影響を及ぼす可能性がある。災害が起きてもその場にとどまり、当時の状況に順応し仕事を続けたことは、復興・復旧において貢献できたと考えた。続けることは必ずしも正義とは限らず、時には立ち止まることも大事だと考えるが、今自分がすべきこと、できることを見つけ、その時にできる精一杯のことをする大切さを感じた。

父の話を聞いて、当時のいつもの神戸とは異なった悲惨な風景を見たときの衝撃、身の回りの人の安否、現在の仕事の継続の可否、これからの生活への不安を感じたことを知り、私はまだ被災をしていないし、大事な人が危機に遭っているような状況もない中で、その父の体験から当時の状況を想像することは難しかった。やはり震災を体験している人とそうでない人の災害に対する考え方の差は大きいと実感した。だからといって災害に対して無関心でいい理由にはならない。災害の怖さを知り、対策する意識を持つべきである。

2 石川県被災地交流

私は石川県珠洲市の小中学生との交流活動に参加した。中学生とのグループワークでは、地域の方を巻き込み防災意識を向上させることや、地域の方と関わりを持つにはどのような活動が必要か話し合った。話し合いでは、地域で行われる季節ごとの祭りや行事、学校で行われる行事などを生かし、その際に地域の方と関わりを持てるのではないかという意見が出た。その中で、中学生は学校で行われている避難訓練に疑問を抱いていた。それは訓練の想定が地震のみであることだった。実際、令和6年能登半島地震では津波の被害があった。今後も地震が発生すれば津波の被害は考えられるし、備えをしないといけない中で、その中学校の避難訓練は津波を想定していなかったのである。中学生が避難訓練に疑問を抱く理由は単純である。「地震での被害に恐怖を感じたから」である。発災当時、その中学校には津

波による被害はなかったし、ハザードマップにも大きな危険は示されていなかった。しかしその言葉を聞いて、経験という材料はその人の人生観に変化をもたらすのを改めて実感した。その場には大阪府八尾市の中学生も出席しており、そこでの避難訓練では、ほとんどの生徒がふざけて行動しており、まじめに取り組んではいないようだ。災害を経験した者とそうでない者の災害への意識や考え方に大きな違いを感じた。実際、現在重要視されている南海トラフ巨大地震では大阪府への被害は甚大だと予想されている。しかし、避難訓練に真剣に取り組んでいないことから、地震による被害や危機感を自分ごととして考えられていないのが現状であると感じた。災害を経験していないことが原因ではなく、過去の災害や今起きている災害に興味関心を抱いていないことが原因のひとつとして挙げられると考える。神戸に住む人は、小学校から阪神・淡路大震災についての学習があることや、命の尊さを綴った歌を合唱することがあり、地震への関心は高いと考える。こういった震災学習や防災啓発はどの地域にも存在するべきだと感じた。これまで多くの災害が犠牲や被害を生み出してきた。その事実を受け入れ、今後起きる災害に対して自分事として捉え、自分の命を守る術を身に付ける必要があると感じた。私は消防士として地域に貢献したいと考えている。高校に入り、地域の方に防災について学ぶボランティア活動に参加した。地域の消防の方々と一緒に、地域の方にAEDの使用方法を伝える活動を行った。これを通じて、伝える側になることで相手に知識を伝え、実践してもらう難しさを実感した。伝える相手の年齢層や状況に応じた説明ができるよう工夫を行った。私は将来消防士として地域の方に親身に対応し、地域の防災力の向上に貢献したいと考える。

3 将来の夢

高校に入りボランティアに参加するうえで、「神戸市垂水区消防署」の方々との関わりが多くなった。高校1年生の時、私は垂水消防署の方が参加されている地域イベントに運営側として参加した。イベントでは、垂水消防署の方と協力しながら、地域の方々にAEDの使い方を伝える活動を行った。その際、参加者の方々が消防署の方に、現在抱えている悩みや地震発生時の不安について相談している場面を目にした。消防署の方は、そうした声に対して親身に耳を傾け、寄り添う姿勢で対応されており、その光景がとても印象に残った。私はそれを見てさらに憧れを持った。消防士という立場で地域の方に寄り添うだけでなく、相手の目線になって共感や対策を伝えている姿を見て、自分の志す姿だと感じた。

おわりに

環境防災科に入り、実際に被害に遭った方々から当時の気持ちや復興の過程での心の変化などをお聞きした。未災者である私たちが想像してもわからないようなことを教えていただいた。そして、こうしたでき事を二度と起こさないために必要なことや、次にいつどこで起こるかわからない災害に対して、自分は何をすべきかを深く、そして広い視点で考える3年間だったと感じている。これまで数多くのボランティアに参加し、地域の方々にどう伝えればよいか、どうしたら行動に移してもらえるかを考え続けてきた。この思考の積み重ねが、自分を大きく成長させてくれたと思う。私にとって夢である消防士になるための大切な土台であり、卒業はゴールではなくスタート地点だと感じている。この学科で学んだことを生かし、地域社会に貢献していくことが私の目標である。

判断力

内林 小都泉

はじめに

私たちの故郷を襲ったあの大地震の教訓を伝える語り部活動も、今年で31年が経過した。震災を経験していない私たちが風化させないためには何ができるのか考えた。私たちができることは語り継ぐこと、震災を忘れないこと、次の世代に繋げることだと思う。過去の災害を知り、伝えることでより多くの人の命を救うことができるかもしれない。

1 阪神・淡路大震災

(1) 大叔母の話

大叔母は神戸市長田区に住んでいた。4年前(平成2年)までは火災の被害が大きかった場所に住んでいた。もし、そこにそのまま住んでいたら、下敷きになって火災にも巻き込まれていたかもしれない。震災当時はマンションの10階に住んでいて、須磨区の板宿の辺りから火災が発生しているのを見た。地震が発生したとき大叔母は台所にいた。食器棚の食器は大合奏のように、上下に揺れたことを今でも覚えている。

避難所に行ったが水はすでになかった。家に戻ると冷蔵庫の中の物やお米はすべて外に出てしまい食べられるものがなかった。大叔母はすぐに通帳と亡くなった大叔父の遺灰をもって大伯母の家に向かった。大伯母の家は電気が通っていたので、そこで1日過ごした。

1月18日に親戚を頼って石川県に避難した。車に乗っていると、ふと足が痛いと感じ、足を見ると、足が腫れ上がっていた。災害後初めてお風呂に入ると、体の半分以上が内出血で真っ黒になっていた。それまでは、緊張や焦りで痛みにも全く気付かなかった。お風呂に入ったあと、こたつで美味しい物を食べたときは今まで以上に幸せだなと感じた。テレビをつけると長田区の焼け跡や火災の様子が生中継されていた。もし、ずっと家にいたら危なかったと思った。

3月下旬頃に神戸市垂水区に住んでいる祖母の家に行った。垂水区は水道管に砂が入ってしまったこともあり、水道が復旧したのが遅かった。また、ガス漏れが起きてしまったためガスも使えなかった。そんな中で、南京町では温かい食べ物が食べられると聞いて大叔母と祖母は母を連れて南京町へ行った。久しぶりに食べた温かい物はとてもうれしかったのを覚えている。

大叔母は長田区に戻ったが焼け跡だらけでどこが自分の家かわからなかった。自分の家を見つける目印となったのが長田区で唯一残っていた高橋病院だった。長田区の焼け跡を生で見た大叔母は生きていたのが奇跡だったと語った。

(2) 被災体験を聞いて

私は大叔母の被災体験を聞き考えたことがある。それは、普段の何気ない生活が幸せであるということだ。震災当時大叔母は生きられたこと、近くに親戚がいたことが奇跡だったと話した。普段通りの生活がどれだけ大切なのかということや、普段の何気ない生活が、とても幸せでありがたいことだと考えた。また、災害時にも好きな物を食べるためにも防災バッグの備えはとても大切だと考える。私はこの3年間、多くの講師の方々の講義を聞いてきた。その中でも、特に印象に残ったお話は、「防災バッグの中に好きな食べ物を入れておく」というお話だ。災害が発生すると好きな食べ物はもちろん、普段食べているご飯でさえも食べることができないと思っていた。しかし、防災バッグに好きな食べ物を入れておくことで、日頃から防災バッグの中身を確認することができることや、災害時に好きな食べ物を食べることでストレスを軽減できるということを学び、大叔母の話からもその重要性再確認できた。

大叔母も阪神・淡路大震災を経験するまで防災の知識や意識がなかったが、被災後は家具の固定や防災バッグを備えることだけではなく、避難所で生活するときエコノミークラス症候群を防ぐため、日ごろから散歩をするなどの運動や、食事管理などの健康管理をしていることを知った。災害への備えは身の回りを強化するだけではなく、自分の健康管理も含めて災害に備えることも大切だと考えた。

震災から30年経った今もなお、当時被災された方々の記憶には、あの日のでき事が深く刻まれていることを知った。私は普段、学校で学んだことをすぐに忘れてしまうことがある。しかし、神戸を襲ったあの地震の記憶は、被災された方々の中で消えることはなく、あの日の体験はずっと心に残っているのだと感じた。震災の記憶は、これからも、これまでもずっと背負っていかなければならないものであり、私た

ちもその重さや意味を忘れずに受け継いでいく責任があると実感した。

2 東北訪問

私は1年生の時に、東日本大震災で被災した宮城県へ行った。実際に宮城を訪れて多くの方々からお話を聞いていくうちに、咄嗟の判断力が大切だということに気づいた。宮城県石巻市立大川小学校では、大人の判断で50分間、校庭に留まり74人もの命が奪われた。また、石巻市の日和幼稚園では津波警報が出ているなか、乗るはずのなかった子どもたちを乗せたバスが海側の低地へ走りだした。一度小学校に止まり、先生が呼び戻しにバスまで来たが幼稚園に戻ることはなく、バスが再出発し、津波火災に巻き込まれて園児5人の命が奪われた。乗るはずのなかった子を乗せなければ、バスが出発しなければ、小学校で止まった時に逃げていれば助かっていたのかもしれない。このお話を聞いて、先生の判断が間違っているかもしれないし、先生がその地域のことを知らないこともあるからこそ児童の意見に耳を傾けるべきだと思った。また、幼稚園児は1人で判断するという力がない子達が多いため、幼稚園教諭の判断はとても大切になってくる。そのため、幼稚園教諭の防災知識の向上が欠かせないと東北訪問を通して感じた。

おわりに

「語り継ぐ」を執筆して感じたことがある。1つ目は、咄嗟の判断力が大切だということだ。環境防災科に入学してから今まで多くの講師の方々や語り部さんからのお話を聞いてきた。被災した方々からのお話を聞いて「あの時、咄嗟に布団に隠れたから助かった。」と語っている方がいる一方で、「あの時、幼稚園バスが低地に走りだしていなかったら娘は助かっていた。」など後悔している方もいた。以前までの私は、災害時において判断力の必要性をあまり感じていなかった。しかし、沢山の方々の講義や被災地訪問を通して、自分の判断が時に人の生死を左右することを学んだ。

2つ目は、「語り継ぐ」を執筆することの難しさだ。震災当時の体験を伺い、相手が、どのような目的で何を伝えたいかをよく考え、自分に落とし込み理解し、それを自分の言葉で表現することに苦戦した。他者へ何を伝えたいのか、どうすれば伝えられるかを考えながら執筆した。

私は、この3年間で学んだ防災知識と、防災ジュニアリーダーやボランティア活動の経験を活かし、これからも防災に関わっていこうと考える。災害が起きた時にどのような行動をし、どのような声掛けが必要なのか、自分の住んでいる地域の特性や脆弱性を理解し、地域住民それぞれに合った対応をしたいと考えている。環境防災科で培った防災知識や被災地訪問での活動を通して、災害時の判断力を身に付け自助、共助ができる人間になりたい。また、「語り継ぐ」ことは決して簡単なことではないからこそ、被災された方々からの震災当時のお話を未災者である私たちが責任を持って語り継ぎ、これからも未災者から未災者へと語り継いで行きたいと考える。

私たちがつなぐ未来

梅林 涼太郎

はじめに

阪神・淡路大震災発生から31年という時間が経過した。30年という大きな時間の中で神戸の町は発展していくと同時に阪神・淡路大震災の歴史は人々の記憶から消えつつある。私たちは阪神・淡路大震災を経験していない。未災者が増えていくこの時代で私たちにできることは絶えず語り継ぎ、風化させないということだ。高校3年間で聞いたたくさんのお話や、様々な活動の中で培った経験が一人でも多くの人に伝わり、私たちの住む町が防災に強くなっていくことを願い「語り継ぐ」を執筆する。

1 父の話

父は当時18歳だった。垂水区の舞子地区に住んでいた。この話を父に聞く際、いつも笑顔でどこか余裕のある父とは打って変わり真剣で少し強張った表情をしており、父にとって阪神・淡路大震災がどれほど大きい存在なのかを実感した。神戸市の消防官として働くことが決まっていた高校3年生の3学期に地震が発生した。5時46分、冬だったので分厚い布団で寝ていた。下から突き上げるような衝撃とともに激しい揺れに襲われた。団地で暮らしていたので最初は何かが突っ込んできたのだと錯覚した。数秒経ち地震だと気づきすぐに布団にくるまった。食器が割れる音やタンスが倒れる音、本棚の漫画などが落ちてきた。しばらくして揺れが収まり、別の部屋にいる家族に声をかけた。誰も怪我無く無事に外に出ることができた。外に出るとすでに多くの人が出た。茫然としている人やパニックになっている人もいてあの時の異様な空気は忘れられないようだ。消防官になることが決まっていた父はこのまま傍観者としてはいられないと思い、けがをしている人の手当てや救助を行うためにおじさんたちと近所をまわった。地震の後すぐに停電と断水が起り、家の中は暗くて冷たかった。冬の寒さの中でお風呂に入れたいのは想像以上にきつかったらしい。普段なら当たり前のように感じていた温かいお湯が使えないことで、体の汚れや疲れが取れず、気持ちもどこか重くなったという。この経験が災害時の備えの大切さや自分を使命感をより強くさせたと言っていた。当時見た光景や空気感を今でも思い出すことがあるらしい。阪神・淡路大震災では身近な人をなくすことはなかったが、南海トラフ巨大地震が起こるかもしれないといわれているこの時代、私たち家族を絶対に守りたいと思っている。そして消防士としてこれからも多くの人に命を救いたいと考えている。それが阪神・淡路大震災を経験した自分の使命だと思うと言っていた。

2 父の話を聞いて

父の体験談を聞き、阪神・淡路大震災に被害の深刻さと、その中で人々がどのように行動したのかを身近な人からはじめて聞くことができた。地震直後の恐怖や混乱の中でも、家族や周囲の人に安否を確認し助け合う姿があったことに、防災の基本である「自分と周りの命を守る行動（自助・共助）」の重要性を改めて感じた。また私は震災当時の父と同じ年齢で消防士を目指している。だからこそ、あの時の父の経験が自分ごとのように感じられる。父は突然の大地震に襲われ、恐怖と混乱の中で家族の安全を確かめ、自らも負傷者の救助に向かった。その行動は同じ年齢の自分には想像以上に重く、責任感の強さに驚かされる。高校生という若さで、自分の命も危険にさらされながら他人を助けようとした覚悟は、本当にすごいと思う。自分だったらあの状況で冷静に行動できるのか、想像するだけで不安になる。またライフラインが止まり、お風呂に入れたい不便さを体験したという話からは、災害がもたらす日常の崩壊がリアルに伝わってきた。普段当たり前に感じている生活のありがたさと、それが奪われた時の辛さを改めて考えさせられる。父の話を聞いて、自分もただ消防士を目指すだけでなく、災害の現場で冷静に行動し、困っている人たちを助けられる強い心と技術を身につけなければならないと強く感じた。父が経験した震災は、単なる過去のでき事ではなく、自分の未来の使命とつながっているのだと思う。

3 環境防災科

私は舞子高校環境防災科で3年間学び、多くの人との出会いや様々な経験を通して、防災という言葉の重みとその先にある人の命や暮らしの大切さを実感してきた。入学当初、防災と聞くと地震や台風に関する知識を身につけることだと思っていた。しかし3年間を通して防災とは単に災害に備えることではなく、人と人とのつながりや地域の力を活かし、災害の後もその人の人生を支えていくことだと気づいた。

最も印象に残っているのは、地域の方々と一緒に行った防災イベントだ。防災クイズを通じて楽しく学べる防災を意識して取り組んだ。小さな子どもたちは災害の怖さを実感したことがない分興味を引く工夫が必要だった。お菓子ポシェットづくりなどを用いることで、楽しさの中に自然と防災意識が芽生える瞬間を感じたとき、伝える側としてのやりがいを知った。また、ランチ学園都市でのイベントでは多くの家族連れが立ち寄ってくれ、「こういうイベントがあると助かる」「子どもと一緒に考えるきっかけになる」という声を聞き、防災を広めることの意義を強く感じた。出前授業や校外学習では、実際に被災した方々や専門家から直接お話を伺う機会もあった。阪神・淡路大震災を経験された方の語り部講話では、当時の町の様子や避難所での苦労をリアルに知り、防災の知識だけでは命は守れないという現実を突きつけられた。「あの日、近所の人との助け合いがなかったら、今の自分はない」という言葉が今でも心に残っている。被災体験談を聞いた後、私自身も家族や地域の人とどう協力できるかを真剣に考えるようになり、身近な人とのつながりが防災の第一歩だと理解した。環境防災科の授業の中で特に印象に残っているのは過去の災害から防災を考える授業だ。阪神・淡路大震災や東日本大震災など、実際に日本各地で起こった災害の被害や復旧の記録を学び、なぜ被害が広がったのか、どうすれば減災できたのかを考えた。ただ事実を知るのではなく、被災した人々の生活や心の面にも目を向け、災害が「その瞬間」で終わらないこと、復興には長い時間と地域の協力が必要であることを深く学んだ。特に災害後の避難生活での問題（プライバシーの確保や物資不足、心のケアなど）を知り、防災には事前準備だけでなく、災害後の支援体制も含めた視点が欠かせないと気づいた。さらに湯井恵美子先生の講義も大きな学びになった。講義の中で印象的だったのは「災害時に命を守る行動をとれるかどうかは、日常の小さな備えと意識に積み重ねで決まる」という言葉だ。その言葉を聞き、私も自宅の非常持ち出し袋の点検を行った。先生の講義を通じて、防災は特別なものではなく日常の延長線上にあるべきだと理解した。3年間の活動を通じて気づいたことは知識を持っているだけでは不十分ということだ。いざという時に冷静に判断し、周囲に声をかけ行動に移せる人になるためには普段から備え考えておく必要がある。私は将来消防士になりたいと考えている。この3年間で学んだ防災の知識や経験は必ず消防の現場でも生きると思う。火災や地震などの災害時に人を助けるためには、まず自分が安全に行動できる力と周囲の状況を的確に判断する力が必要だ。そして火災が起こる前から地域の人々とかかわり防災意識を高めておくことが被害を減らす大きな一歩になると感じた。消防士として現場で命を救うことはもちろん、地域の防災啓発に力を入れ、命を守る活動を続けていきたい。

おわりに

環境防災科で学んだことを語り継ぐことで次の世代にも防災の大切さ重要さをつなげていきたいと考える。災害はいつどこで起こるかわからない。だからこそ私たち一人ひとりが学びを続け、伝え続けることで地域の防災力を高めることができる。3年間の学びを通して得た知識と経験を糧に、これからも防災をわがごとくとして考え行動できる人でありたい。

「あの日」を忘れさせない

大山翔輝

はじめに

阪神・淡路大震災が発生してから31年という年月が過ぎた。31年経ってもあの日を忘れてはいけない。過去に経験した災害の被害を繰り返さないために私たちが被災された方々から当時の話を聞き、次の世代に語り継ぐことが大切であると考えた。記録だけ残すのではなく、記憶の中にも残すように「語り継ぐ」を執筆する。

1 阪神・淡路大震災

(1) 父の体験談

父は当時、小学4年生で、神戸市長田区に家族5人と暮らしていた。1月17日、早朝5時46分に突然悲劇が起きた。眠っていたところに、突き上げるような強い揺れが襲ったという。「なんの揺れや」という祖父の言葉と同時に、家全体が信じられないほど揺れて、ガラス戸が音を立てて今にも割れそうになった。柱がきしみ、家具が倒れ、家が壊れるのではという恐怖で体が動かなかったそうだ。揺れていたのは約1分。しかし、体感では何分も続いているように感じたらしい。その後、外に出ると、まだ薄暗い空の下で、周囲の家々が傾き、壁が崩れ、あちこちから煙が上がっていた。まるで夢の中のような、現実とは思えない光景だったという。自宅が倒壊する恐れがあったため、家族はすぐに近所の高校に避難した。避難所での生活は、プライバシーもなく、寒さや不安に耐える日々だった。布団も毛布も足りず、食料や水は配給でしのご毎日。特に困ったのが入浴だった。ある日、「銭湯が開いているらしい」という噂を聞き、家族で歩いて向かった。その銭湯の前には大行列ができていたが、何時間も並び、ようやく湯船に浸かった。祖父がある日突然に涙を流した。「こんなことくらいで泣くような人やなかったのに」と、父はその時のことを今でも忘れられないと言う。後から聞いたところ、祖父の勤めていた会社の同僚が地震の影響で、亡くなったという知らせを受けていたそうだ。地震から数日後、父と祖父は一緒に町に出た。衝撃が目に映った。道路は隆起し、地面には大きな亀裂が入っていた。電柱は傾き、建物の瓦礫の間から火が上がっていた。火の手は風にあおられて次々に広がり、空は黒い煙で覆われていた。まるで戦争のような光景だったと父は語っていた。そんな中でも、懸命に動いていたのが消防士だったという。消火活動にあたっていた彼らの姿を見て、「こんな被害の中でも人を助けるために動ける人がいる」と強く思ったそうだ。父はその時初めて、「災害が本当に起きたのだ」と現実を理解し、そして「人の命を守る仕事」の存在の大きさを感じたという。

(2) 父の話を聞いて思ったこと

私が災害について深く考えるようになったのは、父から阪神・淡路大震災の話を聞いたことがきっかけだった。私は父のこの話を聞くたびに、命の重さや、当たり前な日常のありがたさについて考えさせられる。蛇口をひねれば水が出て、お風呂に入れることが、どれほど恵まれたことか。そして、どれほど恐ろしい状況でも前に進もうとする人の姿が、どれだけ大きな希望になるのか。災害は、一瞬で人の生活や命を奪う。しかし、人の思いや行動もまた、誰かを救い、支える力になる。そのことを父の体験から学んだ私は、将来、自分も災害現場で人の命を守る存在になりたいと心から思っている。私は話を聞いて、命の重さや当たり前な日常のありがたさについて深く考えさせられた。避難生活での不便さや少しの湯でも体を洗えることへの喜びがどれくらい大きかったことか。自分が清潔な水や温かいお風呂に恵まれていることのありがたさを実感した。そして、父の語る火災の現場では、「何が起きているのかわからないほどの混乱」の中、必死に人々を救おうとする消防士の姿や、私の心に強く刻まれた父の体験を通じて、私は「命を守る仕事」に強い尊敬と憧れを抱いた。そして将来、自分は話を聞いたように、災害の現場でも人を助ける存在になりたいと強く思うようになった。ボランティアで学んだ「寄り添う心」、父の体験から得た「命の重みを知る心」、これらを胸に刻み、私は将来、消防士として人々を守る仕事に就きたいと強く願っている。私は高校のボランティア活動で、芦屋特別支援学校に参加させていただき、継続的に取り組んできた。この3年間の経験は、自分の中で大きな成長と気づきをもたらしてくれた時間だった。3年間のボランティア活動を通して、私は「人と関わることの本質」や「支えるということの難しさとやりがい」を学び、心の成長を実感することができた。将来、消防士として人と関わり、支える立場になるとき、この経験は自分の大きな土台になると確信している。この経験は単に「支援をする」という枠を超えて、私自身にとって多くの学びと気づきを与えてくれた貴重な体験となった。芦屋特別支援学校でのボ

ランティア活動は、私にとってこれまでの人生で最も多く考えさせられた体験だった。この活動では、障がいのある子どもたちと一緒に過ごし、授業や遊びの時間を共にする中で、一人ひとりに合った関わり方が求められた。最初は私が話しかけても無反応だったり、反対に怒ってしまったりする子もいて、「自分はこの活動に向いていないのではないか」と感じることもあった。しかし、先生から無理に言葉をかけるのではなく、子どもたちのしぐさや表情、目線の先などに注意を向けるようと言われた。そこから少しずつその子とはコミュニケーションがとれるようになり、活動を通して笑顔を見せてくれるようになった。たった一言や表情の変化が、どれほど大きな意味を持つのかを実感したでき事だった。このような体験を重ねる中で、私は「伝えること」だけでなく、「感じ取ること」の重要性を学んだ。普段の生活では、当たり前のように会話をして気持ちを伝えているが、それが通じない相手と向き合うことで、自分がいかに言葉に頼っていたのか、相手の気持ちを読み取る努力をしていなかったのかを思い知らされた。また活動が続けるうちに、子どもたちの行動や反応の背景には、それぞれの個性や不安、こだわりがあることが少しずつ見えてきた。活動の最後には、触れ合う時間があった。自分の行動が誰かの心に届いたという実感が、自信と達成感につながった。この経験を通して、私は「支援する側」ではなく、「共に過ごす仲間」として相手に寄り添うことの大切さを学んだ。そして、相手の立場に立って考え、行動する力を身につけることができた。これは、将来消防士になったときに、災害現場で人と向き合う際にも必ず役立つと信じている。活動の中でまず実感したのは、「相手に寄り添う姿勢」の大切さである。芦屋特別支援学校の子どもたちは、表情やしぐさで気持ちを表すことが多く、言葉だけではコミュニケーションが成り立たないこともあった。最初はどう接してよいのかわからず、戸惑いや不安もあったが、相手の立場に立ち、反応や表情をよく観察することで、次第に相手の気持ちを理解できるようになった。この経験を通して、言葉に頼らない伝え方や、相手の表情や行動から気持ちを読み取る力、自分の思いを的確に伝える表現力などが少しずつ身についたと感じている。うまくいかないことも多く、先生に助けを求める場面もあったが、その都度、どう対応すべきかを考え、行動に移すことを繰り返した。子どもたち一人ひとりに合わせた接し方が求められ、臨機応変な判断力や注意深い観察力も重要だった。体力的にも精神的にも大変な活動であったが、活動が終わった時には大きな達成感が残った。困難を乗り越えたからこそ得られた喜びは、私にとってかけがえのないものとなり、次のボランティアへとつながる意欲にもなった。こうしたボランティア活動の経験は、将来、消防士として多様な人々と関わる中で必ず活かされると確信している。

2 将来の夢

私が舞子高校環境防災科を志望した理由は、将来、消防士になりたいという夢があるからである。私は人の命を守る仕事に憧れており、火災や災害の現場で活躍する消防士に強い尊敬の気持ちを抱いた。また父の被災体験も私が強く消防士を志す後押しとなった。日頃から体力作りやチームワークを意識して取り組んでおり、これらは消防士に必要な要素だと考えている。また、環境防災科で得た知識を活かし、防災啓発活動にも積極的に参加し、地域の防災意識の向上にも貢献したいと考えている。環境防災科では、災害、地震や台風などの自然災害について学ぶだけでなく、専門知識や防災活動を通して、現場で必要とされる知識や判断力を身につけることができると知った。体験では、神戸市消防学校に行き、規律訓練や集団行動、総合型訓練をしてより一層消防士になりたいと気持ちが高くなった。普通科では学べない専門的な内容や、環境防災科で培った様々な経験を将来に生かし、消防士として多くの人を助けられるように努力したい。将来的には地域の安全を守るだけでなく、災害時に迅速かつ冷静に対応できる消防士になりたい。

おわりに

阪神・淡路大震災から学んだ教訓は、ただ記録に残すだけでなく、未災者から未災者へと語り継ぎ、心の中に記憶として残していくことが何よりも大切だと私は感じた。父の体験や、祖父の流した涙、避難生活の厳しさ、そして消防士たちの姿から、命の重みや人とのつながり、備えることの意味を深く学んだ。環境防災科での学びやボランティア活動を通じて、私は「自分の行動で誰かの命を守れる人間になりたい」という思いをさらに強くした。そして、その決意は、将来消防士として地域の人々を守り、災害に強い社会をつくるという夢へとつながっている。「あの日」を風化させないこと、それは過去を知り、今を生き、未来を守るということだ。私はこれからも防災を学び続け、語り継ぐ責任を胸に、夢に向かって歩み続けていきたい。

未来からそのまた未来へつなぐ記憶

岡本篤大

はじめに

阪神・淡路大震災発生から31年を迎えた。世間では、30年経つと災害の記憶が薄れ、継承が難しくなるとされる「30年限界説」がある。しかし、継承が難しくなるからといって、今まで行ってきた活動を諦めるのではなく、様々な形で伝承しようと努力することが必要になる。私は、3年間環境防災科で学んできたこと、経験したことをこの「語り継ぐ」を通じて継承し、1人でも多くの人に読んでもらい、その人の記憶の中に残ってほしいと願っている。

1 阪神・淡路大震災の被災経験

(1) 父の話

父は、当時の津名郡東浦町に住んでいた。阪神・淡路大震災を経験したのは、父が高校2年生の時であった。父は、英語がとても苦手で授業についていけなかったため、英語の授業を少しでも理解できるように、夜中まで予習をしていた。当時の父は高校で陸上部に所属していて、家から20kmぐらい離れていた学校へ通っていた。自転車通学ということもあってとても疲れていた。その疲れの影響かその日はいつもと反対方向に頭をむけて寝てしまっていた。そして当日、下から突き上げる衝撃が襲った。近くにあったダンスや本棚など色々な物が倒れてきた。しかし、この時いつもとは逆に寝ていたため、本棚が顔に直撃せずに済んだ。もしこの時いつも通り本棚の方に頭を置いて寝ていたらと思うと、今でもゾットする時があるそうだ。揺れが収まったときに「大丈夫か!」という祖父の声があり、結果的には、家族全員無事だったという。幸いなことに家は倒れておらず、当時は八百屋を経営していたということもあって、食料には困らなかったという。またトイレを流すときも海岸から近かったため、海水をすくって流すといったことができた。

(2) 母の話

母は当時、津名郡五色町に住んでいた。母も父と同様に阪神・淡路大震災を経験したのは高校2年生の時であり、高校に自宅から通い陸上部に所属していた。震災当日、母の家では下から突き上げるような揺れはなかったという。家の周りもそれほど倒壊をしていなかった。母の印象に残っていることは、揺れが続いているときに近くにあったオルゴールが揺れの振動で鳴っていたことが不気味だったことや、高校までのスクールバスの運転手と、高校に行く道路にひびがはいつており通れるか通れないかの会話をしたこととなど、よく震災のことについて話したことが印象に残っていた。また北淡町や東浦町と違って、被害が少なく、水道管の損傷もなく電気も通っており、ガスも使えるといった状況だった。母は、当時の夜ご飯にすき焼きをしたことが一番記憶に残っているようだ。

2 被災体験を聞いて

両親から被災の話を知り、父の被災経験の話のひとつである、いつもと反対方向で寝ていたから本棚が顔に直撃せずに済んだというエピソードがとても印象深かった。いつも通りに寝ていたら本棚が顔に直撃し、命が危なかったかもしれないし、もし父が阪神・淡路大震災で亡くなっていたら私が生まれてこなかったらと考えると、他人事ではないように感じた。また、淡路島の中でも被害が大きいところと小さいところが極端にあったということを知った。当時の人が震災から復旧・復興を一生懸命に頑張ってくれたからこそ今のきれいな町があるので、私たちは、その町を守っていかなければならない。そのためには、自分でできることを精一杯頑張る必要があると感じた。また、近年南海トラフ巨大地震が発生すると世間でよく言われている。30年以内の発生確率は、20~50%、60~90%程度以上に変更された。最大震度は7で、広範囲にわたって甚大な被害が想定されている。淡路島では最大震度6強に加え津波の被害も想定されている。そして、私たちは大きな災害を経験していないため、日ごろからの防災訓練や、今ここで地震が起きたらどうするかと頭の中で想定するなど、防災意識が大切になってくる。

私は、この3年間たくさんのボランティア活動をさせていただいた。私が一番印象に残っているボランティアは、石川県被災地支援活動と南あわじ市の出前授業である。まず、石川県被災地支援活動では、震災から約半年たった時期に行った。半年がたっているにも関わらず、復旧・復興が進んでいない地域があ

ったのをよく覚えている。私が支援した場所は、石川県七尾市の安泉寺という古い歴史のあるお寺だった。屋根が崩れていたり床がずれていたり、壁と壁が地震の揺れで隙間ができていたりしていた。支援活動は、お寺の中にあるものをバケツリレー方式でみんなと運んだ。また物を運んでスペースができたところを掃き掃除をしてきれいにした。安泉寺の中に入ったときに地震のせいでも床がまっすぐではなくなり、いつものように歩けない状況になっていた。実際に建物が倒れてひびがはいっている物を見るとここで大きな地震があったのだと実感することができた。現地の人々が「あなたたちみたいな高校生がきてくれると元気が出て、作業をする活力になる」とおっしゃっていたことが印象に残っている。

南あわじ市の出前授業では、小学生や中学生に防災を伝えるといった活動をした。初めて出前授業をしたときは、うまく伝えることができず課題が残ったが、回数を重ねるごとに、どのように行えば楽しく学べるのか、また振り仮名を付け加えたり、難しい言葉でもわかりやすい文章に変えたりといった工夫ができるようになり、伝える側としての楽しさを感じることができた。

私の将来の夢は、中学校の教師になることだ。その思いの根本には、中学生の頃に出会った一人の先生の存在と出前授業がある。その先生は、単に勉強を教えるだけではなく、私の生活面にまで目を向け、気持ちの変化や些細なサインにも気づいて声をかけてくれる方だった。学校生活や人間関係で悩んでいるときには、私が言葉にできない不安を察してくれて相談に乗ってくれた。自分は、その時に救われて無事中学校生活を終えることができた。自分は勉強が得意ではないので、勉強ができない子の気持ちがとてもよくわかる。私は、将来教師になって勉強が苦手な子たちにもわかりやすく教え、寄り添えるような人材になりたいと考えている。そして、自分が困っていた時に助けてもらったように、生徒たちのSOSにも気づき、生活面でも支えられるような教師になりたい。そして、中学生や高校生による支援活動が被災者の心の支えになると知り、経験している私はそれを自分の教える生徒にも感じてほしいと思っている。また、社会科目を通じて、地理なら気候や地形、歴史なら過去に起こった災害、公民ならば、災害に関しての政治、法律といったように防災と関連づけて、様々なことを伝えていきたい。また、自分の地元である淡路島の防災対策についても触れていき、少しでも地域貢献になるように努めたいと思う。

おわりに

私は、この3年間で多くのことを学び、また数えきれないほどの経験を重ねることができた。震災について教えてくださった方々は、私たちに「次の世代へ語り継いでほしい」「決して忘れないでほしい」「あの悲しみを二度と繰り返さないでほしい」という強い願いがあったはずだ。だからこそ、私たちは「語り継ぐ」ということを通して、震災そのものの記憶だけでなく、そこに込められた人々の思いも丁寧に伝承していかなければならない。そして、これは私個人の願いでもあるが、私の「語り継ぐ」を読んだ人たちが、ただ「知る」だけで終わらず、「伝える人」になってほしい。私の世代から次の世代へ、そして次の世代からさらに未来へと、思いが連鎖するように広がってほしい。私が学んだこと、感じたこと、受け取った思いが、これから先の長い時間の中で少しでも誰かの役に立っていることを強く願っている。またこれが未来につなぐ大きな流れの一部になってほしい。

思いを次の世代へ

片山暖人

初めに

「語り継ぐ」を執筆するにあたって、語り継ぐ意味について考えてみた。1995年1月17日。あの大きな地震から今年で31年が経過しようとしている。時間が経過していくにつれ、阪神・淡路大震災を経験した世代が少しずつ減っていき、災害の記憶が薄れてきている。日本は災害が発生しやすい国である。被害の大きな災害が発生すると人々の記憶に残るものは多いが、被害の小さな災害は、人々の記憶から少しずつ薄れていき、やがて消えていく。しかしどんなに小さな災害だとしても、家族や友人の命を落とされた方々は何年の月日が経っても忘れることはない。そこで私は災害によって被害を出された方々の伝えたくても伝えられない気持ちに深く寄り添い、次の世代に繋いでいくことが大事だと考え、私は「語り継ぐ」を執筆する。

1 阪神・淡路大震災

(1) 父の話

当時父は須磨区に住んでおり、家族4人で生活をしていた。父はこの日大学の後期試験を受ける日だった。新聞配達のアルバイトをしていたこともあって深夜から新聞を配り、朝の5時に帰り家で寝ていた。地震が発生した際、ベッドの上にはCDが入った棚があったが、全て滑り落ちてきた。リビングにいくとガラスの棚の中には祖父が集めていたお酒がたくさん入っていたが、ほとんど割れてしまい床が一面お酒だらけだった。また家の食器棚から食器があふれ出て割れていた。家の窓から曾祖父が住んでいる長田の方向を見ると黒煙が上がっているのが見え、祖父から曾祖父の様子を見てきてくれと言われ、原付バイクで様子を見に行ったら、西代の場所まで行くと、右も左も瓦礫が多く日が上がっている場所があったが、すり抜けながら長田まで行った。曾祖父の家に着くと家の形は残ったままだったが、扉が開かない状態だった。無理やりこじ開け扉を開け安否を確認し、祖父に連絡しようとしたが連絡手段がなかった。公衆電話を使おうとしたが10円玉がパンパンの状態では電話ができなかった。父はバイクで来た道を帰り、祖父に報告した。電気は3時間後には復旧したが、水道が夕方まで復旧しなかったそうだ。震災の次の日も余震が発生していても新聞配達を行った。新聞の記事を見ると、日に日に最初の記事は地震の話に変わり、地震の状況や死者の人数などが大きい文字で書かれていたそうだ。大学は校舎が10棟あったが4棟潰れてグラウンドにプレハブが作られ勉強をしていたそうだ。

(2) 父の話を聞いて

私は「家の窓から父の祖父が住んでいる長田の方向を見ると黒煙が上がっているのが見えた」という言葉を聞き、もし自分の祖父の家の方角が煙で覆われていたら、頭が真っ白になりパニックになると思う。父は黒煙を見たあとすぐに原付バイクで長田まで向かったことを聞き、火災が広がっている中でも、危険をかえりみず行動したのは、家族を思う気持ちが強かったからだと思った。また「公衆電話を使おうとしたが10円玉がパンパンの状態では電話ができなかった」ことを聞き、普段は何気なく使えるはずの公衆電話でさえ、非常時には人が殺到して使えなくなることを知った。自分たちはスマホが使えるようになり、公衆電話を使う人が減ってきている。今の世代は「通信手段がある＝連絡が取れる」と思うことがあるが、もし災害が発生しスマホが使えなくなると今の世代はどのように生活していくか想像できない。

私は父の話を通して、当たり前前の日常がどれだけ大切であるかを感じた。地震によって今までの生活が壊れ、安心して眠ることも、家族と過ごすことも、簡単ではなくなることを知った。また、家族の安否を心配して危険な道を原付で走った父の姿からは、「大切な人を思う気持ち」は行動に現れることを知った。

2 石川県被災地支援活動

私は、この3年間で様々なボランティア活動に参加させていただいた。中でも一番印象に残っているボランティアが令和6年能登半島地震の被災地支援活動である。

令和6年1月1日に令和6年能登半島地震が発生した。私は親戚と家でお昼ご飯を食べ終わり少しゆっくりとしている間に地震が発生した。ニュースの速報を見て大きな地震が起こっていることを知り、自分に少しでもできることはないかと考えたことがきっかけで、初めは募金活動に参加した。垂水

駅周辺で活動を行い、最初は石川県の地震直後の様子を現地で見てもない自分が勝手に現地の様子を伝えてよいのだろうかと思う時があったが、少しでも石川県で暮らしている方々を救いたいという思いから地域の方に呼びかけを行った。募金活動を行っている際に地域の方から「がんばってね」「ご苦労様」、「石川県の方に届けてください」などと温かいお言葉をたくさんいただき、人の温もりを感じた。活動を通じて募金活動も被災地を助ける一つの方法であることを知り、少しでも街の復旧・復興活動に貢献できると考えた。また地域の方の様々な思いを込めて募金してくださる様子を見て、自分一人の力では街の復旧・復興はできないが、地域の方の思いも一緒に届けることで少しでも街の復旧・復興に貢献できると考えた。

私は、発災から2か月が経った3月16日～19日に石川県志賀町に訪問した。実際に現地に行くと全壊の一軒家や半壊の一軒家、屋根にブルーシートをかぶせている家などが多数見られた。現地では依頼された方のご自宅に訪問させていただき、畳やテレビなど地震によって使えなくなった災害廃棄物を運び、仮置き場まで持っていき撤去する作業を繰り返し行った。その際に依頼された方が、当時の思い出を語りながら捨てるしかないとおっしゃっている姿を見て、私が瓦礫だと思っている中にも大切な思い出があることを知り、何も言葉が出てこず、ただ運ぶことしかできなかった。また飲食店にも訪問させていただき、グラスや食器などの割れものや災害廃棄物を撤去する際に、ガラスの踏む音を肌で感じ、気持ちの整理はできないままであったが街の復旧に少しでも協力したいと、被災地支援に取り組んだ。依頼されたご自宅での活動時間はとても短かったが、依頼された方から「元気をもらえたよ」「ありがとう」などのなげない一言が、活動を行う励みになった。

石川県の被災地支援活動を通じて、私は「災害は他人事ではない」ということを感じた。ニュースや映像で見ると、実際に現地に足を運んで目の当たりにするのでは、受ける衝撃や気づきは違った。南海トラフ巨大地震が近い将来に発生すると言われている中で、石川県で見た現実と、人々の声や想いを忘れず、自分の地域でも備えていくことの大切さを強く意識するようになった。そこで少しでも災害による被害を減らすためには一人一人の備えが重要になると考えた。防災バックの確認や、備蓄、家具の固定など身近なものですぐにできる備えはもちろん、家族で避難する場所を決め、実際に避難することや地域の方との避難訓練等の実施など、時間はかかるが実際に想定して行う備えをすることが大切になると考えた。これからの私たちにできることは想定にとらわれずに今できる備えをすることや、一人一人の防災意識を向上させることが大切になる。あの経験があったからこそ、「被害を最小限にするために今から何をすべきか」を個人個人で考えなければならない。

おわりに

初めに防災について全く知らない状態の私を環境防災科に入学させていただき、3年間様々な活動を支えてくださった先生方や部活動顧問の先生方、親に感謝したい。私はこの3年間環境防災科で学び、色々な活動で、たくさんの方と出会い、交流していく中で防災について多くのことを学ぶことができた。ここで学べたことは当たり前ではなく、一人ではできなかったことだと改めて感じた。私は特にお忙しい中私たちのために時間を割いていただき、私たちに色々な視点から防災を教えていただいた講師の方に感謝したい。そして教えていただいたことを無駄にせず、自分の目標である防災士の資格を取るために大学でも防災について学んでいきたいと考えている。人は成長するたびに過去の記憶は少しずつ薄れていき、31年前に発生したあの地震も時間が経つにつれて少しずつ記憶から消え、最終的にはなかったことのようにになってしまう。そうならないためにも、3年間環境防災科で学んできたことを最大限に生かす活動を行っていき、次の世代に備えの大切さを伝えていきたい。そして31年前に発生したあの地震の教訓を未来の世代にも繋いでいくために「語り継ぐ」を執筆した。

残したい思い

加藤 朱里

はじめに

私は阪神・淡路大震災を経験していない。今まで私の中で阪神・淡路大震災は大きな被害があったという印象はあるが、実感が湧いていなかった。しかし震災体験をした父の話聞いてから、私の心の中で阪神・淡路大震災を自分のことのように感じ、阪神・淡路大震災について知りたいと思うようになった。父の見たこと、聞いたこと、感じたことを誰かに知ってほしいと強く願い、私が語り継いで残したいと思う。

1 阪神・淡路大震災

(1) 父の記憶

父は当時、神戸市須磨区鷹取町に住んでいた。父の家は古い木造建築であり、地震により被害を受けた。瓦が落ちて家が歪んでいたため、半壊と判断された。地震が起きた時に、父と家族は2階で寝ていた。大きな揺れを感じたときには、何が起きたかわからなかった。揺れが収まったときに外の様子を見に行くと、斜め前の家がぐちゃぐちゃになっており、1階の部分はなくなってしまっていた。前の家に住んでいる夫婦がいたが、揺れが収まって外に出てきたのは男性だけだった。女性は瓦礫の下敷きになって亡くなったと分かった。父は助けを呼ぼうと思ったけれど、同じように他の家も壊れて数えきれないほどの被害が出ていた。そんな様子を見て、助けの呼びようがなかった。家が壊れている様子を見て、父は自分の家もいつ壊れるかわからないと家の中にいるのではなく、とりあえず家族と一緒に車の中で避難した。その後も余震は何度も続いた。余震が続く中、父の家の近くにある鷹取中学校に避難した。ただ避難所に避難したところで、食料や水は用意されていなかった。そのため持っていたウーロン茶を使い、やかんに入れて沸かしてカップヌードルを食べた。とてもじゃないが食べられる味ではなかったそうだ。このような状況を見て、父は食料がなかったら困ると思い、食べ物が売っているお店を探した。どこも営業しているところはないと思いながらも、食料を探した。幸運にも近くのコンビニエンスストアが開放されており、食料を配ってくれた。もう一度避難所に戻るとたくさん人がいた。また地震がきたら、避難所の建物も壊れてしまいそうで怖かった。その理由からグラウンドが安全だと判断して、グラウンドの中に車を置いた。夜になると寒さが厳しかったため、灯油ストーブをつけていた。

火災が起こった次の日、周りの様子が知りたくて、鷹取駅を見に行ったら、駅をもう少し向こうに行くと、色んな建物が燃えていた。近くを車で通ったときに、車の中にも火の熱さが伝わってきたそうだ。道路沿い一帯が燃えており、熱さが印象に残っているという。その時に父は「火災の現場で埋もれていたらきっと人は助からないのだろう」と感じた。そして、別の日に父は公園でおじさんが「上を向いて歩こう」を歌っているのを見かけた。家族を亡くしたのか仕事を失ってしまったのか事情は分からない。しかしその様子からつらいことがあったということには違いなかった。しかもそのおじさんはよく見ると涙を流していたそうだ。「あのおじさん、今どこにいるだろう。」とこのおじさんのことを父は未だに思い出すことがある。

ある程度身の回りが落ち着いた頃に、父は大学に通うため車で移動していた。その時に神戸と大阪の景色の差があったことを覚えているという。武庫川を超えると何事もなかったかのように、大阪には光があるのに、神戸に帰ると町全体が暗くて活気がない。大阪と神戸の差を感じた。また地震から約1か月経った後、叔母の友達が快く家に呼んでくれ、約1か月ぶりにお風呂に入ることができた。お風呂に入れない日がこんなに続くと思っていなかった。大きな災害が起きるといつお風呂に入れなくなるか分からないため、お風呂に入れることは当たり前のことではないと認識するようになった。父は22歳の時に震災を経験した。そのことを父は若くてよかったと思ったと感じたらしい。なぜなら若いし、まだまだ頑張れると思ったし、前を向くことができたからだという理由からだそうだ。それから神戸のまちの復興に貢献しようと思い、4月に社会人になってから今まで建築業界で働き続けている。

(2) 話を聞いて思ったこと

私は、話を聞いてから父が阪神・淡路大震災を経験して色々な思いを抱えていたことを初めて知り、驚いたことが多かった。父が震災を経験したという事実は知っていたが、詳しくは聞いたことがなかった。話の中で、私は2つのことが印象に残った。1つ目は、地震が起きた時に近所の人々が亡くなったことだ。

家がぺたんと潰れてしまうことで、瓦礫の下敷きになって命を落としてしまうというのは私にとってもショックな話だった。その前の家は、今まで夫婦で暮らしていたのに地震によって亡くなり、会えなくなってしまうのはとても悲しいことだと思った。この近所の人の話を聞いて、大切な人を守るためには災害を乗り越えられる強い家に住むことが大事だと思った。

2つ目は、公園で「上を向いて歩こう」を歌っていたおじさんのことである。この話を聞いた時、「おじさんは本当に限界だっただろうな。でも、歌を歌うことで頑張っって何とかして自分を奮い立たせていただろうな。」と思った。きっとおじさんはつらくてたまらなくなっただと思う。私の解釈は違っているかもしれないが、歌はその時その時の心に寄り添ってくれるものだと思う。そのおじさんにとって、本当にしんどくて精神的にも体力的にも追い詰められた時に歌いたくなる歌が「上を向いて歩こう」だったのでないかと考えた。父や公園で歌っていたおじさんを含め震災を経験した人はみんなとても精神的にも身体的にもしんどい状態だっただろう。それでも何とか前を向こうとしていたのだと思った。阪神・淡路大震災の話は父にとって話しにくい内容だったと思う。話すときには必ず震災の頃の記憶を辿って思い出さなければいけないからだ。父がつかなくなるのではないかと少し不安な気持ちもあったが、父はそんな素振りをすることなく話してくれた。しかし話が終わった時に、父は「地震ってほんまに怖い。震災を経験してから、小さい地震が起こっただけでもびくっとしてしまう。反応してしまうから身体もきっと覚えとるのやと思うわ。」と話した。そんな様子には見えなかったから、内心びっくりした。ずっと父の中で、地震が怖いという思いは消えていないのだと感じた。父のその言葉を聞いてから、本当は父が今まで他の人に話さなっただけで、地震に対して怖い思いを未だに抱き続けていると感じた。父はめったに弱気を吐くことがない。そんな性格だからこそ、今まで耐えてきたと感じ取った。あの震災を経験したことが、父の心にかいかに深い傷を負わせたのかが伝わった。私は「地震を経験した傷は治ることはないし、ずっと心の中に残り続ける。」ということを実感した。そして、そういつたつらいことがあっても、父は前を向き続けて今まで生きてきたから今の父があるのだと確信した。苦しい状況を乗り越えてみんなが前を向き続けてきたからこそ、神戸のまちが存在しているということ私をもう1度確信した。

おわりに

父の話を聞き、私は父のように前を向く姿勢を大切に人々のために生きる人生を送りたいと考えた。そう思ったのは、前を向いて進む姿勢が生きる上で必要だと気づいたからである。父にとって阪神・淡路大震災の記憶は、今でもできれば思い出したくないほどつらくて苦しいものだったと思う。それでも、父はあの時に目を逸らしたい事実から逃げなかつた。明るい未来が待っていると信じて、ひたすら前を向いて生き続けた。私はどんなにつらくてもあの時こうしていればよかつたと落ち込んで後悔するのではなく、目の前のことを1つ1つ一生懸命に取り組んで生きるのがどれだけ大事なのかを父の姿を見て学んだ。そして思い通りにいかないことがあつたとしても、諦めずに経験したことを力に変えて学んで成長することが自分らしい生き方をするのに繋がると感じた。私も父のように前向きな姿勢を大切に、困っている人の役に立てる人生を送りたいと考える。

私はこれからも防災と英語を結び付けて深く学び続けたい。もし自分が英語でコミュニケーションを取れるようになれば、災害時日本語が分からない外国人に必要な情報を伝えることや、言葉が通じないことによるすれ違いを減らすことができる。そして、自分の言葉で日本の防災について伝えることも可能になる。海外の防災に対する考え方をすることもできる。そのために私は留学をしたいと考えている。異文化理解は防災を考えるうえでとても大切だ。実際に海外で生活してみないと気づけない価値観や特徴もあると思う。そういったことを授業も含めて学び、災害時には異文化を理解して外国人被災者に安心してもらえるように会話のやりとりをしてその時に合わせた適切な配慮をしたい。

震災を語り継ぐ防災の学び

加藤 海音

はじめに

多くの命が失われた阪神・淡路大震災から 31 年が経つ。震災を経験していない世代として、今後発生する可能性のある未曾有の災害に備え、より多くの命を守るためにも、震災の教訓を語り継いでいくことが大切だと感じている。災害はいつでもどこで起こるか分からない。だからこそ、防災の知識や心構えを次の世代に伝えていくことが必要であり、私たち一人ひとりにできることを考え、行動していかなければならない。

私自身、これまで大きな災害を直接経験したことはない。しかし、防災教育や被災者の話を通して、災害がどれほど人の命や日常を奪うものかを想像することはできる。そして、震災を想像することで初めて、「自分ごと」として防災について考えることができるようになった。

1 阪神・淡路大震災の体験

(1) 父の話

父は当時、香川県で一人暮らしをしていた大学生だった。父は震災の前日にアルバイトに行っていて、家に帰ってきたのが震災当日の午前 4 時頃だった。入浴などを済まして、就寝しようと布団に入った時に地震が発生した。地鳴りのようなものがして天井からは揺れによって木くずのようなものがポロポロ落ちてきていた。慌てて外に飛び出すと、外にあった電柱にある電線が、縄跳びの縄のようにぐるぐる回っていた。揺れが収まり部屋の中に戻ると部屋の柱が曲がっていた。6 時過ぎのニュースでは神戸市内が地震による火災で燃えている映像を見て恐怖を覚えた。8 時過ぎに大学に通学しようとしたら、JR が止まり学校が休講になったので、その日は 1 日ニュースを見ていた。神戸の友達 2 人に連絡したが繋がらなかった。しかししばらくして連絡がとれて安心した。

(2) 母の話

母は当時、徳島県で専門学校に通っており寮生活をしていた。母は就寝していて、大きな地震の揺れで目が覚めた。あまりにも大きい地震だったので、寮のすぐ近くの公衆電話のところまで走り、実家に電話をした。地震後すぐは電話が繋がったが、しばらく経ってからは繋がらなくなった。その時は不安に思ったが、再び電話が使えるようになりほっとした。その日の授業中も、余震が何回も続いていて、なにも起こっていないときでさえも体が勝手に揺れている感じがしていたようだ。昼食時に寮のテレビでニュースを見たら、神戸が燃えているニュースを見て大変なことが起こっていると思ったようだ。

(3) 感じたこと

当時の両親の話聞いて、地震の恐ろしさ、一瞬で今までの当たり前を奪ってしまう自然の力、そしてその時代を生きた人々の不安や混乱が、まるで自分のことのように伝わってきた。父の話の体験談の中で、私が特に印象的に感じたことは、「電線が縄跳びの縄のようにぐるぐる回っていた」という場面だ。地震の揺れがどれほど強く、どれほど異常だったのかが、その話をきいてからはっきりと想像できた。また、柱が曲がっていたという話からも、建物自体に大きな影響を与えるほどの、自然の強い揺れだったことがわかる。自分がもしその場において被害を経験していたら、きっと何が起こったのかが理解できず、ただただ恐怖に震えていたと思う。夜明け前の静けさの真っ暗の中、突然日常が壊されるというのは、想像するだけでも恐ろしい。母の話の体験談の中で印象に残ったのは、「余震が何度も続き、余震がないときでさえ体が揺れているように感じた」という話だった。地震というでき事そのものだけでなく、その後も人の心や体に大きな影響を与え続け、物理的な被害だけではなく人を恐怖にさせたり不安にさせたりしているのだと知り、自然災害の持つ力の大きさに私は恐怖を感じた。また、公衆電話で実家に連絡を取ろうと必死になったという話からは、大切な人の無事を確かめたいという気持ちが強く伝わってきた。今のように、スマートフォンやインターネットが普及していない時代では、連絡が取れなくなった時の不安は、今よりもっと大きかったはずだと思った。また、二人ともテレビで神戸の街が火事で燃えている映像を見たときに、「大変なことが起こっている」と思ったという共通点があった。遠くにいても、その映像から地震の被害や被災地の深刻さが伝わり、災害が他人事ではなく、自分の身にも起こりうることだと強く感じたのだと思う。ニュースを見ながら何もできず、ただ恐怖と不安に包まれていた両親の姿を想像すると、大変だったのだろうと感じた。今回、父と母の体験談を聞いたことで、震災

の記録をただ知識として知るだけでなく、それを実際に、体験した人の目線で考えることの重要性を学んだ。

そして、災害はいつ自分の身に降りかかってくるかわからないということを、あらためて強く意識するようになった。だからこそ、日ごろの備えや正しい知識を身につけておくことが、災害に強くなることができ、とても大事なことだと思う。また、どんな災害が起こっても、大切な人とのつながりを失わないように、日頃からの人との関係も大切にしていきたいと思った。二人の体験は、地震の恐ろしさだけでなく、人間の弱さと強さの両方を感じさせてくれた。これからは、震災を知らない世代として、そういった体験や思いを受け継ぎ、これからの災害に備えることにつなげていき、被害を減らすために活用していかなければならないと思う。そして、聞いたことをしっかり語り継いでいく責任があると強く感じている。

2 夢

私は将来小学校の教員になることを目指している。3年間で人とのかかわり方やうまく相手によりそう力を学び、人として成長することができた。私は環境防災科のボランティア活動で小学生に向けた防災に関する出前授業や、芦屋特別支援学校の交流授業のボランティアに積極的に参加した。特に私は地域の小学生に向けての出前授業が今でもやりがいを感じており、自分の将来の夢に結び付けることができた。私は小学生に対して、液状化現象について授業を行った。小学生は初めて知ったことに興味を持ってきて、授業に積極的に取り組んでくれたことが、今でもとても印象に残っている。小学生に伝わるような言葉遣いに気を付けることや、少しでも興味を持ってもらえるよう内容にこだわった。自分が小学生に対して授業をしていく中で、学校の先生がどのようにして生徒を守るのかや、学校にいる時の災害対策などを考えるきっかけにもなった。先生は多くの命を守らないといけないことになる。そこで、この環境防災科で学んできた力があると、いざ災害が起きた時にでも的確な行動を行えたり、どのような対策を行うことで災害への被害を減らすことができるのかや、自分自身と子どものことも守るための対応などをしっかり考えたり」することができると思う。

学校は、安全管理に重点を置いていると思う。一日の大半を過ごすことになる学校をより安全にそして安心した学校生活を送れるようにするためには、安全管理といったことが非常に大切になってくるなと思った。学校の教員の中にも、それぞれ役割がある。廊下や教室などの安全確認をする人であったり、子どもの不安や恐怖に寄り添ってあげる先生であったり、けがなどをした生徒に対しての養護をする人がいたり、地域から避難してきた人たちの避難場所の誘導であったり、学校の本部の運営をおこなう人だったり、様々な役割が災害時の学校現場にはある。そういった場面でも、活躍できる人になりたいと思う。そのためには、教える側の私自身も、これまで習ってきたことを伝えたり身にしみこませたりして、常に学び続ける姿勢を持ち、社会の変化や新しい情報に敏感であることが求められる。教員という立場になっても、生徒を守る気持ちや一人ひとりに寄り添う気持ちや、謙虚な気持ちを忘れずに、防災に限らずさまざまな分野の学びを深めていきたい。

おわりに

環境防災科での3年間は、私にとってただの高校生活ではなく、「命と向き合う時間」であり、「災害に対する備え」を考えるための貴重な時間であった。「語り継ぐ」の制作を通して、たくさんの人の話を聞くことができた。またボランティア活動や出前授業を通じて得た学びや気づきは、相手の気持ちに合わせて話すことの重要性や、うまく人に寄りそう力を学ぶことができた。このような力は、この環境防災科でしか学ぶことができない、貴重な経験になった。防災というテーマに3年間真剣に向き合うことで、自分自身の価値観や将来像が大きく変わり、多くの人の命を守りたいという気持ちに変わっていくことができた。

私が環境防災科で学んだことを、次は私が大学、社会人を通して誰かに伝える番だと思っている。この3年間の防災や災害の対策の学んだ知識や経験を、これからも多くの人に伝え、語り継いでいき私が多くの人の命を守っていけるような人になっていきたいと思っている。

未来へ残す

鎌野 萌生

はじめに

阪神・淡路大震災から31年が過ぎ、当時のまちからは想像ができないほど、新しい神戸へと生まれ変わっている。まちの発展と一緒に薄れる記憶を私たち環境防災科が繋いでいく責任がある。防災とともに過ごしてきた3年間、関わってきた人の教訓と体験をこの「語り継ぐ22」で伝えていきたい。

1 阪神・淡路大震災

(1) 親戚のAさんの体験

Aさんは震災当時尼崎市に住んでいる社会人だった。従業員が定時からスムーズに仕事ができるよう、いつも起きる時間より1時間早い5時30分には起きていた。寒さもあり、石油ストーブのスイッチを入れ、テレビを見ながら仕事の支度をしていると、ほどなくして、「ゴゴゴ」と地響きが聞こえてきた。その直後に揺れを感じ、地震だと思ったのも束の間、激しい横揺れへと変わった。すぐに隣で寝ているAさんの母を掛け布団で覆って守った。食器棚が気になり、振り返ると食器棚の扉がすごい勢いで左右に動いている光景が目飛び込んできた。その食器棚には地震対策で突っ張り棒をしていたため、倒れることはなかった。つけていたストーブは揺れを感じてオフになっていた。地震の揺れは体感的にはものすごく長く感じた。その長い揺れの中で、畳に座っていてお尻が左右に揺れたこと、自宅が古くてギシギシと音を立てていたこと、この揺れはいつまで続くのかという恐怖、どれも鮮明に記憶に残っている。

その後自宅の被害はあまりないように思えたので何をすべきか考えたとき、ライフラインが機能しているかの確認をした。電気、ガスは機能していなかったが、水道は機能していた。念のため水を確保しようと、近くのコンビニへ自転車で向かった。コンビニにつくと、24時間営業のはずが、棚から商品が散乱し営業できておらず、ドアが施錠されていた。何人かのお客さんもいて、「せめて飲み水だけでも売ってほしい」とお願いしていた。待っている間も余震が続き、ガラス張りのコンビニの壁が風に揺れたシャボン玉のように波を打っていて、見たときは怖くてガラス壁から遠ざかった。なんとか飲み物を確保し、帰宅した後は自宅周辺を見て回った。そのときに一番衝撃だったのは、新幹線の橋脚が崩壊していたことだった。電気がなく情報が入ってこず、神戸が悲惨なことになっているのは知らなかった。自宅は半壊だったため自宅で避難していた。

(2) 体験談を聞いて

私はこの体験談を聞いて、命が助かったのは「偶然」ではなく、日ごろの備えや、ちょっとした行動が大きな意味を持つのだと思った。この日いつもと同じ時間に起きていれば結果は変わっていて、助かっていなかったかもしれない。突っ張り棒をしていなければ、棚が倒れて下敷きになっていたかもしれない。そういう日々の対策やちょっとした行動が重なって助かった命だと思った。大きな地震はいつ来るかわからないからこそ、普段の防災意識や小さな準備が自分や大切な人の命を守ることに繋がると気づかされた。また、30年たった今でもこんなに鮮明に思い出すことができるのだと思った。未災者の人からしたら「30年前のでき事」と思うかもしれないけれど、実際に体験した人からしたら、あの体験は今でも衝撃的だったのだと思った。自分の町がいつもの姿でなくなる恐怖感や、地震直後の人々の温度感など、当時を過ごしていた人からしたら衝撃的で心に深く刻まれていることだと思った。そして、日々起きていることに関心を持つことが大切だと思った。その関心がこれから生きていくための備えになり、大切な人の命を守る手段になるのだ。

2 将来の夢

私は将来スポーツのトレーナー系の仕事に就きたいと考えている。この3年間環境防災科の活動と同様に部活動の方にも力を注いできた。その中で私はケガをすることのしんどさを知った。自分が思うように動けないというもどかしさや、他のライバルは今も練習しているのにという思いからの焦りなど、心も体もしんどい期間だった。そしてその期間中に整体師の方のもとへリハビリに行って、体のサポートはもちろん、怪我をしたことによる心の不安も聞いてくださった。大会前の記録の不安やプレッシャーをその

整体師さんのおかげで力に変えることができた。だから次は自分がケガしている人をケアできるような立場になろうと思った。私はスポーツ系のトレーナーの中でも特にアスレティックトレーナー(AT)に最も興味を持っている。ATとはスポーツ選手やアスリートがより良いパフォーマンスを発揮できるようなサポートを行うために、怪我の予防や現場の応急処置をする。ATとして現場の応急処置はもちろん、アスリートの心の支えになるようなトレーナーになりたい。

また、ATとしてスポーツだけでなく防災にも絡めていきたいと思った。そして、私はAさんの話を聞いて「体と心をケアできる」トレーナーになりたい強く思った。実際に東日本大震災のとき、避難所でエコノミークラス症候群を予防するためにマッサージやボールを使って体を動かし、避難所の方々の体や心を和らげたという記事を読み大変感銘を受けた。そこでATはスポーツだけでなく、あらゆる場面で人の心に寄り添うことができる職業だと感じた。そして様々な現場で一人一人の健康と心に寄り添えるATになりたいと思った。震災直後の話を誰かに話して心が落ち着くなら、自分もたくさんお話を聞いて、心の二次災害を防ぎたい。環境防災科で3年間過ごしてきていろいろな職業の方との関わりがある中で、皆さんに共通して言えるのは、「誰かを守るために日々の仕事を全うしている」というところだ。私は防災に強いATへの一歩として、防災運動会のボランティア活動に参加した。当日行った競技は全て、運動と防災を関連付けるようにした。体を動かして避難時の動作を身に着けることで、楽しみながら動作を学ぶことができる。体を動かすときに頑張る姿を覚えてくれる姿から、自分が学んで伝えたことが誰かの命を守るきっかけになったのだと嬉しくなった。この防災運動会で得た動作は実際に災害が起こらないと本当にためになっているかはわからない。しかし、いざ災害が起きた時に、自信を持って周りの人に伝えることができたり、災害時に自信を持って行動できたりするようになると感じ、そのような人材を育成していくことがこれからの時代に必要なことだと思った。環境防災科で学んだことが災害時に誰かを救う力になると信じて、社会に貢献できる人材へと成長していきたい。

3 南あわじ出前授業

私は3年間、南あわじ市の小・中学校で防災についての授業を行う南あわじ出前授業に参加してきた。南あわじ市は南海トラフ巨大地震で大きな被害があると予想されている地域だ。防災の重要性を理解してもらい「防災は大切な人の命を守ることができる」ということを伝えたいと思い参加を決意した。私が出前授業で最も工夫したことは、防災について興味が湧くような授業作りだ。なぜなら、子どもたちにとって防災は「自分事はでない」というイメージが強いと感じたからである。自分事であると考えを深めてもらうために、一緒に授業をする仲間との話し合いやリハーサルを重ね、たくさんの案を出し合った。そこで相手の年齢や状況に合った伝え方を意識するという話し合いになった。低学年には劇、防災クイズなど遊び感覚で学んでもらい、高学年から中学生には講義だけでなく、ワークショップを行い、全員が参加してもらえるような授業をした。その結果、小学校の先生からは「子どもたちがいい雰囲気ですべてを受けている。」と評価をいただき、相手が興味を持ちやすい方法でアプローチすることができた。さらに、子どもたちが「帰ったら家族に話してみる」と感想を述べており、真剣に話を聞いて、実行しようとする姿を見て、私が伝えたい思いがしっかり届いていると実感した。そして、子どもたちが主体的に動く姿から、私が発信したことは誰かの命を守るきっかけになったのだと勇気づけられた。この経験から私自身の防災力を高めることができた。相手に教えるためには自分自身が防災について知っておく必要がある。「先生」として小中学生に教えるために、日々の授業から意識するようになった。そういった、誰かに教えるための責任感というのが自然に芽生えるきっかけになった。

おわりに

私はこの執筆を通して、環境防災科としての伝統を引き継いでいると思った。22年間繋いできた語りは、阪神・淡路大震災を経験された方から、震災を経験していない私たちにまでしっかり引き継がれていると思った。さらに未来の災害までのことを見据えて「過去の教訓を語る」だけでなく、「過去の教訓とともにこれからの未来の災害を考える」ことをしている。それをこれから来るといわれている巨大地震に備えたいと思った。まだまだこれから未曾有の災害が来ると予想されている。その災害から大切な人の命を守るために学んできた、この3年間の学びをここで途切れさすのではなく、自分が将来出会った人の命を守っていき様々な人に伝えていきたい。またこの3年間の学びは自分の将来の夢の幅を広げてくれたと感じた。環境防災科でしか体験できない貴重な経験が自分の進路、将来の夢に大きく影響していると実感した。この貴重な経験をこれから先も様々な場面で発揮していきたい。

未災者の私が

岸 宥里

はじめに

兵庫のまちを襲い人々の財産、命、心を奪った阪神・淡路大震災から31年が過ぎた。阪神・淡路大震災を経験していない未災者、これから生まれてくる次世代を担う人々に阪神・淡路大震災を風化させないために「語り継ぐ」を執筆する。執筆するにあたって私が3年間で学び、経験し、感じ、考えたことをここに書き記す。

1 阪神・淡路大震災の被災体験

(1) 母の体験

阪神・淡路大震災が起きた当時母は加古川に住み加古川の病院で学生アルバイトとして病院に勤務していた。母はいつも5時くらいに起きており、発災の5時46分は化粧をしていた。揺れが来た直後は化粧台が揺れ、母は鏡を必死に押さえていたようだ。家の中も外も被害はなく、友人も被害はなかったようだ。母は仕事に自転車で通勤していたため、いつも通りの時間に通勤できたようだ。病院もさほど被害はなかった。そして病院のテレビで地震の被害を知った。テレビでは壊れた阪神高速や長田のまちの炎が消えない光景が印象に残っているようだ。

(2) 新聞記事

阪神・淡路大震災が起きた後の新聞記事では、長田区の商店街が燃えている写真があった。その写真のそばには消防士が立ちすくんでいた。その写真を見ると火事の炎が強く消防士が何もできない状況のような様子を読者に伝えるような記事だった。しかし記者がその現場にいた消防士に話を聞くと、「火事がすごくて何もできなかったのではなくて、被害を最小限に食い止めることに徹していた。だからいろんな災害が起こったときに少しでも被害が広まらないようにする努力が大事だ」と書いてある記事を読んだようだ。直近の記事では消防士は何もできなかったのかのように書かれているが、数日経って本当のことを聞くと、被害を抑えようと努力していたということを知り、新聞の記事を見ただけで何もできなかった消防士と決めつけてしまったことに申し訳なさを感じたようだ。

(3) 母の話を聞いて感じたこと

私は母がこの新聞の記事のことを何度も繰り返して話す姿に、当時の母が感じた気持ちが伝わった。私は単純なので人から聞いた話や一目でみた状況をすぐに信じてしまうところがある。しかし、母の話を聞いて、根拠のない話を信じることで一生懸命世の中のために動いていたのに誤解されるのは消防士にとってはやるせない気持ちになったと思う。私はこれまで、「人の役に立つ」ということは、目に見える成果や行動を示すことだと思っていた。しかし、母の話を聞いて、表には出ない支えや気づかれぬ努力も、同じくらい尊くて意味のあるものだと思った。私は出前授業など人前で立って話す機会が多いので、この新聞記事のように誤解を招くような発言や物事を憶測で語ってはいけないと学んだ。これからは自分で確かめたいと思う。ただ、何ができるかわからなくてもあきらめずに動こうとした姿勢は本当に大切だと思った。

2 令和6年能登半島地震被災地支援活動

令和6年(2024年)1月1日16時10分、石川県能登地方においてマグニチュード7.6の地震が発生し、震度7を観測した令和6年能登半島地震。私はこの地震で被災した石川県に2回ボランティアとして訪問した。私が石川県を訪問しようと考えた理由は、被災されて困っている人を助けたい、ニュースや新聞では報道されない被災現場での状況を自分の目で確かめたいと考えたからだ。1回目の石川県に行った際は災害ボランティアとして被災地を支援した。活動内容は崩れた家の災害ゴミの運搬を主に行った。この訪問では地震から2か月が経っていてもまだ復興の段階にたどり着けていない石川県を見て、自分の想像していた現場と違うことに驚いた。そこからまだまだ長期的に支援をする必要性を感じた。2回目の訪問では仮設住宅を訪問した。支援物資の配給拠点になっている集会所から、仮設住宅の住居者の方に支援物資をお渡しした。その際に、仮設住宅の住居者の方とお話する機会があった。私は被災者の方と直接話したことがなく、被災した状況や心のお話をどこまで聞いていいのか、自分の言葉で相手を傷つけたりしないかなど不安だった。そのため最初に訪問した時は自分から話せず、無言の時間もあったが、仮設住宅に住んでいる方が私達に「体調どう」、「どこから来たの」など声をかけてくださった。その

優しさで、私の緊張がほぐれていって少しずつ自分から話せるようになり人の温かさを感じた。また、住んでいる方の中には、「ボランティアに来てくれることがうれしい」と涙ながらに言ってくださった方もいた。この言葉を聞いて実際に現地に行くことが被災者の方の心の支えになることがあると学んだ。この地震から時が流れても、私は石川県に行かせていただいた身として、忘れず、記憶していきたいと思う。

3 夢と防災

私の将来の夢は看護師である。私が看護師になりたいと思ったきっかけは2つある。

1つ目は母の影響である。今回母に聞いた話では実際に被災者を支援したというものではなかったが、消防士の被災者のために必死に動いている姿を見て、感動したと言っていた。母の話聞いて、私も表面だけを見て人や状況を判断するのはよくないと感じた。これは看護師の仕事にも通じると思う。患者さんの痛みや苦しみは目に見えるけれど、看護師が日々観察、見守り、支え、細やかな気配りをする姿は、外からは見えにくいと思う。それでも、その努力が患者さんの命や心を支えていることを忘れてはいけないと感じた。看護師という仕事は、技術や知識だけでなく、人への思いやりや強い責任感が必要だと思う。そして、どんなに困難な状況でも、あきらめずに最善を尽くす姿勢が大切だと考えた私は、知識や技術を身につけることだけでなく、相手のことを想って動けるような人になりたいと思う。私も今はまだ学ぶことが多いけれど、これから少しずつ経験を積み、母や震災時の消防士のように、誰かの力になれる看護師になりたい。不安や苦しみを抱える人のそばに寄り添い、支えられる存在になれるように、努力を続けたいと思う。

2つ目は環境防災科で学んで、活動してきたことである。その中でも令和6年能登半島地震被災地支援活動が終わった後に、自分をもっと被災者の近くで寄り添いながら、もっと役に立つためにはどうしたらいいのかを考えた時に、災害看護ナースは災害時に被災者の身体と心の密接に支援ができるのを知り、なりたいたと思った。また、兵庫県の病院で働いている母は病院から能登の災害支援に行かないかと誘われたそうだ。その話を母から聞いて、距離が離れているのに、助けを必要とする人がいることに驚いた。私は、それを知り、自分も助けを求めている人の元へ行き、少しでも安心できるような生活を送るためのお手伝いをしたいと考え、看護師への夢がより一層深まった。

看護師と防災は災害時、緊急時で関わっている。災害時は災害看護で国内外に災害が発生した際に医療や看護の知識・技術を提供し、ほかの専門分野と協力・連携しながら行う看護活動である。またDMAT（災害派遣医療チーム）もあり、災害時には、身体面だけでなく、精神的にも患者さんを支えていかなければならない。また、平時には手指消毒や免疫を上げるように指導することで、避難所で生活していても元気に過ごせるようになる。それ以外にも医療機器、避難ルートの点検をしっかりとすることで、被災時でも迅速に救助活動を行うことができる。

私が看護師になったら臨機応変に対応でき、みんなが頼れる看護師になりたい。災害時には普段と違う生活で不安になる方も多くなるだろう。私はそのような人たちに気づいて、不安やストレスを軽くできるような支援をしたい。不安や悩みを初対面の人に明かすのは難しいと思うが、笑顔で対応していれば少しは頼りやすく、親しみを持ってもらえると考えている。身体の健康だけでなく、心の健康も共に支えられるようになりたい。そのために、日頃から笑顔で頼りやすく、親しみやすい看護師になり、患者と関わっていききたい。

おわりに

語り継ぐを執筆するにあたって、この3年間で自分が経験したこと、考えてきたことを振り返り、環境防災科で過ごした時間が貴重な時間だったと改めて感じた。学びを得る中で、防災に関する知識はもちろん、その知識を伝える方法も身につけた。同じ災害の勉強をしても、そこから自分で考えたことや、起こした行動は違う。そのため私は、自分にしか伝えられないことを大切な人に伝えていきたい。

託された思い

河野 黎

はじめに

阪神・淡路大震災から 31 年が経とうとしている。そんな中で私は環境防災科に入学し震災や防災について深く学んできた。実際に被災した現地を訪れ震災の爪痕を肌で感じ、被災者、語り部のお話を聞いた。そんな経験をした私にしかできないことがある。それは語り部になることである。現代を生きる高校生である私たちが語り継ぐことで、より社会に震災の記憶が浸透していくと考え、この「語り継ぐ」を執筆する。

阪神・淡路大震災

(1) 近所に住む T さんの話

私は神戸市垂水区に引っ越してきて約 10 年になる。この地域に関することはまだ全然知らないため、近所に長年暮らしておられる T さんが、阪神・淡路大震災を直接経験されたと聞き、お話を伺う機会をいただいた。

T さんは当時 20 代で、ちょうど結婚したばかりだった。震災当日は実家で寝ていたが、突然、朝方に大きな揺れを感じた。T さんの部屋には背の高い木製の棚やタンスが多く置かれており、その揺れで家具が一気に倒れ込んできたようだ。その瞬間は非常に危険な状況で死を感じたようだ。T さんの家や私の家があった地域は坂道が多くあり、緑地や森があり急な斜面に広がっている。地震の揺れにより、そうした場所で一斉にがけ崩れが発生し、道路や住宅が土砂で埋まってしまった。

T さんの話では、道路のアスファルトに約 30cm もの亀裂が入っていたようだ。地盤がしっかりしているような場所でも、大きな亀裂が入っていたという。私たちが普段に歩く場所が、一瞬にして危険地帯へと変わってしまったのだ。

震災後、最も困ったのはライフラインの断絶だった。水道、電気、ガスといった生活の基盤がすべて止まり、日常生活は完全に失われた。しかし T さんは、自らが経営していた店に備蓄していた水や食料を活用することで、何とか生活をつなぐことができたようだ。「備えあれば憂いなし」という言葉を、T さんの体験を通して実感した。T さんの家は、最初は「半壊」と判定されたものの、実際には玄関から中の廊下が見えるほど深刻な損壊を受けていた。後日、再調査により「全壊」と再判定され、支援金の対象となったという。この経験を通して T さんは、災害時の行政判断や制度が必ずしも実態を正確に反映するとは限らないこと、そして被災地の混乱の中では制度的な限界もあることを痛感したと話していた。

(2) 話を聞いて

私はこの話を聞いて T さんから多くの学びを得ることができた。私自身、この話を聞くまでは、震災がもたらした被害の深刻さをどこか遠いでき事のように感じていた。しかし、こうして身近な人の体験として聞くことで、災害が決して他人事ではないことを強く実感した。近年では南海トラフ巨大地震の発生も懸念されており、私たち一人ひとりが日頃から備えを意識することの重要性を再認識した。T さんの経験は、ただの過去の記憶ではない。それは、次の世代へと伝えるべき大切な教訓であり、今を生きる私たちにとっても貴重な知恵となる。自然災害は避けられないが、それにどう向き合い、どう備えるかは私たち次第だ。地域に根ざした防災意識と、隣人との信頼関係が、災害時の最大の力になると信じたい。

(3) 未災者の母の話

母は実際に災害を体験したわけではないが、阪神・淡路大震災が発生したときは、高校 3 年生で宮崎県に住んでいた。当時、テレビでは連日、地震の速報や被災地の映像が一日中報道されていた。焼け野原となった街、無残に壊れた建物、避難所で生活する人々。母はテレビの前から離れられず、「被災した人たちは今どうしているのだろうか」と、無心でニュースを見ていた。

母は高校卒業後、大阪府にある製菓の専門学校に進学する予定で、兵庫県西宮市にある寮に入るようになっていた。震災直後、ニュースでは関西地方に大きな被害が出ていることが伝えられ、母は「このまま進学できるのか」「寮は無事なのか」と不安でいっぱいであった。しかし、すぐには連絡が取れず、実際に寮に問い合わせができたのはしばらくたってからだった。建物は無事だったものの、ライフラインや交

通の混乱もあり、先の見通しは立たなかった。

高校卒業後、実際に兵庫県を訪れた母は、テレビで見ていた以上に現地の被害の大きさを感じたという。壊れた建物、ブルーシートで覆われた屋根、誰もいない静かな街並みを見て、「この地域で暮らしていた人たちは今どこに行ったのだろう」と被害の甚大さに呆気にとられていた。母はこうした経験から、災害が人々の生活や進路、心に与える影響の大きさを知った。そして、自分自身が直接被災していないが、災害の恐ろしさを肌で感じて、「自分は被災していないから関係ない」と考えるのではなく、「我がこと意識」で考える重要性を知った。また、被災地の映像を見たり、話を聞いたりすることは、他人事ではなく自分ごととして捉えることができると感じた。

(4) 話を聞いて

母の話を聞いて、私はあらためて災害の恐ろしさと、それに向き合う姿勢の大切さを感じた。母自身は直接被災したわけではなかったが、テレビの報道や現地を訪れたときの記憶から、災害がどれだけ人々の暮らしや心に傷を残すのかを強く感じていた。その話を聞くうちに、私も「災害はいつ、どこで起きるか分からない」ということを、他人事ではなく「自分のこと」として捉えなければいけないと強く感じた。私はこれまで、「自分が被災していないから大丈夫」と、どこかで思っていたのかもしれない。しかし、災害はある人を狙って起きるのではなく、誰にでも起こりうるものであり、突然、日常が失われることもある。そのときに、「備えていればよかった」と後悔するのではなく、今できる準備をしておくことが本当に大切だと感じた。また、母のように直接的な体験がなくても、映像や人の話を通して災害を「我がこと」として考えることはできるし、すべきだと思う。報道を見るときも、話を聞くときも、被災した人たちの立場に自分を置き換えるだけで、見える景色が変わってくると考える。そのような意識を持つことが、支え合う社会の第一歩になるのではないかと感じた。私は母の話を通して、災害が過去のでき事ではなく、「これから起こること」であることを実感した。そして、自分ができること、防災の準備、正しい情報の収集、身近な人との声かけを一つひとつ行動に移していくことの重要性を学んだ。この気づきを忘れず、今後は自分自身も、災害時に「誰かの助けになれる存在」になりたい。そのために、普段から備えること、知識を持っておくこと、そして周囲の人たちと支え合える関係を築いていきたいと思う。

終わりに

私は「語り継ぐ」を執筆するにあたって、これまで学んできたことを振り返ることができ、そしてそれと同時にこれからの防災との関わり方も考えることができた。この3年間を通して様々な方のお話や講義を受けさせていただき、多くの知識や、考えを持つことができた。そのことは決して当たり前のことではないということを胸に刻み、感謝の気持ちを忘れてはいけなかったと感じた。阪神・淡路大震災から31年が経った今も、被災地の傷跡や人々の記憶は決して風化してはいけなかった。私は、Tさんや母の話を通して、災害は過去のでき事ではなく、「これから起こりうる現実」だということ学んだ。そして、被災した人の体験を聞き、自分の中に落とし込むことで、次に同じような災害が起きたときに何ができるかを考える力がつくのだと思う。防災とは、知識だけでなく「人と人とのつながり」や「想像力」も大切にすることだと感じた。語り継ぐという行為は、ただ記録を残すことではなく、誰かの思いを受け取り、次の世代へ手渡すことだ。私もこれから防災を学び続け、身の回りの人に伝えていきたい。震災の教訓を胸に、「自分にできること」を考え、行動すること。それこそが、未来の命を守る第一歩であると信じている。

命をつなぐ

小林 珠生

はじめに

私は舞子高校環境防災科での講義や体験学習を通して防災を学び、特に「災害を風化させないこと」が重要だと感じている。阪神・淡路大震災から30年以上が経ち記憶は薄れつつあるものの被災者の語る教訓は今の暮らしに直結するため、その経験や学んだ知識を未来へ語り継ぎ、災害と共に生きる覚悟を持ってこの「語り継ぐ」を執筆する。

1 環境防災科での講義を受けて

舞子高校環境防災科では、これまでに貴重な講義を受ける機会が数多くあった。警察官や消防士といった災害対応の最前線で活動する専門家、そして阪神・淡路大震災を実際に体験した語り部の方々など、さまざまな立場からの声を聞くことができた。専門家の方々は、現場でどのような活動を行い、どのように人命を守るための判断を下しているのかを具体的に教えてくれた。特に消防士の方が語っていた「現場に到着するまでの数分間が最も長く感じる」という言葉が印象に残っている。命がかかる現場では、迅速かつ正確な判断が求められ、その重圧と緊張感の中で人を助ける姿はカッコいいと感じ、もっと消防士について知りたいと思うようになった。語り部の方々の話は、実際に被災したからこそ伝えられる話を聞かせてくれ、重みと現実味があった。ある方は「避難所に行く途中で、もう少し早く準備していれば救えた命があったかもしれない」と涙ながらに語っており、その言葉が胸に深く刻まれた。また、「日常の中で『まさか』と思うことを常に想定して行動することが、命を守る鍵になる」という言葉も強く心に残っている。被災した方々が感じた後悔や苦しみを直接聞くことで、防災に対する意識がより一層高まった。これらの講義を通して、災害は決して非現実的なでき事ではなく、明日にも自分の身に降りかかるかもしれない現実だということを感じた。命を守るためには知識や訓練だけでなく、人の痛みを理解し、助け合う心が必要であることを学んだ。

2 阪神・淡路大震災

(1) Yさんのお話

私は、母の友人のYさんに話を聞いた。Yさんは当時、長田区に住んでいた。その日は仕事の疲れで寝室ではなくこたつで寝ていた。突然ゴゴゴという音がし、その3秒後に経験したことのないような強い揺れを感じた。揺れが収まるとすぐに起き、家の被害を確認するために全部の部屋を見回った。家の中は、お皿が割れ破片まみれになっていた。寝室に行った時に、ベッドの枕のところに本棚が倒れてきているのを見て、ここで寝ていたら大怪我をしていたと思うと血の気が引いたという。外に出て呆然と立ち尽くしていると近所の人に「ここは危ないから避難するで」と言われ姿が変わり果てた街を走った。倒壊がひどい場所に近づくにつれて「助けて」という声や泣き声が聞こえてきて、事の重大さを理解してきた。子どもが埋まっているという声を聞いてYさんは、近所の人と一緒に瓦礫をかき分けて助けた。近くの小学校の避難所につくと、そこは人が入る隙間もないくらいぎゅうぎゅう詰めだった。近所の人と別れ、座れそうな場所を探していると、いきなり名前を呼ばれ振り返るとそこには、仲の良いMさんがいた。地震が起きてから初めて自分が心を許している人に出会えて、安心感から涙があふれてきた。避難所ではみんなそのような人たちを慰め合い生活していた。食料が届いたときは、みんなが一斉に走り出し周りが見えなくなっていたのが印象に残っている。

震災から30年経った今でも、Yさんは毎年1月17日の追悼行事を見ると、あの日の光景が鮮明に蘇り、胸が強く締め付けられるという。崩れ落ちた建物や瓦礫の中から必死に助けを求める声や一瞬で変わり果てた街並み、煙の匂い、全てが昨日のことに思い出すことができる。時間が経ったからといって記憶が薄れることはなく、むしろ年を重ねるほどにあの日記憶を思い出す。助けられなかった命や、あの日交わした最後の言葉が今でも心に残り、生き残った自分には何ができることはないのかと言う思いを抱えてきた。震災を経験したことで、Yさんは「当たり前の日常」の価値を痛感した。家族や友人と無事に顔を合わせて過ごせることが、いかに大きな幸せかをあの日から学んだ。震災直後の不安の中で、命の重さや人との絆の尊さを痛感し、今では当たり前の日常が一番大切な物と心から感じている。その思いを胸に、Yさんは今、語り部としての活動にも力を入れている。地域での防災講話、地域住民への語りか

けなど、若い世代に防災意識を高めてもらうことを使命としている。Yさんは「震災の記憶は風化させてはいけない。30年経った今だからこそ、より多くの人に伝える責任がある」と思っている。

(2) 京都にいた母の話

大学生の母は、当時震度5を観測した京都に一人暮らしをしていて、震災当日はこたつで寝ていた。なぜか地震の数分前に目が覚めたという。ウトウトしていると大きな揺れを感じ、急いでこたつの中に入った。揺れが収まり、家の中を確認すると食器は無事だったが、本が散乱していた。何が起きたのかが分からずテレビをつけると、阪神高速道路が崩れているのを見て衝撃を受け、この地震はただものではないのだと感じた。両親が震源地とは遠いものの兵庫県内に住んでおり、心配になり電話をしたがつながることはなく不安が募る一方だった。約2日後に連絡が取れ安堵したのを覚えている。

(3) 話を聞いて

2人の話を聞いて、私は改めて地震の恐ろしさと、日常が一瞬で壊れてしまう現実を強く実感した。Yさんの話は、まるで目の前でその光景が広がっているかのような迫力があつた。こたつで寝ていたことが命を守る結果になったという偶然や、寝室の本棚が倒れ枕元を直撃していたかもしれないという話を聞き、災害は本当に一瞬の判断や状況で生死が分かれるのだと感じた。また、外に出た時に目の前で火災や家の倒壊が起きている状況は、想像を超える恐怖だったと思う。その中で、近所の人に声を掛けられ避難し、泣き声や「助けて」という声が響く中、必死に瓦礫をかき分けて子どもを救出したことはすごいなと感じた。避難所で知人の顔を見て涙があふれたという話には、人と人とのつながりの温かさや安心感が伝わってきた。極限状態の中でも人々が助け合い、慰め合いながら生き抜いた姿に、日々の人付き合いの大切さを学んだ。震災から30年経った今でも、Yさんはあの日の光景を鮮明に思い出し、胸が締め付けられるという。建物の崩壊や必死の叫び声、変わり果てた街並みは、時間が経っても決して消えることはない。Yさんが語った「当たり前前の日常がどれほど価値のあるものか」という言葉は、私の心にも響いた。家族と無事に過ごせる日々や、電気・水道が使えることのありがたさを、平穏なときほど忘れがちだが、こうした体験談を聞くことで、その当たり前がいかに大切なものを理解した。母の話からも多くの気づきがあつた。家の中の被害は軽かったが、テレビで阪神高速道路の崩落映像を見て大きな衝撃を受け、ただならぬ事態であると感じたと語っていた。また、兵庫県内に住む両親（私の祖父母）に連絡がつかず、不安で胸が押しつぶされそうだったと聞き、通信手段が途絶えたときの恐怖を想像した。情報が不足し、家族の安否がわからない時間がどれほど長く感じられるか、どれだけ不安だったのかを容易に想像することができた。2人の話を通じて私は、災害は避けられない脅威である一方で、日頃からの備えや地域との関わり次第で被害を減らせることを学んだ。例えば家具の固定や非常用持ち出し袋の準備、近所の人との声かけや協力体制づくりが命を守るカギになるということがわかった。

おわりに

私は、環境防災科での3年間を通じて、座学だけでなく、地域のフィールドワークや被災者の声を聴く活動、実際の被災地訪問など多面的な学びを得た結果、災害は他人事ではなく自分にも起こり得るという強い意識を持ち、命を守るための具体的な術や被災者の体験から得た教訓の重要性を深く理解した。今後はその学びを生かしてボランティアや出前授業で災害知識を伝えるなど、「命をつなぐ」ための行動を自分なりに続けていきたいと考えている。

過去から学ぶ防災

坂居 成美

はじめに

阪神・淡路大震災から31年が経過し、震災を経験していない世代が増えている。そのため、過去の災害で起きたことや得た教訓を知り、学び、これから発生する災害に備えなくてはならない。過去の災害からの学びで救われる命・救う命を増やすために、私は語り継いでいく。

1 阪神・淡路大震災の被災体験

(1) 叔母の被災体験

叔母は被災当時、明石市の木造2階建てアパートの2階に祖父母と叔父とで住んでいた。被災当時、叔母は1人部屋で寝ており、部屋には三面鏡や箆筒、石油ストーブなどの家具があった。地震が発生し、寝ている叔母に箆筒の引き出しや鏡台が倒れてきた。鏡台は倒れた衝撃によって割れ、ガラスが散乱した。揺れが止まり、祖母が様子を見にきたときには、叔母の身体が家具の下敷きになっており、顔だけ出ている状態だった。大怪我を負ってもおかしくない状況であったが、足元に置いていた石油ストーブに、倒れてきた家具が乗ったおかげで空間ができ、怪我はなかった。祖母が、叔母に覆いかぶさっている家具を持ち上げ、出ることができた。リビングに行くと、落ちてきたものや割れた窓ガラスが散乱していて歩く場所がなかった。台所の食器棚は倒れ、食器が割れ、1階に降りる階段の手すりは全て取れていた。家の外に出てみると、家の屋根瓦は落ち、真向かいの家の柱が倒れ道を塞いでいた。車や自転車が通れなくなっていた。1階の住人の風呂場は周りの壁が落ち、外から見える状態になっていた。17日の午前は、壊れたものを片付ける気力がわかなかった。余震に備え、寝る時はいつでも避難できるように服を着て、足元に靴を置いて、すぐ避難できる場所で寝た。地震発生後は、天気が悪く、屋根瓦が落ちたため雨や雪が降ると天井裏から雨漏りした。そのため家中にあったバケツや洗面器を集め、天井裏にバケツを沢山置いて雨漏りをしのいだ。近所の家は数軒が全壊したものの、屋根瓦が落ちているが、住める状態の家が多かった。叔母の家は震災後、修繕を行い住み続けることができた。

明石川の西側と東側では被害の大きさが異なり、東側の被害が大きく、西側の被害は小さかった。そのため、被災後の生活も大きく異なった。叔母が住んでいた家は東側にあり、ガスの供給が止まっていたが、西側ではガスは通っていた。約1時間通った電気や水に対し、ガスの供給は約1か月かかり、家の風呂に入れず困った。幸い、近所にすぐに営業を再開した銭湯があった。当時は、重油で風呂を炊いていたため、ガスが使えなくても風呂に入ることができた。その銭湯では整理券を配っており、ほぼ毎朝8、9時頃から約2時間列に並び、整理券を貰って風呂に入っていた。毎日銭湯に行くとお金がかかるため、時々、親戚の家に行き風呂に入った。また、西側に住んでいた人は被災後の対応に追われ、職場に行くことはできなかった。しかし、東側に住んでいた人は、17日もいつも通りに出勤していた。

食事に関しても問題があった。地震発生後、午前8時頃に叔父が朝ごはんを買うために明石川の東側にある近所のコンビニに行った。しかし、多くの商品が既に品切れであり、売れ残っていた饅頭だけを買って帰った。その後、東側にある近所のスーパーに行ったが、被災したことにより閉まっていた。被害が少なかった西側のスーパーは、通常通り営業していたため、西側まで行き食料を調達していた。スーパーでは、カレーなどのレトルト商品を買った。水と電気はすぐに通ったため、炊飯器で米を炊き、ストーブを使ってレトルト商品を温めてご飯を食べた。

(2) 被災から1か月

叔母の職場は神戸市東灘区にあったが、埋め立て地のため、液状化の被害が大きく、約1か月間会社は休みだった。震災から約1か月後に、普通電車が運行を再開し、会社が始まった。多くの人が電車を利用し、毎日満員電車だった。叔母は毎日、神戸まで満員電車に乗り、神戸から元町まで歩き会社の臨時バスに乗って通勤していた。神戸から元町への道は、凹凸があり、倒壊している建物も多かった。はじめのうちは、明石から通勤していたが、途中から、大阪の親戚の家に1か月間、下宿して職場に向かった。大阪からは、阪神電車に乗り職場の最寄り駅まで向かった。大阪は比較的被害が少なかったため、電車は通常通り運行していた。被災から1か月ほどは、地震の大きな揺れの影響で、足がふわふわ浮いているような感覚だった。

2 話を聞いて

叔母に震災の話聞いて、明石市の被害状況や備えの重要性を学んだ。私が通っていた明石市の小中学校では、震災について学ぶ機会が少なく、明石市にどのような被害があったのか知らなかった。今では明石のまちも神戸のまちも復興が進み、震災を経験していない私にとって、震災時のまちの姿を想像することは難しい。そのため、明石川を境に被害の大きさが異なったことや、半壊の建物が多かったことなど当時の被災状況を知り、身近な人が身近な地域で大きな被害にあったことに驚いた。何気なく過ごしているまちがどのようにして復興したのか気になり、当時大工をしていた祖父に話を聞いた。祖父は、約10年かけて瓦屋根から軽く丈夫な屋根に変えたり、壊れた建物を直したりしたことを教えてくれた。震災から多くの人の力と時間をかけて復興したまちを、改めて大事にして過ごしていきたいと思った。

地震の揺れにより、多くのまちが甚大な被害をうけた。叔母から震災の話聞き、これから起こる災害への備えとして、地域と関わり、地域について知ることが大切だと思った。叔母は被災時に家の近くに銭湯があることを知っていたため、お風呂に困ることは少なかった。地域にどんな施設があるのか、避難所はどこにあるのかなどを平時から知っておくことが1つの備えだと感じた。また災害時に助け合える関係を平時から築くことも備えだと思った。環境防災科での学びの中で、周りの人とお互いに助け合う「共助」や自力で脱出して助かる「自助」によって災害時に多くの命が救われたことを学んだ。私は地域リーダーの活動を通して、「共助」や「自助」で救われる命を増やすためには、地域との関わりが大切だと学んだ。地域リーダーの活動では、舞子高校に一番近い多聞東地域で、防災を学ぶ高校生として、1年を通して多くのイベントや訓練に参加させていただいた。応急給水訓練では、給水栓を開設し、組み立てや給水に来た方への誘導の難しさを感じた。訓練に参加したことで、災害時の対応を知ることができたとともに、積極的に地域の行事やイベントに参加することが大切だと思った。自分だけではなく、周りの人の命を守るためにも、地域を知り、災害に備えていきたいと思う。

「語り継ぐ」を作成し、震災の記憶をつなげることが大切だと思った。叔母が阪神・淡路大震災で壮絶な体験をしたように、人それぞれ震災の記憶は違い、感じたことも違う。環境防災科の学びの中で、阪神・淡路大震災だけでなく、東日本大震災を経験した方からもお話を聞かせていただいた。被災当時の写真や映像を交えながらご講義をしていただいたり、被災地に行き震災遺構を見せていただいたりした。1年生で参加した東北訪問では、東日本大震災で被災された大川小学校に訪問させていただいた。大川小学校では、津波が迫る中、川がある方向に向かい、児童と教職員84名が犠牲になった。複数の児童と教職員は避難途中に引き返して、学校の裏山に登り助かった。大川小学校訪問を通して、平時からの避難訓練と避難計画の作成が、災害時の命を守ることに繋がると思った。同じことが繰り返されないよう、震災の記憶や震災から学んだ防災の知識を、防災教育・避難訓練に取り入れている。2年生では、阪神・淡路大震災で木造家屋が倒壊し、大規模な火災が発生した長田のまちをあるいた。まちあるきで訪れた大国公園という公園には、火災からまちを守った、黒く焼け焦げた木や街灯があった。火災のあとをみて、火災が迫る怖さを感じたとともに、震災を忘れてはいけないと感じた。環境防災科で3年間学んだ私にできることは、叔母の話を含め、聞かせていただいたお話を語り継ぐことだと思う。増えていく大きな災害を経験していない世代に、自分なりの方法で震災の記憶をつなげていきたい。

おわりに

環境防災科で、様々な分野の方から震災についてお話をいただき、多くのイベントに参加させていただいた。得た学びをここで終わらせるのではなく、私はこれから進む分野で防災を活かして活動したい。私は将来、栄養士になり、多くの人が健康的な生活を送れるようにサポートしていきたいと思う。栄養士と防災は平時からつながりがあると考え。被災地では、生活状況や食生活が変化し体調不良を引き起こすことがある。変化した環境で健康に過ごすためには、平時から健康に過ごすことが大切だと考える。栄養士の立場から、栄養不足・栄養過多などの問題を改善して、平時から健康な生活を送ってもらえるようにしたい。また、栄養士になり、「JDA-DAT」という日本栄養士会災害支援チームの活動に取り組みたい。防災イベントに参加したり、被災地支援を行ったりして、平時から防災と栄養は深く関わっていること、健康で過ごすことの大切さを伝えていきたい。

繰り返さない

阪上 菜穂

はじめに

災害大国と呼ばれる日本に住む私たちは、決して災害から逃れることはできない。これからも住み慣れた日本という場所で暮らし続けるためには、ただ災害を恐れるだけでなく、災害から自分の命を守る方法を身に着ける必要がある。そして、もう二度と同じ被害を繰り返さないために、これまで災害で失われた多くの尊い命を無駄にすることなく、過去の災害から得た知識や教訓、被災者の想いを語り継ぎたい。

1 母の被災体験

母は当時、津名郡に住んでおり、祖父、祖母、伯父と4人で暮らしていた。母はいつも通り学校に持っていくお弁当を作っていた。すると突然、空がピカッと光り、大きな音ともに激しい揺れに襲われた。あまりの激しさに立っていることができず、座り込んでいた。防災意識が低く、どうしたらいいのか何もわからなかった母は、必死に食器棚のスライドボードを引っ張り出して、頭を守った。揺れがおさまり周りを見渡すと、家の中は割れた食器が散乱し、2メートル先の冷蔵庫の上にあった電子レンジがすぐ側まで飛んできていた。焼いていた卵焼きは、フライパンから飛び出て窓にくっついていて、見たことがない目の前の光景に、母は恐くてパニックになった。すぐに祖父母や伯父のいる部屋に向かうと、体の上に割れた窓ガラスが散らばっている伯父を見つけ、死んでしまったのではないかと頭が真っ白になった。幸いにも全員無事でほっとした。祖母はあまりの衝撃でパニックになっていたが、祖父は落ち着いている様子で安心させてくれた。しばらく経って電気が復旧しテレビをつけると、神戸市長田区のまちの様子が映し出された。時間が経つにつれてひどくなっていく長田の状況を前に、何も手につかず、ただテレビを見つめることしかできなかった。この時母は人生最大の焦りと不安を感じた。

発災から1か月が経ち、やっと学校に行けるようになった。母は長田区にある学校に船で通っていた。本来は淡路から須磨に着くはずの船だったが、震災で港が使えなくなったためハーバーランドの辺りに着くように変わり、少し苦労した。また、朝の通学、通勤時間帯は電車が常に満員で、痴漢被害が相次いで発生し、毎日ひやひやしながら学校に通っていた。学校に着くと、長田から湊川付近の学校のすぐ近くまで焼き焦げた跡があり、大きな火災が街の様々なものを奪った悲しさを感じた。さらに驚いたことには、学校の教室棟とは別に特別棟が地震によって倒壊し、3階建ての校舎の1階部分が崩れてなくなっていた。また、1か月ぶりに友達と会えたあの嬉しさは今でも忘れられないほどのものだった。しかし、友達の中には地震によって親を亡くした子がいた。これを聞いた母は、自分の家族が全員生きていることは奇跡だと感じ、命の大切さを実感した。

震災から30年を迎えて、母は改めて震災に向き合い、被災してから災害への見方がとても変化した。震災を経験したことで、自分が住む場所でも災害の危険性があることを実感し、災害は他人事ではないことや普段の生活が当たり前でないことを痛感した。また、南海トラフ巨大地震を目前にした今、近所に住む人との繋がりや日頃からの備えを大切にしている。このように考えるようになったのは、震災を経験したあの日、何もできなかった自分の力のなさを感じたからだ。しかし、被災した時に近所の人との繋がりのおかげで助けられた経験から、次は母自身が周りの人を助けられるように近所の人とのコミュニケーションを大切にしながら過ごしている。

2 父の被災体験

父は当時、大阪府大阪市に住んでおり、祖父、祖母、伯父、伯母と5階建てのビルの3階で寝ていた。「どん！」という大きな音で目が覚め、その瞬間から横揺れがだんだんと強くなるのを感じた。生まれて初めての経験で、地震と認識するまで時間がかかった。揺れが収まって周りを見渡すと、伯父が本棚の下敷きになりかけていた。焦った父はすぐに伯父を助けた。その後、家族の安否を確認し、リビングに向かうと、食器棚から食器が落ちてたくさんの破片が散乱し、非常に危険な状態だった。ビルの1階で経営していた酒屋に向かうと、陳列棚からほとんどのお酒が落ちていた。店内にはアルコールが充満し、足を一歩踏み入ただけで酔ってしまいそうなくらいだった。その日のうちに片付けを終わらせ、翌日には営業を再開できるように準備をした。

テレビで神戸のまちの様子を見た父は、自分たちよりもひどい被害を受けている様子に恐怖を感じ、神

戸に住む知人を心配して電話をかけた。案の定、電話は繋がらなかった。翌日、原動機付自転車で2、3時間かけて知人に会いに行った。神戸に近づくにつれて、テレビで見た悲惨な光景を間近で目にし、変わり果てた神戸の様子に驚いた。また、いつも目印にしていた建物が倒壊していたため、自分がどこにいるのか把握するのが困難だった。

父は震災を経て、何もできなかった自分の無力さを自覚し、これから必ず発生する南海トラフ巨大地震に向けて、危機感と恐怖を感じている。しかし、そのようなことを感じているからこそ、今は備えを重視した生活を心がけている。具体的には、寝室に棚を置かない、寝ている頭の上に物を置かないなど、今自分にできる防災に精一杯取り組んで、地震に負けない環境づくりを徹底している。

3 両親の被災体験を聞いて

これまで両親と震災について話すことは少なかったが、このように改めて話を聞いたことで地震の恐ろしさを今まで以上に身をもって感じた。母の話を書く中で、地震の揺れが収まった直後の祖父母の様子の違いがとても印象的だった。もし私がその場にいたら、祖母のようにパニックになり、何も手につかなくなるだろう。しかし、祖父のように焦らず、落ち着いて行動できたら、自分も周りにも安心させることができる。そのため、私も災害が起きたら祖父のように周りを安心させられる人になりたいと強く思った。また、今私が過ごしている穏やかな日常が当たり前ではないことを改めて認識した。母は1か月ぶりに友達と再会できた嬉しさは今でも忘れられないと話していたが、もし今災害が起きて、明日から学校に行けず友達にも会えない生活になったら、私はどうなってしまうだろうか。きっと、友達に会えないショックでまともに生活できないと思う。そのくらい私の中で、友達の存在が大きなものだという気づかされた。そして、母の友達の中に親を亡くした人がいたと聞いた時、幸せな生活を一瞬にして奪い去る災害の恐ろしさややるせなさを感じた。今、母と父が震災を乗り越え、ともに健康に過ごしていることが奇跡だということをしつかりと心に留めておこうと思う。また、父は震災時に何もできなかったと話していたが、連絡がつかない知人のもとへすぐに駆け付けた父はとても友達思いでかっこいいと思った。父のように思い立ったらすぐ行動できる人になりたい。

両親の話聞いて、私は毎日を大切に生きていきたいと思う。しかし、今ある日常を淡々と過ごすのではなく、両親やたくさんの方からお聞きした震災の記憶を語り継ぐ者として、日頃から災害に深く関わりながら生活したい。母から聞いたように災害は他人事ではないと思う。だからこそ母が言っていたように、災害の危険から自分や周りの人を守るために人との繋がりを大切にしながら生活していきたいと思う。また、自分も周りの人もみんなが災害から助かるために、防災知識を普及させたり、防災意識を啓発させたりすることが必要だと感じた。だから私は、環境防災科での3年間を大切に、学んだ知識や得た能力を最大限に活用して、家族や知人、身近な人たちの意識を変えることで、人から人へ防災知識が伝わり、結果的に多くの人を守ることに繋がればいいなと思う。

おわりに

災害を恐れるだけで何も対策がされなければ、何年経っても大災害を繰り返すことになる。では、二度と同じ被害を繰り返さないために私に何ができるだろうか。ハード面の対策は、私1人の努力でできるものではない。しかし、身の回りの防災に取り組むことはできる。私が住む淡路市では、高齢化が進んでおり、防災への意識が乏しい。東日本大震災で多くの高齢者が津波の危険から避難することを諦めた事例を踏まえて、高齢者の防災意識の向上に努めたいと考えた。そのためには、地元の高齢者の個別避難計画を現在よりも普及させる必要がある。対象者一人ひとりに合った避難計画の作成を定着させていきたい。また、要配慮者の家族だけでなく、支援に当たる近隣住民にも避難計画を共有し、みんなで助け合いができる素敵なまちにするために、平時から近隣住民とのつながりを大切にしようと思う。そして、災害時にはみんなで助け合いたい。家族も近隣に住む人もみんなで災害に立ち向かうために、卒業後は地元の防災に率先して取り組んでいこうと思う。

今、から未来へ

佐藤 雅希

はじめに

阪神・淡路大震災から30年以上が経ち、当時の震災を経験している人が徐々に少なくなっている。これから南海トラフ巨大地震や富士山の噴火など、様々な災害が起こるといわれている。そういった未曾有の災害に対応して死者を少しでも減らすためには、過去の経験というものが非常に重要になる。そんな中で今を生きる自分たちにできることは何か。それは、今まで環境防災科として様々な人からのお話を下の世代へと語り継ぐことだと考える。だから私は、今まで学んできたことや経験を私のこれからの未来へ継ぎたいと思う。

1 当時の記憶

(1) 母の被災体験

当時母は社会人になっており、大阪の会社に勤めていた。地震発生時は、妙法寺にある一戸建ての家に祖母と2人で暮らしていた。5時46分、母は2階の部屋で寝ており、そこに大きな地震が起きた。その衝撃はすさまじく、最初に来た地震が縦揺れだったことで、母は地震だとは思わず、飛行機が家に向かって墜落してきたのかと思っていた。そのとき母は、「いざとなれば自分の命を守れるのは自分だ」と思った。そうして目覚めた数秒後に、激しい横揺れが母を襲った。体感はとても長く感じた。それと同時に、ガラスの割れる音や家具が倒れる音、食器が割れる音、周りの家のブロック塀が崩れる音など、様々な音がずっと続いていた。母の部屋には割れ物や落下するようなものはなく安全だった。しかし祖母の部屋には大きなタンスがあり、下敷きになっているかもしれないと思った母は、すぐに同じ階の祖母の部屋に向かった。朝方だったことと、電気が停電していたこともあり、真っ暗な廊下を母は壁を伝って祖母の部屋を目指した。着いたとき、「ママ、生きとるか」「返事してくれ」と声をかけると、小さな声で「助けて」と呼ぶ声が聞こえ、すぐに部屋に入った。祖母の部屋にあったタンスは倒れていたものの、壁から壁に向かって倒れており、祖母はその少しの隙間で寝ていたため下敷きになることはなかったため、何とか助けることができた。その後2人で1階の玄関に向かっていった時、階段の前で窓ガラスの破片を踏んでしまった。母はそれでも外に行かないといけなそうと思っ、ガラスをよけながら玄関にたどり着いた。幸いドアを開けることができ、外に出ることができた。

向かいの家は築年数がかなり経った家で、屋根は落ち、外壁は倒れ崩れていた。向かいの家に住んでいたのがご高齢の夫婦だったので、母はすぐに助けに行った。向かいの家の玄関についたとき、その夫婦が悲鳴を上げながら出てきた。その後、向かいの家の夫婦と今起こったことについて話していた時、近所の人たちも出てきて、みんなで安否確認をしたり、協力してガスの元栓を消しに行ったり、停電の確認などを行ったりした。妙法寺はそこまで被害が大きくならなかつたため、近所の人たちは全員無事だった。そうしていると、1人の近所の方がラジオを持ってきて、そこから情報が聞けるとわかり、母は自家用車のラジオから情報を聞いていた。その時、周りが電話しているのを見て、電話がつながることを知り、当時京都に住んでいた妹に安否確認の電話を掛けた。その後妹との電話を切ったときに、当時勤めていた大阪の会社から安否確認の電話がかかってきた。そこで、しばらく会社に勤務することができないことを伝えた。揺れが収まったので、食糧確保のためリビングにある冷蔵庫に向かった。当時は全く備蓄しておらず食料があまりなかつたため、近所の家と分け合いながらご飯を食べた。

そのころ長田では大規模な火事が起きており、その火の粉が妙法寺にまで降り注いでいたり、焦げたような匂いが充満したりして、「こっちも火事になるのでは」ととてもおびえていた。そして少し時間が経ったとき、東須磨に住む曾祖母からの連絡があった。当時の東須磨は被害が大きく、家もほとんどが全壊だった。曾祖母の家も全壊していたが、近所の人たちも含めて全員無事だった。しばらくは避難所生活をしてきたが、曾祖母は高齢で避難所での生活がとても過酷だったため、2か月間妙法寺の家と一緒に暮らした。

ライフラインについては、まず電気は1か月足らずで元に戻った。水道に関してはなかなか復旧せず、水を運んでくれる給水車で生活に必要な水を配っていた。母は18リットル入るポリタンクを持って給水車のところへ行っていた。その水を使ってトイレを流したり、ポットでお湯を沸かしカップラーメンなどを食べていた。ガスが止まっていたので食べられるものも限られていたため、被害が少なかった垂水区や西区の友達の家でご飯を食べさせてもらったり、お風呂に入れてもらったりしていた。仕事は約1か月休

んでいた。そろそろ会社に行かないと迷惑になるかもしれないと思い、一度出社するために大阪に向かった。しかし、電車の線路は途切れ途切れになっており、地下鉄やJRなどを乗り継いだり、駅の間を歩いたりして、会社まで約4時間かかった。

当時母が務めていた会社は県外から通勤している人も多く、阪神・淡路大震災により通勤できない人が多かった。そのため会社は1つのビルを借りてそこを寮にし、通いやすくなるようにした。会社はいつまでも休めるものではないため、曾祖母が今住んでいる家に来て2か月後に大阪の寮に住み始めた。その後約1年間大阪に住んでいた。

(2) 話を聞いて

母の話を聞いていて感じたことは、今普通に過ごせていることが当たり前ではないということだ。当時の母は普段の生活がこれからもずっと続いていくと思っていた。そんな母に、阪神・淡路大震災が襲った。この地震により母の日常は突如として奪われた。

このように、自分のせいでもなく自然が原因になって日常が非日常になることもあると改めて知ることができた。母は目覚めの時からいつもの目覚ましの音ではなく、家具が倒れる音で目を覚まし、とても不安だったと思う。さらに祖母がダンスの下敷きになっているのを見て、救い出すことができるのかを考えると恐怖を感じていたと思う。2人でかろうじて家の外に出て見た景色は、いつものものではない。普通なら電話が繋がることも繋がらない。ニュースを見たくとも見ることができない。唯一の情報源はラジオだけという非日常が広がった中で、この先の生活に不安を感じずにはいられなかったと思う。また、食料についても食べられるものは限られていて、日常なら好きなものを好きなだけ食べることができていたかもしれないが、地震後は限られた食料の中でこの先どれぐらい生活しないといけないのかなどを考えながら生活する必要があった。お風呂に関しても、少し遠い友だちの家にお邪魔させてもらわないと入れない状況だった。そのような生活をしていたら、不安も募りストレスもたまっていったのではないかと思った。

母の話の中で、友だちの婚約が地震によりなくなってしまったと聞いた。婚約していた中で震災が自分の家族を襲い、生き延びることはできたものの、被害の大きさから婚約のことを考える余裕がなくなり、そのまま離ればなれになってしまったという話だった。この話を聞いて、災害は目の前にある日常を奪うだけではなく、この先の幸せまでも奪ってしまうことがあるのだと知った。震災が起きたときに少しでもストレスを減らし、今までの生活に少しでも近づけるように、防災バッグの準備や今住んでいる家の耐震に問題がないかを確認することが、非日常への対策になると思う。

(3) 私が伝えたいこと

今まで環境防災科で学んだ様々なことや母の経験などから、自分の命は自分で守らなければならないということが一番に伝えたいと思った。命を守る方法はたくさんあるが、その中の1つに法律があるということを知った。たとえば、国民の生命や身体、財産などについて災害から保護してくれる災害対策基本法や、災害発生時における被災者の保護と社会の秩序維持を目的とした災害救助法などである。そのような法律も、知っていなければ活用することもできないし、災害が起きてから知ると、災害が起こる前から知っているのでは大きな差が生まれる。誰かから教えてもらうことも必要だが、平時から調べておくことが自分の命を守ることに繋がると思う。震災時に役に立つ法律について、もっと世間に伝えることができればと思う。

おわりに

母から阪神・淡路大震災について初めて話を聞く機会になった。このような機会を作れたことも、環境防災科に入学することができたからだと思う。私は震災の記憶を語ることはできない。しかし、震災の記憶について聞いたことを語り継ぐことはできる。そんな語り継ぐ中でも、「自分の命は自分で守る」ということを一番に伝えていきたいと考える。

語り継ぐ

杉本 友彌

はじめに

これからさらに震災を体験していない人が増えていく。私も経験していない。しかし環境防災科で学んだことを知識で終わらせないよう、そしてこれから起こる災害に自分たちと社会が向き合っていくために「語り継ぐ」ことをしていかなければならない。しかしこれからの人は語り継ぎたくても震災のことを知らないために語り継げない人も出てくるだろう。私の役目というのは、そういった人を一人でも少なくするため、これからの人が自信をもって語り継いでいけるように語り継ぐことではないだろうか。

1 阪神・淡路大震災について

(1) 母の話

母は当時中学1年生で、神戸市垂水区の小束山の2階建ての一軒家に住んでいた。地震が起こる直前は目覚めていたが、2階のベッドの中でうずくまっていた。その時地震が発生した。非常に強い揺れを感じた。揺れが収まってすぐに母は1階の様子を確認するために部屋を出ようとした。しかし腰の高さくらいまであった本棚がドアを塞ぐように倒れていて、それをのける作業から始めた。1階に降りると、食器棚からガラスのコップやワイングラスが床に落ちてきており、スリッパを履かないと歩けない状況だった。避難はしなかったが、電気や水は止まっていたため近くの小学校まで水を汲みに行っていた。小学校までの道でも道路には亀裂が入っているところがあり、それを見るたびにあの地震の揺れや布団の中に潜っていた時間を思い出し、改めて地震の規模を実感した。家の近くから長田のほうで黒い煙が上がっているのが見えたが、ニュースなどで確認することができなかったため何のことかわからなかった。自分の家の近くは大きな被害はなく、黒煙が上がるほどの火災はなかった。そして母は電気が回復してテレビが見られるようになり、ニュースで長田の状況を見たときショックを受けたと同時に、改めて自分の地域は大きな被害ではなかったと実感したようだ。

(2) 父の話

父は当時高校1年生で、兵庫県三木市の2階建ての一軒家に住んでいた。地震が起きた時、父は2階の寝室で2歳下の弟と横並びで寝ていた。揺れ始めた時、横にいた弟のことが心配で動こうとしたが、今まで感じたことのない揺れの恐怖で動けなかった。揺れがおさまった後、部屋の外に出ようとしたが、地震の揺れで落ちた本などで足場がほとんどなかった。横の部屋にいた祖父と祖母と1階のリビングに降りると、ガラスや割れたお皿でスリッパを履かないと歩けない状態だった。重量のある石でできた机も元の位置とはかけ離れた場所に動いていた。当時住んでいた家には損害はなかったものの、近くの家には亀裂が入っていた家もあった。地域によっては完全に崩壊している家もあり、外を歩くとショックを受けた。そして近くの配水池の損壊により少しの間断水になった。家の損壊はなかったため家で過ごした。しかし断水の影響で近くの小学校まで祖母が水を汲みに行っていた。少し時間がたってからニュースで被害が大きかった地域のことを知り、自分の家は被害が大きくなかったと感じた。

(3) 母と父の話を聞いて

私の両親は普段笑顔を絶やさない人だ。しかしそんな両親でも阪神・淡路大震災の話をするときは真剣な表情で、普段は見ない顔をしていた。それだけ心が締め付けられる思い出だったので改めて感じた。共通して不思議に思ったことがある。「それは大きな被害じゃなかった」という言葉だ。長田の被害などと比べてしまうと、2人とも住んでいた場所は被害が小さく済んでいる地域だった。しかし大きな地震の揺れの影響でガラス類が割れたり、近所の家が倒壊したりしていた。私からすると大きすぎるほどの被害だと感じた。恐怖を感じるほど大きな被害だと思った。両親に理由を聞くと、母は「家族に大きなけががなかったから」、そして「もっと被害が大きい地域があったから」と言った。そこには震災で家族を失っていない喜びと、失った人への配慮が含まれていた。父も「周りと比べると大きな被害じゃなかった」と言っていた。父の家の周りには大きな被害があった家も多数あったため、自分の家はまだ軽いほうだと感じたようだ。

共通して感じたことは、自分の住んでいる場所の被害が小さくて安心する気持ちと同時に、被害が大

きい場所や家族を亡くした人への配慮が含まれていたことだ。

父と母は家の大きな損害はなかったが、この話からでも家具を固定する大切さや、食器などが地震の時に割れないようにする工夫が必要なことが分かる。これは地震に耐えられる家が増えてきている今でも、自分の命を守る最短の方法になると私は考えている。

2 環境防災科での成長・学び

私が環境防災科で大きく学んだことは、周りの人を大切にする重要さだ。私たちが活動してきたボランティアは、周りの人がいるからこそ成り立っている。ボランティアができるのは、その軸となる活動が存在するからであり、私たちはそのサポートや軸の一部として活動している。その軸を作ってくれているのが地域の人だ。もちろんその方々のおかげでもあるし、今まで環境防災科でボランティアをして地域の人から信頼を作り上げてきた先輩方のおかげでもある。ボランティア活動は1人ではできない。クラスの人や学校の先生に協力してもらいながら活動する。大きな荷物を運ぶだけでも1人ではできないし、ほかの人の協力が必要だ。だからこそ周りの人を大切にし、お互いに協力し合える関係を作っていくことが大切だと学んだ。そしてこれは災害時の共助にもつながる。普段から周りの人を大切にしていなければ、いざという時に行動できないと思う。

おわりに

私はこの「語り継ぐ」の執筆を通して、相手を思いやることが大切だと感じた。災害が起こった時は人それぞれの感じ方があり、互いに尊重すべきだと思う。父と母の「それは大きな被害じゃなかった」という言葉にも、自分たちより被害が大きかった人への思いやりが含まれていると思う。災害時では言葉一つでも気持ちが大きく左右されてしまう。だからこそ、小さな言葉一つにも思いやりのある言葉にできるよう心掛けていきたい。

自分の命は自分で守る

砂川 翔瑚

はじめに

阪神・淡路大震災から 31 年が経ち、風化が進んでいると思う。震災を経験した被災者は高齢化していき、阪神・淡路大震災を被災した方はいずれゼロになる。だからこそ、環境防災科に入学したきっかけでもある「語り継ぐ」ことをしていかなければならない。

入学していなければ、被災者の方のお話を聞く機会もほとんどない。しかし私は、被災者の方や行政の方など多くの方からお話を聞くことができている。このお話を自分だけでとどめるのではなく、少しでも多くの方に知ってもらえるように語り継いでいきたい。

1 阪神・淡路大震災

(1) 母の体験談

母は当時、神戸市垂水区のマンションに祖母と祖父、伯母と 4 人で暮らしていた。5 時 46 分、寝室で寝ていた母にドンッと押し上げるような揺れがあり、最初の揺れで目が覚めた。寝室には大きな家具がなく、何も倒れていなかった。祖母が母の寝室に駆け付け、「大丈夫？」と声をかけてくれた。その言葉で母は安心することができた。家族 4 人はリビングに集まったが、食器棚の扉が開き、食器が散乱して床がガラスだらけになっていた。家には背の高い家具がなく倒れていなかったため、被害は食器の散乱だけで済んだ。最初にテレビをつけたが、何が起きているのか分からず混乱していた。海が近かったが、当時は津波という意識がなく、津波の心配はしていなかった。家の被害も少なかったため避難所には行かず、自宅で過ごしていた。祖父は大阪の銀行員として働いており、仕事が好きだったため、震災直後に自転車で大阪の職場へ向かった。次の日からも支店に通い、家にはあまりいなかった。家に残された祖母と伯母と母は、福田川沿いの応急給水拠点に、自転車の荷台にタンクを 2 個積んで毎水を汲みに行っていた。マンションには屋上に貯水槽があり、最初は水が出ていた。少しでも水の使用量を減らすため、トイレの水は数回に 1 回だけ流し、残っていたお風呂の水を使っていた。コンビニに買い物に行ったが何も売っていなかった。翌日から霞ヶ丘小学校付近の温泉が開いていたので毎日通っていた。家には防災リュックなどの準備はなく、ガスコンロを使い家にあるものだけでご飯を作って食べていた。祖父が職場から食料を持って帰ってくれることもあった。夜は電気がつかず、懐中電灯を点けて部屋を明るくしていた。家が 2 号線の近くだったので、ずっと消防車が走っている音が気になっていた。また、線路が家の前にあるため、電車が止まっていることにもすぐ気づいた。自分の住んでいる場所の被害が少なかったため、地震による被害は小さいと思っていたが、祖父に「他の場所では被害が大きい」と伝えられ、初めて大変なことになっていると気づいた。地震が発生してから考えると、震災前日にカラスがいつもより多く鳴いていたと感じていた。

(2) 話を聞いて

私はこれまで、母に阪神・淡路大震災が発生したとき何が起きていたのか詳しく聞くことがなかった。母は当時高校 2 年生で、私が今住んでいるマンションと同じ場所に住んでいたため、自分に置き換えて「自分だったらどんな行動をしていたらだろうか」と想像することができた。母の震災の記憶は 30 年たった今でも残っていた。それほど大きな地震であり、大変な経験だったことが分かった。震災発生直後に祖母が「大丈夫？」と声をかけてくれたことで、母は安心することができた。このことから、災害時は家族など身近な人の声や存在が心の支えになることが分かった。当時はスマートフォンや SNS がなく、情報を簡単に得る手段がなかったため、状況が分からず不安だったと思う。現在は情報を簡単に得られるが、デマも多いため、信頼できる情報を選ぶことが大切だ。母は「応急給水拠点に自転車で水をもらいに行くことが一番大変だった」と言っていた。比較的建物の被害が少なくても、ライフラインが使えなくなることが大きな被害だと分かった。私の家には飲み物がたくさん置いてある。これまでは何も気にしていなかったが、母の震災の教訓が今の生活にも生かされているのだと気づいた。お風呂の水を翌朝まで捨てずに残しているのも、震災時にトイレに使った経験が教訓として続いているからだ分かった。話を聞くことで、家の日常の理由が理解できた。これからは私は母からの教訓を受け継いでいきたい。

2 環境防災科での3年間

中学生の時、舞子高校のオープンハイスクールに参加し、最後のスライドに「自分の夢や、好きなもの。手に入れたとしても、災害から守る方法を知らなければ、いつか壊れてしまう」という言葉があった。この言葉に心を持っていかれ、私の住んでいる町で何が起こっていたのか、これから起こる南海トラフ巨大地震にはどのように対策し、私はどうしたら生き続けることができるのかということを知りたいと思い環境防災科に入学した。

1年生の時、募金活動を行った。募金をしていただいた方の中に「俺の家族東日本大震災で亡くしたんだよ」と言われ、頭が真っ白になり言葉に詰まったことを今でも覚えている。当時は、どう声をかけたらよかったのか分からなかった。この方を通して、募金は金銭的支援だが、家族を失ったという悔しさをもう一度繰り返してほしくないと他人を思いやる心も含まれていること知った。募金活動をしていると「ありがとう」と声をかけてもらうことがあり、人の心の温かさを感じることができた。そして、募金活動は「してあげる」のではなく、「させていただいている」と教わった。募金活動ではお金の多さではなく1人1人の気持ちであり、最後まで責任をもって大切さを理解することができた。

3年間続けた災害メモリアルアクション KOBE の活動では、舞子高校生が災害時に自分や大切な人の命を守る、広めることができるようにするためにはどうしようかを考えその気持ちを相手に伝えることの読本を作成した。そして、舞子高校が避難所になったときに、生徒が避難所運営のお手伝いができるようになることも目指した。私は、防災に興味がない方にどうしたら私たちの思いが届くのか、読んでもらえるのかに最も苦戦した。学期ごとにある防災教育では、説明をしても聞く耳をもってくれている人は少ない。その中で、防災に関することを冊子にしても読んでもらえるのか不安だった。私は、実際に自分で新聞食器を作りカレーを食べ、初めての体験で避難所での食事を想像することができた。このつらさをどう伝えたらいいのか言葉にするのが難しかった。これからも、どうしたら災害に興味を持ってもらえるのか考えたい。

おわりに

環境防災科に入学して、多くのボランティア活動や出前授業に参加し、小さい子どもから高齢者まで多くの方と出会い、コミュニケーションをとることができた。「語り継ぐ」を書くにあたり、母に震災当時のことを詳しく聞くことができた。これまで3年間、家族以外の方の話を聞いてきたが、実際に家族の話を聞くと、もし家具が倒れてきていたら、もし挟まれていたらと考え、胸が苦しくなった。

2025年の1.17震災メモリアル行事では「30年限界説」という言葉が出てきた。災害の記憶は30年経つと継承が困難になり、危機感が薄れるため、この言葉が生まれているという。私はこの話を聞き、「絶対に30年を限界と言わせない」と思った。30年が経ち風化が進んでいっても、自分たちで止めることができる。だからこそ、限界を作らず30年、40年と語り継いでいきたい。

環境防災科の3年間を通して、これからも伝えていきたいことは「自分の命は自分で守る」ということだ。この言葉は、初めての「災害と人間」の講義から多くの行政の方が口にしていただいていた言葉であり、私も出前授業で必ず最後に伝えていた。防災や減災を学んでも、実際の災害時に自分の命を守れなければ、人を助けることも学んだ知識を活かすこともできない。だからこそ、少しでも多くの方に防災に興味を持ってもらい、自分で自分の命を守れる人が1人でも増えてほしい。

1 歩ずつ前へ

関 歩飛

はじめに

阪神・淡路大震災から31年が経ち、ニュースなどで震災について取り上げられることは少なくなってきた。今まで語り継いできた方々も年配になり、語り継ぐことのできる人は減ってきている。しかし、地球温暖化などに伴い災害は増えており、今後30年以内に南海トラフ巨大地震が起る可能性が高いと言われている。被害を防ぎ震災を風化させないために、私たちのような震災を体験していない世代にできることは語り継ぐことだと考えた。

1 阪神・淡路大震災

(1) 母の体験談

母は当時、神戸市垂水区の実家に住み、灘区の病院で看護師をしていた。地震発生時、母は家で寝ていたが、地震の発生で目が覚めた。今までに経験したことのないほど大きく長い揺れが続き、止まらないのではないかと不安だった。

その後、勤めていた病院のことが気になり向かおうとしたが、交通手段がなくその日は断念した。翌日の早朝、会社の先輩の車で病院に向かったが、渋滞や道の寸断により病院に着いたのは夕方だった。病院に入ると、入り口付近まで運ばれてきた人たちでいっぱいだった。みんなが「早く見てほしい」と叫び合っており、すぐに治療に取り掛かれないことが心苦しかった。更衣室でナース服に着替えようとしたが、ドアがずれて開かなくなっていた。隙間から見るとロッカーがすべて倒れていた。着替えることができないため、私服のままで仕事をしていた。いつもリハビリをしていた部屋は遺体安置所になっており、亡くなった人がぎゅうぎゅうに敷き詰められていた。近所の方が亡くなった人を運んでくることもあった。重傷者には点滴などの処置をしようとしたが、ガラス製の点滴はすべて割れて使えなくなっており、プラスチック製の点滴を使ったが圧倒的に数が少なく、助けられる命も助けられずにいた(震災後、点滴や薬剤、注射器などはプラスチック製に変更された)。被害の少なかった大阪の病院に受け入れてもらえることになり、重傷者から順番にヘリで運んでいった。余震が来るたびに病院が倒壊する可能性があるため、外の安全な場所に患者を移動させていた。毎日その作業を繰り返し、泊まり込みで仕事をし、家に帰ることができたのは1か月半後だった。その後、神戸駅まで電車が再開し、神戸駅から病院まで職場の人に送ってもらえるようになった。最寄り駅の六甲道は倒壊がひどく、運転再開まで数か月かかり、ようやく今まで通りの交代制に戻った。

母は震災直後、高校時代に一番仲の良かった友だちが被害の大きかった長田に住んでいたことを思い出した。当時は携帯電話がなく、安否確認ができなかった。そんな中、祖父が長田に住む親戚の安否確認に行くと言ったため、友だちの住所を渡し、安否確認を頼んだ。祖父が確認したところ、親戚の家も友だちの家も全壊していた。そこから何週間もかけて1軒1軒避難所を回り、ようやく親戚と友だちの安否を確認することができた。しばらくして、公衆電話から友だちが電話をくれ、声を聞いたときは涙が止まらなかった。

(2) 母の話を聞いて

母から阪神・淡路大震災の話を聞いたことはあったが、ここまで細かく聞いたのは初めてだった。31年前のでき事を昨日のこのように話す様子を見て、それほど衝撃的な経験だったのだと感じた。母はその後大きな震災をテレビで見るときに記憶がフラッシュバックし、心を痛めていた。何年たっても記憶が色濃く残り続けているのだと思った。もし震災当時、プラスチック製の点滴が十分にあれば、もっと多くの命が助かったのかもしれないと思うと胸が痛むと同時に、震災後に多くの改善が行われたことを知った。

母は不安や心配がある中でも真っ先に病院に向かい、寝る間も惜しんで働き続けていた。私は将来救急救命士になりたいと考えており、母のように頼れる救急救命士になりたいと思った。

また、母は家族や友人、地域の方々に支えられ、その支えがなければ乗り越えられなかったと言っていた。地域との関わり大切さを改めて実感した。この話から、亡くなった人や母の思いを忘れないためにも語り継いでいかなければならないと感じた。

母へのインタビューを通して、当たり前前の生活がいつなくなってもおかしくないと感じ、1つ1つのでき事を大切にしたいと思った。これからも防災について考え続けていく必要があると感じた。

2 環境防災科

環境防災科の授業では、他では聞くことのできない話や被災者からの貴重な話を通じて命の大切さを学んだ。講師の中には被災により心に深い傷を負った人も多くいたが、「もうこのような災害を起こさない」という強い意志が感じられた。その思いを私たちが引き継いでいかなければならないと感じた。災害メモリアルアクション KOBÉ では、災害を経験していない世代から次の世代へつなぐ活動を行った。ボランティア活動では、石川県被災地交流に参加し、珠洲市の小学生や中学生と防災訓練や防災クッキング、ワークショップを行った。

珠洲市の学校は地域との関わりが深く、コミュニティを大切にしていた。このような関わりを3年間の活動でどう伝えるかを考えることが多く、見る人に飽きずに見てもらおう工夫の大切さを改めて知った。その中で、伝えることの難しさを実感した。

私は将来、人の命を救うだけでなく、地域の防災活動に積極的に参加し、防災力を高めるために「伝える」という活動を続けていきたいと考えている。

おわりに

「語り継ぐ」の制作にあたり3年間を振り返ると、語り部の方々の話は1つとして同じものはなく、一人一人の思いをくみ取ることが難しかったが、他では体験できない貴重な経験をすることができた。母へのインタビューでは、当時の状況を聞き、私が体験したことのない悲惨な状況に恐怖を感じた。また、当たり前前の日々を大切に生きなければならぬと感じた。

いつ起こるか分からない巨大地震に備え、自分だけでなく周りの人も守れるように、これまでの活動を生かし、これからも語り継ぐ活動を続けていきたいと考えている。

未来につなげる

高橋 人逢

はじめに

この「語り継ぐ」の執筆にあたり、環境防災科に入学してからの3年間を振り返った。阪神・淡路大震災から今年で31年となった。町や人々がどう変わっていったのか。31年もたてば災害を経験している人の高齢化や語り部の減少などで語り継げる人は少なくなっている。この高校生活で多くの方々からお話を聞いて学んだことを、今度は私自身が人々に伝え、1人でも多くの方に防災を知ってもらえるように語り継いでいきたい。

1 母と祖母の話

母は当時、神戸市西区の2階建ての一軒家に住んでいた。祖父、祖母、伯父、叔父、母の5人で暮らし、1匹の犬を飼っていた。母と祖父と叔父と3人で寝ていたときに縦に大きく揺れ、足元にあったテレビが落ちてきた。祖母は慌てて2階で寝ていた子どもの様子を見にいたが、母と伯父はぐっすりと寝ていた。台所に行くと食器が落ち、ガラスも割れていた。祖父はガラスで足を怪我しながらも、家のプロパンガスボンベの元栓を閉めた。玄関に置いていた灯油が漏れていて、父が「このまま火つけて燃やしたほうが、火災保険でお金もらえるからそれで家を建て直すか」と冗談交じりで口にするほど余裕があったそうだ。飼っていた犬が見つからなく家族総出で探していたら、ベッドの下に隠れていた。よほど怖かったのか全く出てこなくて困った。

その後、家の前の空き地に出ると、日の出もまだなのになぜか東の空だけ赤くて長田の火事が西区まで見えたのかと思った。車を見てみると元々白かった車が黒くなるほど、火災の灰が風で飛んできていて驚いた。周りの家は崩れていたり傾いていたりしていた。祖母の家も10cm傾いて、いつ崩れてもおかしくない状況だった。解体するときにわかったことだが、地盤に断層があるかと思うような深い大きな亀裂が入っていたそうだ。何回も余震があり水もガスもなく、家も傾いていていつ倒れるかわからない状態だった。そのため友達の家泊まらせてもらい、そのあとに有瀬小学校の体育館に避難していたが、叔父が小さく、犬もいたので車で寝泊まりをしていた。当時、祖母は朝霧病院で勤務していた。病院の仕事に入りたいと電話が来たが、叔父が小さかったので、3か月の休みをもらった。

その後、仮設住宅で暮らし始めたが、5人で生活するには狭かった。母はよく友達と遊んでいたのだが、そんな時、隣の家から臭いがすると感じた。母は祖母に相談して、隣人と祖母と母で隣の様子見に行ってみると、孤独死をしていた。人の死を目の当たりにして、とてもショックを受けてトラウマになったそうだ。

2 話を聞いて

私は家族や親せきに災害の話は一度も聞いたことがなかった。講義や先生などから当時の様子や被害を聞いてきたが家族から話を聞くと、家も周りの風景もわかるので当時の状況や緊張感、そして災害発生からいつも通りの生活に戻る難しさが伝わる話だった。母や祖母の被災体験を聞いて、もしこの時母が亡くなっていたら、私は生まれてこなかったと考えると感謝をしっかりと伝えて、今まで育ててくれたことなどの恩をしっかり返していけないといけないと感じた。南海トラフ巨大地震で母が感じたトラウマや恐怖を家族や大切な人に感じさせないために今まで学んだことや祖母から聞いた話を活かして、地震が発生した時の行動や起こる可能性がある被害のことを伝えていきたい。そして焦らずに行動できるようになってほしいと思った。この話を聞いてから、警察官としてどのようなことがしたいか、どんな地域にしていきたいか考えるようになった。警察官として私は、地域の防災力を高め共助によって救出救助ができるような地域を作っていきたいと思った。

3 夢と防災

私は、警察官として地域の防災力、防災意識を高めていきたい。そのために地域の防災訓練に参加したり防災マップ作成に協力したりして地域住民と連携をしたい。消防や自治体などと災害時にどのような被害が出るか考えて、実際に災害が起こってから焦らずスムーズに連携が取れるように訓練の時に避難誘導や負傷者搬送などの役割分担をおこない、対応の精度を高めていきたい。災害時にパニックにならないための行動指示の出し方や避難の際の注意点を伝えていきたい。高齢者や障がい者など災害時に

特に支援が必要な人には私が参加してきた芦屋特別支援学校との交流学习で学んだことを活かして先頭に立ち積極的に避難ルートを考えたりどのような場所が危険か考えたりしていきたい。他にも私は、協力し合い、理解し合い、助け合える地域をつくるために行動できる警察官を目指したい。災害が起きても「ここに住んでいてよかった」と住民の方々が思える地域づくりに貢献したいと考えている。そのために、私が最前線に立ち人を守り、地域住民を支えて、災害が起きても地域の力で生活を取り戻すことができる地域を作っていきたいと考える。

4 ボランティア活動を通して

(1) たるみっこまつり

たるみっこまつりは、地域のイベントで、防災に特化したものではなく、地域の団体がお店を出店したり、ダンスや太鼓の演奏があったりして、地域の多くの人が集まってくる。防災に興味がない人に、防災のことを伝えることができる機会だと考え、私が考える地域の防災力を高めるきっかけにできると思った。そのため防災を楽しく知ってもらえるようにいろいろ考えたが、1人では何もできないことを実感した。仲間と協力することの大切さ、そのためには、困っていることとしてほしいことを周囲の人に伝えることが重要であると学んだ。この経験を通じて、私は「周囲と連携しながら最適な行動を選ぶ大切さ」が身についたと感じている。これは、住民と協力しながら安全を守る警察官にとって欠かせない力だと思う。現場では1人で判断するよりも、チームで連携し、必要に応じて周囲と共有することで、より安全で正確な対応ができる。たるみっこまつりでの学びは、将来警察官として働くための必要な力を学ぶ機会になった。

(2) 芦屋特別支援学校との交流及び共同学習

芦屋特別支援学校との交流及び共同学習では、障がいがある高校生と一緒に新聞スリッパを作ったり、同じ高校生として防災について一緒に学んだりした。この経験を通して、私は「相手を理解しようとする姿勢」が人と関わるうえで一番重要だと実感した。警察官は幅広い立場・年齢・事情を抱える人と接する仕事であり、固定観念を持たず、まず目の前の人を理解する姿勢が必要だと思った。相手との間に壁をつくらず、丁寧にコミュニケーションを取ることが、安全で安心できる地域づくりにつながる。この経験は、多様な人と向き合う力を身につけることができた。将来警察官として一人ひとりの声に耳を傾け寄り添い、適切に対応していく土台となる力を身につけることができた。

おわりに

阪神・淡路大震災のように朝起きたら家が傾き、水もガスも出なくなっている、当たり前前の生活が一瞬で壊れてしまうその経験を家族の話で改めて実感した。この話を聞いて私は今を大切に生きていくことが大切だと思った。災害が起きても今の生活を守るためにはどうすればいいのか、災害の被害を減少するためにどうすればよいかを考えていきたいと思う。外国人が増えてきている日本で、誰一人取り残さない防災は難しいと感じた。言葉の壁や宗教の違いがあり、伝えたいことも伝えられないことがあると聞いた。日本人や外国人だけでコミュニティを作るのではなく、共同でコミュニティを作ることが誰一人取り残さない防災を目指すために必要になると考えた。

震災の記憶

高畑 成

はじめに

阪神・淡路大震災から31年となり、震災を経験していない世代が増えていく。私たちは、阪神・淡路大震災の教訓を風化させてはならない。同じ過ちを繰り返さないためにも、過去の災害について把握する必要がある。私自身ができるのは、この環境防災科で学んだ数々のことを家族や地域の方々に語り継ぎ、繋ぐことだと考える。

1 阪神・淡路大震災の被災体験

(1) 祖父の体験

祖父は、須磨区の山側に住んでいた。1995年1月17日午前5時46分、大きな揺れに祖父は起こされた。身体も精神もショックで動けなかったそうだ。当時高校生の私の母と叔父が寄ってきて皆で固まっていた。テレビで地震のニュースを確認しようとしたが、なかなか出なかった。家の付近は花崗岩の上のニュータウンで殆ど被害が無かった。水道以外のライフラインもほぼ正常だった。神戸が震度5から6だったことを祖父はニュースを見て初めて知った。そのうち画面に高速道路が倒れた映像が流れた。神戸は壊滅だと思った。火事も発生し山の裏側の南須磨から長田にかけて悲惨な状況になっていると知った。そのうち祖父の自宅付近にも焼け焦げたものが降ってきた。祖父は神戸市役所から住宅都市整備公団に出向していて職場は大阪だった。交通機関も止まっていて出勤できなかった。地震から3日目に地下鉄で板宿まで行き、徒歩でJR鷹取、そこから神戸駅、ハーバーランドから船で大阪天保山に行った。神戸の地下鉄は戦時中のような大混乱であったが、大阪では普通の暮らしが続いていた。地下鉄も飲み屋もパチンコ屋も全て普通であった。わずか30キロほどしか離れていないが、世界が違っていた。大阪方面から武庫川を渡る辺りから被害は格段に大きくなった。祖父の職場の人達は、遺体安置所の担当であったり、避難所運営では酷い状態のトイレの改善をしたりして、半月以上家に帰っておらず風呂にも入っていないことを聞き、自分は被災地のために何もしていないと肩身の狭い思いを感じていた。

その後、祖父は4月の人事異動で、市役所の公園整備の仕事に戻った。避難所になっている公園の被害調査、避難者の状況調査、仮設住宅用地の情報提供、また仮設住宅へ花を届けたり花壇作りをしたりなどした。毎日会っていた野宿者が亡くなったこともあった。東遊園地の山のような瓦礫を片付けて、冬にルミナリエの光を灯した。その明かりは希望だった。遊び場の無くなった子どもたちのために自由に遊べる公園のマップも作成した。祖父はそうした仕事の傍らで、造園やまちづくりの学者や専門家、市職員などと協力して「瓦礫となった神戸に花を咲かそう」「ブロック塀の代わりに生垣を作ろう」などのスローガンを掲げ、全国からいただいた花を仮設住宅に植える阪神グリーンネットを結成した。大地震では絶対安全と言われた高速道路やコンクリート建築が崩壊した。祖父は、同じような街を造るのではなく、地震を包み込むような自然豊かな余裕のある街を目指すものだと考えている。

(2) 母の体験

母は、当時舞子高校2年生でその週から修学旅行があった。自宅は、須磨区の山側だったため被害は少なく自宅の損傷もほぼなかった。電気はすぐに供給されたのでTVで状況を確認できた。大きな災害が起きていることはテレビからの情報で知った。そうしているうちに、火災の灰のような黒い雨が降ってきて非常に気持ちの悪い天気で恐怖を感じた。母は、学校がどうなっているか分からないため、通学しようとし地下鉄が動いてないことを知った。ガス・水道もすぐに復旧したので、すぐに普通に近い生活を送れるようになった。クラスメイトとは、ポケットベル（当時、電話で番号を打ち込んでやりとりするもの）でやりとりをして連絡を取った。テレビで見ている場所が近い場所という感覚がなかったので、現実味がないまま過ぎていった。高校は休みになっていたのも、しばらくしてからは近所の友人と会い、名谷駅に行って遊んでいた。隣の長田区では悲惨な状況であったが、須磨区の山側は被害も少ないことから精神的に不安定になることもなかった。ただ、少し時間が過ぎてから被災地では暴行事件が増えているなどのニュースが飛び交うようになり治安の悪化に対しての不安があった。垂水区の友達が風呂に入れず状況が続いていたが、母たちは早い復旧の地域であったので風呂・トイレもすぐに使えた。食事面・衛生面で苦勞することは少なかった。舞子高校の友人が数人、母の家に風呂を借りに来たこともあった。母は震災を振り返り、震災を経験したことで他の都市での震災についても関心を持ち、

何か支援できることがあればしようという気持ちで生きていると語っていた。

2 被災体験を聞いて

私はこの家族2人の被災体験を聞いて、それほど被害が及んでいない人でも災害というものは大きなでき事になるということを改めて知った。これまで祖父や母に被災体験を詳しく聞いたことがなかったので驚くところが多かった。特に、祖父の神戸は大混乱だったがわずか30キロしか離れていない大阪では普段と変わらない世界が広がっているという言葉聞いてとても驚いた。震災は、誰にとっても忘れられないもので30年経った今でも明確に覚えているのだと身に染みて感じた。このような被災体験を聞いたからこそ日常に感謝することや次に災害が起きても対応できるような準備が大切であるということ改めて感じた。これから災害を経験していない人が増えていく上で、災害という非日常の状況になった際、耐えられない社会ならないために、これまでの震災などの教訓を語り継ぐ大切さをとても感じた。被災した話を聞いて私は人との繋がり大切さ、人と人との信頼関係があるからこそできることがあることを知った。災害時だけでなく、人から人に情報を伝えることの大切さを実感した。

環境防災科の活動でいろいろな講義、消防学校体験入校、ボランティア活動など、人と人との信頼関係が成り立っていないとできないことをたくさん見てきた。人と人との信頼関係があるからこそできることがあると知った。人との繋がり大切さを学び、色々な人の価値観や考え方により触れたいと考えようになった。出前授業や舞子高校での防災教育ではどのようにしたら防災の大切さや災害の恐ろしさが伝わるかを考えた。分かりやすく伝えることの難しさを知った。私は将来国際関係の仕事に就きたいと考えている。環境防災科で色々な地域の方々や講義に来てくださる先生方のおかげで様々な文化や価値観を持った方々と関わっていきたいと考えるようになった。この環境防災科で3年間学んだ自分なりの防災のあり方や人と繋がることの大切さを日本だけでなく海外の人々にも知ってもらいたいと考えている。ボランティア活動を通して国籍や文化の違いに関係なく広めていきたい。どこの国でも、災害に対する知識や情報を持っておかないといけない。私は、日本だけでなく海外の人々にも災害の知識や情報を知ってもらい多くの人々と関わっていききたい。

おわりに

これから先自分を含めて災害を経験していない人が増えていく。災害を経験していない人が増えると災害の教訓や語り継ぐことが以前より難しくなる。これから先、私達がどう災害を語り継ぎ、次の世代に繋げていくのが大切になっていくと感じた。また、自分達が当たり前前に感じている日常は当たり前ではない。自分達が今、当たり前前に暮らせているのは祖父のように一生懸命活動してくれた人がいるからである。日頃から、周りの人々や自分が今いる環境に感謝していきたい。また、祖父たちが行った様々な復旧・復興のための活動を知り、誇らしく思うと同時に自分自身もいつか同じように誰かの力になれる存在になりたいと感じた。

つないでいくもの

田中 千恵美

はじめに

阪神・淡路大震災発生から31年を迎えた。環境防災科で3年間学んだことを振り返り、将来へどのようにつなげるのか。自分ができることは一体何なのか。災害を体験していない視点からの気持ちや、環境防災科でしか経験することができない様々な活動での出会いや体験談からどのように考え行動していくべきなのか、自分の言葉で語り継ぐ。

1 母の体験談

母は震災当時三宮に1人で住んでおり、父とは別々の家で生活をしていました。母の家と父の職場が近いことから、震災前日に父は母の家に泊まっていた。そして地震発生の瞬間、かなり大きな「ゴー」という音と揺れが母と父を襲った。母がいた場所からかなり遠くに置いていた電子レンジが、揺れによって頭の横まで飛んできた。揺れが収まるまでは、母も父も自分の身を守るのに精一杯だったという。揺れが収まってからはまず、お互いの安否確認と避難経路を確保した。その後、建物の崩壊や火災に巻き込まれないよう、無事に逃げることを考え必死に避難所へ向かった。なんとか避難所に到着して安心したのもつかの間、人の多さと普段見慣れない光景に圧倒されてしまった。無傷の人もいたが、転んだような跡がある人、泣いている子ども、血を流している人もいる。これからどうやって生活をしていくのか母は不安と恐怖で心が押しつぶされそうになっていた。だが、そんな中でも幸せと感じるときがあったという。それは、ご飯をもらえた時やお風呂に入れた時だ。ご飯があること、食べたいときに食べられることが当たり前だった生活から避難所生活となり、ご飯を食べるタイミングも量もかなり限られた。常に空腹と戦う日々の中で、ご飯をもらえたときの幸せは今でも忘れない。また、自衛隊による仮設入浴でお風呂に入れた時は、今まで背負っていた気持ちや固まってしまっていた体が、楽になった。父と一緒に乗り越えた避難所生活の話聞いた後、母は後悔の気持ちを持っていると明かした。それは避難所へ向かう途中、助けを求めている声が周りでたくさんあったにも関わらず、何もできなかったことだ。あの時に助けることができているならば、その人は早く助かったかもしれない、声掛けをするだけでも、苦しい気持ちが少しは軽くなっていたかもしれない、と思いつつ自分に責めている。そんな母は、今では困っている人や助けを求めている人を見かけたら、すぐに声をかけるようにしている。あの時に戻ることはできないからこそ、二度と同じことが起きないように、常に心掛けている。

2 体験談を聞いて

いつも明るくてよく笑う母は、体験談を語り始めた瞬間、一気に真剣な顔へと変わった。私は体が固まった。執筆のために、母が気持ち切り替えて当時のことを細かに話してくれている。そんな姿を見て、母相手だからといって少し軽い気持ちで行っていたことを反省し、私もすぐに気持ちを切り替えた。内容は、普段の母を見ている私でも想像がつかないほどだった。もし母が当時1人だったらどれだけ心細かっただろうか、父がいたことは本当に奇跡で心の支えになったと思う。父の職場が近いからという小さな理由が2人の命をつなぎ、私や姉が生まれたと考えると、感慨を覚えた。そして私は、震災という辛い経験があったからこそ今の母があるのだと感じた。毎食毎食を大切に食べている姿や、何かをいただいたとき、誰かに何かを言われたときに、毎回嬉しそうに私に報告してくる。母の生活に当たり前なんて存在しないのだと感じた。また、普段の生活の中で救急車を見かけた時、母はいつも無事に助かることを祈っている。それは震災を経験して、たくさんの辛さを知っている母だからこそできることだと思う。搬送されている方が知り合いかどうかは関係なく無事を願うその姿を見て、最近では私も一緒に祈っている。誰であっても相手の気持ちに寄り添おうとする母の行いをこれからも真似し続けていきたい。

私は2年生の時に「1.17のつどい 阪神・淡路大震災30年追悼式典」に参加した。献火を行う時、今までに行ってきた「災害メモリアルアクション KOBE」をはじめ、「ひょうご安全の日のつどい」、舞子高校で毎年開催している「1.17震災メモリアル行事」など、阪神・淡路大震災に関連した行事やイベントが頭をよぎった。その活動を通じて、私は何を伝えていくべきなのか、私にできることは何があるのか考えた。それは、何かのイベントに参加することや討論をすることだけでなく、自分の言葉で自分が

伝えたいことを相手に伝えることだと感じた。母が知らない人の無事を祈るように、私も大切だと思ったことを素直に伝えたいと思う。これから発生すると言われている南海トラフ巨大地震の備えにもなるよう、1人ひとりの教訓からどんな備えが必要なのか、発生する可能性が高いことから予想外のことまで具体的な内容と対策を考えられるようにしていきたい。

私は将来、障害福祉サービス事業所の介護士として、利用者に寄り添いたいと思っている。きっかけとなった出会いが2つある。1つは手話との出会いだ。高校1年生の時に、環境防災科の授業で聴覚障がい者の講義を受けた。そこで手話の楽しさを知り、高校2年生の時に手話講座に通った。手話講座では、手話を学ぶ他に手話の歴史や聴覚障がい者が普段困っていることについて学んだ。その中で、手話ができる人の減少と高齢化が問題になっていると聞いた。自分にできることはないか考え、手話を生かせる仕事に就くことを決めた。日本には聴覚障がい者に配慮した介護施設がある。このことから私は介護士になる夢を持った。そしてもう1つは利用者の方たちとの出会いだ。高校3年生の夏休み、私は福祉体験のワークキャンプに3日間参加した。参加した理由は、介護施設で実際に体験し、知識をより深めるためだ。しかし、体験をさせていただいたのは介護施設ではなく、就労継続支援事業所だった。場所は違えど、利用者の方のサポートをする目的は同じである。体験内容は、利用者の方が行う作業のサポートや調理、お皿洗いなどだ。利用者の方の笑顔を見ると嬉しさでいっぱいになった。それと同時にこの笑顔を守るための備えや体制づくりが大切であると感じた。防災リュックなどの備えや避難経路の確認、施設の周りの環境など障がい者にとって困ることはたくさんある。1つ1つの困りごとに寄り添いながら解決できるように活動していきたい。

おわりに

環境防災科は私の人生を大きく変えた。小学生の頃から防災に興味はあったものの、防災イベントにも参加したことはなく、備えに関することや東日本大震災当時のことが書かれている新聞をまとめた本、地震発生直後の動画を見るぐらいだった。環境防災科に入学し、講義やボランティア活動を通してたくさんの視点からの防災を学んだ。言語やコミュニケーションの問題を抱える聴覚障がい者、災害時だけでなく、日頃から防災や減災の啓発活動を行う消防や警察、自衛隊の方々など、直面する課題はそれぞれだからこそ、防災には「これをすればいい」という1つの共通した答えはない。だからこそ、その人や団体の事例からどのような案が一番良いのかを探し続ける必要がある。1つの答えにとらわれずに、視野を広くして物事を考えていきたい。

「気象」と過去・未来の災害

田上 空也

はじめに

日本国は災害大国である。そのような地理的特徴のある日本国ではここ数十年で急速に気象災害、地震災害が頻発化している。気象災害では西日本豪雨、平成 30 年台風第 21 号（関空台風）、令和元年東日本台風。また地震災害は、兵庫県南部地震（阪神・淡路大震災）、新潟中越地震、東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）、震度 7 が 2 回発生した熊本地震、北海道胆振東部地震、令和 6 年能登半島地震など、災害が立て続けに発生している。ここ数十年の間で数年に一度という周期で震度 7 を観測する地震が発生しているが、気象災害については毎年、豪雨、台風、豪雪、猛暑が発生している。私は、激甚化する災害を知り、体験してきた中で、私が興味を持っている「気象」を用いてどのように防災、減災を行うことができるのか考えていきたい。

1 阪神・淡路大震災について

(1) 二見（明石市）

母は当時、現在住んでいる神出（神戸市西区）にはおらず、明石市の二見町でアパート 1 階に祖母と暮らしていた。母は震災当日の朝 5 時頃に目が覚めた。起きた後、勤めていた仕事場へ行くための支度をしていった。朝、寒かったためストーブをつけトイレに行った。トイレのドアノブに手をかけたときに、「ゴオオオ」という音が鳴っていたが、その音が何の音か分からず、地鳴りだと思わなかったようだ。この地鳴りが兵庫県南部地震（阪神・淡路大震災）である。地鳴りを感じ取ってから 2、3 秒後に下から突き上げられるような、何回も床を押し上げるような感じで母自身の体が浮くような感覚になり、まるで洗濯機の中で自身が回されている感じであった。ドアノブに手をかけていたため、そのまま座り込み地震の揺れに耐えていた。祖母は地震が収まった後、母が点けたストーブが大きく揺れているのを見て、慌ててストーブの消火ボタンを押した。周りを見渡すと母がそばにいないことが分かり、パニックに陥り慌てて母の名を叫んだ。トイレから出てきた母の姿を見つけて祖母は落ち着きを取り戻した。落ち着いた後、テレビをつけてみると映像には長田で発生した火災が映し出されていた。そこで母と祖母はその時初めて大きい地震であったことを知った。母は支度を終えて仕事に行こうと玄関のドアを開けようとした。しかし、地震の揺れによってドアが開かなかった。何とかしようとドアをこじ開けているとふと「この状態の中、仕事場に行けるのか」と思い、会社が心配になり電話を掛けた。事務所に電話が繋がり、事務所にいた事務員さんから「会社から連絡が来るまで待機しててください」と言われた。後に連絡が入り、その日だけ仕事が休みになった。連絡が入るまで待っている間にテレビを見ていたが、被災した三宮の映像が映し出されていた。三宮だけでなく、長田の火災、崩壊した高速道路の橋げたの様子、神戸国際会館が倒壊しているなど各地の映像が映し出されていた。その後、玄関のドアが開けられるようになりアパート周辺を見渡してみると、アパート自体は建物のひび割れだけで済み、周辺にある一軒家も半倒壊ではあったもののそこまで大きな被害ではなかったという。

(2) 神出（神戸市西区）

母は神出のことが心配になり見に行くと、神出の家は 2 階の屋根から瓦が数枚落ちていただけで大きな被害はなかった。当時築 100 年の家であったが、この程度の被害で済んだ。水道、電気、ガスといった主要なライフラインは地震発生後もすぐに使用することができた。神出の家では水道は地下から湧き水が出てきていた井戸水を使用していたため、都市部のように上水道が遮断されるなどの被害がなかった。また、ガスについても都市ガスではなくプロパンガスを使用していたため、すぐに使用することができた。神出の家の周辺にある家にも被害がなかった。

(3) 三木（三木市）

数年前に亡くなった祖父は仕事のため、早朝から三木市へ行くため車を運転していた。運転中、地震に遭い慌てて車を止めた。道路の揺れはまるで蛇が動くようだったという。揺れが収まり、祖父は車から出て外を見てみると、空が光ったという。運転中前にいた車の運転手の人も先ほどの地震で車から出て祖父のほうに近づき、顔を合わせた後に「空光りましたよね」と話していたと母は祖父から聞いた。

2 話を聞いて

私は、母から様々な体験を聞いて、注目されがちな神戸市、淡路島に比べ、明石市や三木市といった普段話を聞くことがないであろう地域の貴重な話を聞くことができ、視野を広げることができた。様々な話を聞いた中で一番驚いたことは、当時築100年の家がこの激しい地震の揺れに耐えることができたことである。明治時代からの建築物は、現在のような厳しい建築基準がなかった時に建てられたが、地震に耐えることができ、家族に被害が出なかったことに安心した。それと同時に昔の日本の建築技術が現代に通用していることに驚いた。私は生まれた時から現在に至るまで神出町に住み続け、建物が崩壊するほどの大きな地震を経験していない。経験してきた中で最大の地震は2018年に発生した大阪北部地震である。この地震は大阪という大都市圏で朝の通学通勤時間帯に発生した。この地震による神戸市の最大震度は4であったが、当時の私にとって印象的であり鮮明に記憶が残っている。私は兵庫県南部地震のような震度7の揺れを体験したことはない。しかし、現在までに震度5弱以上の地震を体験していても南海トラフ巨大地震のような非常に強い揺れを体験する可能性があると考えている。南海トラフは、南海、東南海、東海と大きく3つで構成されている。南海トラフ巨大地震は、この3つが同時に動いて地震を引き起こすこともあれば、3つが別々に動いて地震を引き起こすこともある。このことから、前者の場合は一度に大きな被害を受けることとなり、後者は長期的に複数回被害を受けることになる。どちらにしても、南海トラフ巨大地震は東北地方太平洋沖地震に匹敵するかそれ以上の甚大な災害となる可能性がある。また、地震災害のほかに気象災害についても向き合う必要がある。神出町は豪雨災害によって被害を受けたことはないが、近年の猛暑により神出町の多くの地域で行われている稲作に被害を与えている。私を含む多くの日本人が困難に直面し、日本国の存続を維持することが困難であることも視野に入れなければならない。母からの震災体験を参考にして、来る地震災害、気象災害に備えたいと感じた。私は、環境防災科の活動の1つである防災ジュニアリーダーで防災ニュース（防災新聞）を作成してきた。防災ニュースは、毎月15日に発刊しており、各月に発生した災害を新聞として記事にまとめ、一般の方々が防災に関心を持ってもらえるようにという思いのもと、発行している。地震災害も重要で興味を持っているが、私は昔から気象が好きで気象災害のほうに強く興味を持っている。小学校高学年から現在に至るまで気象に関する記録を本にまとめたり、気象情報の情報提供を行ったりする活動を行ってきた。そして、私が気象に興味を持つようになったきっかけは、2018年7月に発生した西日本豪雨である。この災害は、台風7号が日本付近に停滞していた梅雨前線に暖かく湿った空気を大量に供給し続けた影響で、梅雨前線が活発化し、長期間にわたり西日本を中心に豪雨が続いた災害である。この災害により、西日本を中心に11府県という広範囲に大雨特別警報が発表され、兵庫県にも初めて大雨特別警報が発表された。また、この災害による神戸市に発表された警報期間が約4日間と2013年に統計を取り始めてから最長であった。この災害は滅多に発表されることのない特別警報が発表されるほどの極めて危険な災害であると感じた。その後、私はこの災害を契機に、2種類の気象に関する記録を本に書き始めた。1つ目は過去に神戸市で発表された気象警報・注意報履歴。2つ目は歴代の台風のデータを記録した台風記録を作成した。この2つの本を作成することで過去にどのような災害が神戸市に被害を与えていたのかということが1つの指標として理解することができる。私は将来この数年間記録し続けた貴重な気象データを用いて一般の方でも過去の気象警報を確認することができるシステムを作成し、日本国の防災、減災に努めていきたいと感じた。

おわりに

環境防災科で学んだ3年間でも様々な災害が発生してきたが、私のできることをして、防災ニュースを通して気象現象と発生した災害についての概要を伝えてきた。また、募金活動を通じて微力ではあるものの、被災地の支えとなることができ嬉しく思った。これからも気象を用いて防災、減災を行うとともに日々変化する気象を見届けていきたい。

未来へ託された思い

田村 洸太

はじめに

阪神・淡路大震災から30年以上が経ち、神戸のまちも綺麗になり震災の面影も無くなっている。では、人の記憶はどうだろうか。震災を経験した父が時間の流れとともに当時の細かいことは忘れていくと言っていた。まちも復興を遂げ人の記憶も薄れていく。しかし、実際には震災の記憶を完全に忘れることはできないし、たくさんの人の心の奥には今も残り続けている。そんな中でも、阪神・淡路大震災を機に創設された環境防災科に入学した私たちがアクションを起こすことがいかに大切かを様々な活動を通して感じることができた。

1 父の被災体験

父は当時今の私と同じ高校生で祖父、祖母と須磨区に住んでいた。午前5時46分地震発生時は父と祖母は2階で寝ていて祖父は起きていたが2階にいた。地震で起きた時には家の2階は崩れ屋根には穴が開いていた。父は目が覚めると目の前が真っ黒で布団の上には箆筒が倒れその上には崩れた屋根が重なっていた。幸い布団を被っていたこと、頭側の箆筒より先に足側の箆筒が倒れていたことで怪我をすることはなかった。そして隙間から自力で出ることができた。祖母も箆筒の下敷きになったがすぐに祖父と父が助け出した。その時倒れた箆筒から靴下が出ていたので怪我をしないように履いた。

隣の家からは、おじさんが地震によるパニックで「もうダメや」と言っておばさんに「あんたなに言っているの」と叱られている会話が聞こえた。あとで知ったことだが須磨の駅の近くでは火災が発生していた。1階に行くための階段は崩れていて降りられる状態ではなかった。1階から電話がかかってきた音がした。京都に住む伯父からの電話だったが出ることではできなかった。2階から出る場所は窓しかなかった。下を通っていた男性に襖を置いてもらい3人は降りることができた。この頃には周りの人も家から出てきていた。その後すぐ近くの親戚の家に避難した。親戚の家はリフォームしたばかりで壁に亀裂が入る程度の被害で済んでいた。隣町のコンビニエンスストアまで買いものに行ったときに水道が止まっていることや道に充満した臭いからガスがもれていることもわかった。コンビニエンスストアでは店員さんの判断で全商品が100円になっていた。父は家に残していたものを取り出すために半壊状態の家に入って作業をしたり写真を撮ったりしていた。父が家に入った次の日には突然大きな音をたてて家は完全に崩れ全壊した。食料の買い出しには明石まで自転車で走っていた。その後家族で一時的に大阪に避難をした。

2 祖父の被災体験

祖父は当時40代でNTTに勤務していた。阪神・淡路大震災の起きた朝は夜勤で兵庫区の下沢通にある電電ビルの8階の仮眠室で睡眠をとっていた。普段は仕事場の近くに置かれていたソファで睡眠をとっていたが、この日はたまたま仮眠室で睡眠をとっていた。地震の後ソファを見ると電球が落ちてきており、普段通り寝ていれば怪我をしていたかもしれない。午前5時46分ガタガタと揺れ始めた。その揺れは最初ビルにトラックが衝突した衝撃だと思った。上にドーンとあげられてエレベーターで下に落ちる時のような体の浮いた感覚になった。次に横に揺れ始めた。飛び起きて事務所に行くと電話機や端末機が散乱していた。この時まだ揺れで立ってられず座ったような状態だった。当直のもう1人の方と2人で8階から1階まで階段で移動した。この時エレベーターは壊れていた。壁はひび割れていたがビル自体はとても頑丈だったので崩れ潰れることはなかった。1階に降りしばらく辺りを見回すと大変なことになっていた。入り口の扉は壊れ外に出ることができなかった。足で蹴って壊して外に出た。様子を見た後、8階に上がって外を見ると近所から煙が上がっており、隣の兵庫警察所では1階が潰れていた。7時半頃に1本だけつながっていた電話で家族に連絡を取った。ただその声は雑音混じりで聞こえづらかったという。この日の夜は自家発電で電気がついていたため通用門を閉め人が入って来ないようにした。ご飯は、夜10時に明石の人が持ってきてくれた手巻き寿司だけだった。3日間復旧作業を行いようやく家に帰ることができた。その後も作業しに3日間作業して、家に帰ることを繰り返した。

3 話を聞いて

私は生まれてから17年間一度も大きな地震を経験したことがない。日常生活の中で地震による被害を経験したこともなく、どこか遠いでき事のように感じていた。今回の卒業研究を行うまで父や祖父の詳しい被災体験も聞いたことはなかった。私は環境防災科に入ってから、ボランティア活動を通じて阪神・淡路大震災の被災者の方々から直接お話を聞く機会があり、実際に聞いた話を語り部としてその経験を伝える活動も行った。また、学校の講義や震災遺構を訪れるなど震災について学ぶ中で、「自分とは関係のないでき事」ではなく、「知っておかなければならない現実」だということを強く感じるようになった。今回、改めて自分の家族に阪神・淡路大震災の話を聞く機会があり、自分の住んでいる地域で、実際に阪神・淡路大震災という大きな震災が起こっていたことを感じる事ができた。父は今の私と同じ高校生のときに地震を経験した。自分がもし同じ立場だったらどうなっていたのかと思うと、その重みを感じた。

私はこの3年間、環境防災科で災害への備えや行動について学んできた。しかし、もし私がいざ地震が起きたというときに本当に正しい行動ができるのかと問われると、自信を持って「できる」とは言いきれない。父の話では、当時は寝ていたところを突然地震に襲われ、気がつくと家は崩れてしまっていたという。その話を聞いて、「正しい対策とは何なのか」「備えとはどうあるべきなのか」ということを、あらためて深く考えさせられた。また、祖父から聞いた話では、震災直後の復旧活動の大変さや、復旧のために力を尽くしてくれた多くの人の存在を知ることができた。特に印象に残ったのは、ライフラインやインフラなどの復旧に関わる人たちもまた被災者であるということだった。実際に祖父は地震の後復旧の仕事に携わっており、しばらくの間、自宅に戻ることもできず連絡を取るのも難しい状況で働き続けたという。家族が被災している中でも、地域や社会の復旧のために働いていたその姿から、災害時に被災者でもある人の負担の重さを感じた。

このような話を聞く中で、災害時には「被災した人を助ける」だけでなく、「助けている人を支える」という視点も重要であると実感した。支援する側もまた、心身ともに大きな負担を抱えている。そうした人たちを守るための仕組みや意識も、今後の防災において考えていく必要があると思った。震災を実際に経験していない自分にとって、体験者の声を直接聞くことは、何よりも大きな学びとなる。教科書や講義だけでは得られない、生の感情や当時の空気感がそこにはある。防災を学ぶ上で、そのような話を聞く姿勢を大切に、自分なりにどう受け止め、どのように行動につなげていくかを考え続けていきたい。

おわりに

この3年間、周辺地域だけでなく東北、九州など幅広い場所で活動してきた。その経験から、訪れた場所で会った人との交流や、その土地について知る事の大切さに気づいた。例えば、神戸に住んでいると火山とは無縁である。しかし、私が全国中高生ジュニアリーダー育成会議のために訪れた長崎県雲仙市では生活の身近なところに火山があり火山は独特な文化や美しい自然を生み出すと同時にその火山の噴火に対処するための計画や対策が必要である。このように美しい自然と文化を知ることが防災について学ぶことにも繋がり防災だけをみるのではなくその地域全体を見ることがもっとも大切な防災だと私は感じた。また、実際にそこに住む人のお話を聞き積極的に交流を行うこと、インターネットなどで調べて出てくるようなことではないその場所でしか学ぶことのできない学びができ、その体験はこれから防災を学ぶ上でも大切なことだと考える。

災害の教訓を未来に繋ぐために

為村 龍星

はじめに

阪神・淡路大震災から31年がたち、当時の状況を覚えている人が減ってきている。しかし、毎年1月17日にはテレビやラジオなどメディアに阪神・淡路大震災の当時の状況が取り上げられている。映像だけでは災害を体験していない人たちには、災害の怖さは伝わらない。自然災害の多い日本に暮らす私たちだからこそ、地元の災害について知り、様々な災害に対して備えていくことが大切だ。3年間環境防災科で多くの人から災害について教えていただいた知識を、未災者である私たちが「語り継ぐ」ことが使命だと思い、語り継ぐ。

阪神・淡路大震災について

1 祖母と母の震災体験

祖母と母は、震災当時から神戸市垂水区に住み続けている。地震が発生した時は、祖母は40度の熱が出ていたが揺れの衝撃で熱は下がった。また、母は大きな縦揺れを誰かがベッドで飛び跳ねているのだと思った。階段の電気が落ちて、ガラスまみれの状態を見て地震だと気づいた。地震によって家の2階が傾き、壁がブランブンの状態で全壊だった。近隣一帯で一番被害を受けたと思っていた。しかし、家から阪神高速が崩れている様子が見え、ラジオで長田の街が火で覆われていると聞き、大変なことが起きていると思った。すぐに祖父が会社に向かうと言いだし、朝の9時に家族総出で長田にある会社へ向かい始めた。ガラスの破片によるタイヤのパンクやたくさんの警察による交通規制により、かなりの遠回りを強いられた。会社につくと会社近くの「二ホンロウソク株式会社」で白い煙がもくもくと上がっていた。消防士の人達は風の流れが変わり、違う家に火が移る以外では消火活動をしなかった。地震の火災で半焼では補償対象外とされていたため、全焼するまで消火活動をしないという策がとられたところもあったそうだ。その後、家に帰り、避難所に行くか行かないかを家族で話し合ったところ、大型犬2匹と中型犬2匹がいたため、避難所には行かないと判断した。家の建て直しは、1階を建て直しているときには、2階に住むような形で生活を続けながら行った。2階で生活しているときには、キッチンがないため、ガスコンロを使っていた。水は近くの公園まで車で行き、ポリタンクを2人で4つももち、30分以上の行列に何回も何回も並び、水をもらった。車で行ったとしても、災害時の活動で一番身体的にしんどかった。震災によって食器はほとんど割れてしまっていたので、サランラップと紙皿があったことで、紙皿を洗わなくてよいので水を使わずにすんでよかったと思った。

2 曾祖母の震災体験

曾祖母は、震災当時から神戸市長田区に住み続けている。地震が発生した時には、曾祖父のお弁当を作ろうとしていたところだった。突然、鍵のかかった窓が開き、立っていれないほどの縦揺れに襲われたことは今でもすぐに思い出せるくらい怖かった。隣の家の曾祖母の友達は階段が外れていたため、2階の窓から飛び降りて、足を骨折した。前の家の奥さんがトイレに閉じ込められ、旦那さんがタンスの下敷きになっていると声が聞こえ、近所の人と協力して、助け出した。その後、徒歩5分の公園に避難した。そこから見た長田の街は、火の海で、曾祖母が子どものころの空襲を思い出すほど、印象的な光景だった。

長田高校に開設された避難所に行ったが、布団やラジオなど生活に必要なものは、自宅から持ってきて使っていた。支援物資が届くまで、水がなかったので、須磨まで水をもらいに行った。その水を使い、手洗いで洗濯をした。避難所生活で一番印象的だったことは、仕切りがなく、寝ていると知らない人が布団を踏んで行ったり、頭につまづいたり、いびきや赤ちゃんの泣き声がして、寝るのに苦労したことだ。3月・4月からは、抽選であたった西神の仮設へ移動し、生活した。暑い中クーラーもなく、床はベニヤ板一枚だった。そのため、雨が降ると床が湿り、布団にカビがはえたり、コケが生えたり、ノミがわいたりした。震災を体験して、水が一番大切だと思った。日用品となるロウソクやカセットコンロは何も考えなくても家にあったが、水はなかったので、備えておく必要があると思った。

3 話を聞いて

私は、環境防災科の授業でたくさんの方からお話を聞く機会があったが、祖母や曾祖母から阪神・淡

路大震災当時について詳しく話を聞くのは初めてだった。実際に身近な人にインタビューをしてみて、改めて3つの問題を考えるようになった。1つ目は、動物と共に行ける避難所が全国的に少ないことだ。阪神・淡路大震災や東日本大震災など多くの災害を体験し、避難所もプライバシーや衛生面のことを考え、ダンボールでの仕切りやダンボールベット、救援物資の届け方などたくさんの対策がとられてきた。しかし、ペットを連れて避難所に入れるところは震災当時よりは増えているものの、すべての人が困らないほどはないため、避難所に行かずにペットと家で暮らす人がいることを知った。2つ目は、震災時の備えだ。水を使わないようにできるものがあるとよいと知った。阪神・淡路大震災の時には、こんなに大きな災害が起こるとは思っておらず、備蓄の必要性がそこまで知られていなかったことで、支援物資が来るまでの間、生活に必要な水もなく、公園に水をもらいに行かなければ困ることを知り、自分は最低でも7日分の水を備蓄しておきたいと思った。3つ目は、避難所で仕切りがないことだ。仕切りがないことで、知らない人に布団を踏まれたり、体につまづく人がいたり、プライベート空間はなかった。令和6年能登半島地震では、家族ごとに段ボールでしきられたり、簡易テントが設置されたり、カーテンや布で目隠しをして着替えや休憩スペースにしたりするなどの対策がとられている。災害を体験した人たちに聞かなければ分からない状況や課題があるため、語り継ぐ必要があると思った。

私は将来、神戸市役所の都市計画課で働きたいと考えている。都市計画課では、都市を持続的に発展させるために、土地利用や開発の方針を決め、地域ごとの特徴を活かした都市づくりを進めている。祖母と母の話にあったように、震災時は道路がガラスの破片だらけでタイヤがパンクし、そのせいで車が動かせなくなり、避難が困難になったり、救急車や消防車といった緊急車両が通れなくなったりするなどの問題が発生した。そのような問題に取り組み、市民が安全で快適に暮らせる環境を作っていききたい。また、市民の意見を取り入れた計画を作り、より良い未来を目指している。具体的には、地域ごとの防災訓練や情報共有の場を設け、住民一人ひとりが自助・共助・公助の役割を理解し、災害時に適切な行動ができるよう支援したい。私は3年間、視覚特別支援学校との交流に参加した。目隠しをしてフロアバレーボールを体験し、見えないことがこんなに恐いことなのだと実感した。また、緊急時の内容を伝える文を読み上げ、聞いた内容を伝言していき、正確に伝えられるかという活動を行ったが、伝えることは難しかった。災害時には、避難所に張り紙を貼っておくだけでは、視覚障がいがある人には伝わらないので、放送で定期的に張り紙の内容を伝えることが必要だということを知った。このような学びを生かし、災害時に障がいのある方のスムーズな避難ができるように、まちの方々が障がいのある方を把握し、助け合えるまちをつくっていききたい。高齢者や障がい者など、支援が必要な人々への配慮を忘れず、誰もが安心して暮らせる社会を目指したい。そのために、災害が起こる前から地域の人とかかわりを持ち、高齢者や障がい者の方々とも交流をし続けることで、困ったことがあったときには気軽に相談できるような関係性を大切にしたい。

おわりに

私は、この学びを今後の人生に生かし、将来は神戸市役所の都市計画課で、市民が安全に暮らせるまちづくりに貢献したいと考えている。災害に備えた道路や環境づくり、障がいのある方への配慮、地域のつながりの強化など、今の自分にできること、将来の自分が果たすべき役割が、今回の家族の体験を聞いてより明確になった。阪神・淡路大震災を直接知らない世代が増えていく中で、語り継ぐことは、私たち未災者に与えられた大切な使命である。これからも私は、人々の声に耳を傾け、防災について学び続け、その学びを地域に還元していきたい。そして、誰もが安心して暮らせる社会をつくるため、災害が起こる前から地域とつながり、支え合える関係づくりを大切にしながら行動していきたい。

伝えたい

寺崎 慎人

はじめに

阪神・淡路大震災から30年を超え、阪神・淡路大震災について触れる機会は、防災を学習していない限り減少傾向にある。30年という月日が長い短いというのは人それぞれだが、未災者であり18年しか生きていない私たちにはわからない。そして、被災者にとってのこの30年の思いは被災者それぞれにしかわからない。だからこそ震災を経験した人に話を聞き、さらにそれをまとめて未災者から未災者へと語り継いでいく必要があると思う。

阪神・淡路大震災について

1 母の体験談

母は当時24歳、明石市の団地の5階に住んでいた。母は妊娠8か月で当時1歳10か月の姉を育てていた。地震発生時刻は寝ていたが、「ゴゴゴォーッ」という地鳴りが聞こえてきて目が覚めた。その瞬間に地震が来ると察知し、「地震や！」と大声で叫んだと同時に照明のオレンジの豆電球が「パチーン」とはじけて、縦に横にと大きく揺れ始めた。幸い大きな家具を置いていない部屋で寝ていたので物が落ちてきたり倒れてきたりすることはなかった。隣で寝ていた1歳10か月の姉に布団をかぶせて抱きかかえて守るように揺れがおさまるのを待った。他の部屋ではタンスが部屋の真ん中まで移動していて、台所では食器棚の中のものや調味料などの瓶が割れて中身が散乱していた。すぐに玄関のドアを開けて避難経路を確保し、加古川の実家と四国の親戚に固定電話で連絡した。早い時間帯に電話をしたので回線が混み合う前に安否確認をすることができた。その後大きな余震が何回もあり、トイレの水もあふれ出して水浸しになった。まだ暗かったのでローソクで明かりを確保した。この時、結婚式で使った1メートル程の長いキャンドルが大活躍した。揺れの合間に冷静に判断し、ガスの元栓を閉めて実家に向かうために準備をした。母は当時お産が近かったのでいつ入院してもいいように、持ち出し袋のようなものが玄関のクローゼットに常備されていたので早く家を出ることができた。実家に向かう道中、信号機の光が消えていて街中が停電していることに気づいた。早めに行動していたので混乱に巻き込まれずに移動することができた。実家に着いてみると外壁に亀裂ができており、台所の壁も亀裂が入っていた。実家で寝ていた叔父はベッドの頭元に置いてあったラジカセが落ちてきて目を覚まし、祖母は2階に上がろうと階段を登っている時に揺れたため階段を2、3段踏み外したと聞き、母は自分は幸運だったのだと再認識した。実家に住んでいた祖父は当時警察官だったため、母の安全を確認すると垂水まで電車で行き、そこからは国道2号線を徒歩で移動し、三ノ宮や長田などの被災地で救助活動、復旧活動を行っていたそうだ。さらに母は、1月16日の夕方に車で走行中に空が真っ赤に燃えるような色で、雲も見たことのないような形だとふと思ったそうだ。また、「バァーン」という地盤がずれたようなものすごく大きな音を聞き、今思えばすべて翌日に起きる大地震の前兆だったのではないかと思っている。

2 話を聞いて

母が被災した場所は神戸に比べると被害は少なかったようだが、当時妊娠中で1歳10か月の姉がいた中での被災は、他の人よりも身体的に過酷だっただろうし、実際の物的被害よりも精神的に大きな被害を受けていたのだと思う。妊娠中ということもあり母子ともに体調の変化に気が抜けない状態で、冷静に判断し混乱に巻き込まれる前に実家に避難することを選び、おなかの中にいたもう1人の姉と自分の体、家族を守った母はやはり精神的にも身体的にも強い人だと再認識した。2人の姉は当時の記憶がなく話を聞くことはできないが、母が文字通り命がけで2人を守り、無事に出産したということは深く心に刻んでおきたい。また、話を聞いていると、大きな家具を置いていない部屋で寝ていたり、玄関に持ち出し袋のようなものを置いていたり当時にしては偶然だったにしても災害に強い暮らしをしていたことに驚いた。他界した警察官だった祖父のことも母を通じて聞くことができ、自分の身近なところに被災した神戸のまちの復旧に尽力した人がいたと聞いて誇らしく思った。地震発生の前日の様子についても話を聞くことができ、他の人からも聞いたことのある異変もあったが初めて聞く異変もあったので、一部は科学的に証明されていないことであつたとしても人それぞれの感じ方として受け止めて、他

の人の前日の過ごし方や感じたことなどを聞いてみたいと思った。母から聞いた話や被災者の方から聞いた話を語り継ぐことの大切さを改めて感じた。

1年生から継続して参加している南あわじ市の小学校への出前授業は自分が学習した防災、減災の知識を小学生に伝えることで語り継ぐということに繋がっていると思う。未災者である私たちが未災者の小学生に語り継ぐことはとても大変なことであるが、被災者の高齢化や語り部の減少が進む中で災害の記憶や教訓を風化させないという意味で、私たちが語り継ぐことにはとても意味があり大切なことだと思う。これからの出前授業では自分が聞いたお話を授業の中にもっと取り入れていきたいと考えている。

さらに私は将来、高校の体育教師になりたいと考えている。語り継ぐを書くにあたって母から聞いた話を防災教育に組み込んで、少しでも生徒の防災意識の向上につなげたいと思った。また、災害時に避難場所となるグラウンドや体育館の安全確認を日ごろから行うことで安全に避難することができる。体育教師と防災はどちらも「いのちを守る」という共通点がある。日頃からの安全確認はもちろんのことだが、東日本大震災では、津波に巻き込まれそうになって野球のフェンスに「よじ登って」助かった人、津波に流されそうになりだが、鉄塔に「しがみついて」助かった人もいる。このような「よじ登る」「しがみつく」といった行動は体育の学習指導要領にある「体づくり運動」に関係すると考えた。そのため体育教師という立場で生徒の強い体を育むことで、災害時に生徒の命を守ることに繋がると考えた。教師という仕事は命を守るとともに、命の大切さを伝える仕事でもある。ただ単に保健体育の知識、機能を教えるだけでなく、その立場をうまく活用して学校の防災教育の活動には積極的に参加し、自分が高校3年間で学んだ防災の知識を防災教育に組み込んでいきたい。

おわりに

今回母にインタビューをして、過去に聞いたときは、まだ幼く理解できていない部分もあったが、改めて聞いてみると当時の状況をより明確に想像でき、母の心情も少しは理解できたように思う。今回は母の話しか聞いていないが、これからもっと多くの人話を聞き、それらをさらに未災者に語り継いでいこうと思う。過去の災害を経験した人たちは高齢化していき語り部の数も減っていくので、私たちのような世代が災害を経験した世代に話を聞き、子どもたちに伝えていくことが語り継ぐことの意義であり、これから先起こるとされる大災害に未災者が備えるきっかけになるのだと思う。

想いを繋ぐ

二宮 杏樹

1 阪神・淡路大震災

(1) 尼崎消防職員Hさんの体験談

Hさんは消防学校を卒業して4か月後に阪神・淡路大震災が発生した。発生時は仮眠をとっていた。すぐに消火活動を行おうとしたが水道管が破断して放水することができなかった。普段自分たちがしている消火活動や訓練のことができずとても悔しかったそうだ。またさまざまな場所で被害が出ていて、次から次へと通報が殺到し対応ができなかった。阪神間（西宮、芦屋、神戸）に被害が多く救助隊が1か月ほど応援に行っていた。

(2) 尼崎消防職員Tさんの体験談

Tさんは当時、塚口出張所に勤めていて消防士長だった。このとき当直勤務中で仮眠をとっていた。いつもなら3人で寝ているところ、この日はたまたま2人で寝ていた。当時は「地震はそんなに起きるものじゃない。」と言われていたが、地震が発生したとき、すぐにこれが地震だと分かり恐ろしかった。仮眠室を見渡すと、人の身長より高いロッカーが倒れており、畳もえぐれていた。いつも通り3人で寝ていたら命がなかったかもしれない。すぐに車庫へと降り、ふと神戸のほうを見ると煙が上がっていた。長田の火災だ。尼崎市では立花町に火災の被害が出ていた。Tさんは初めに新幹線沿いの家に救助に向かった。道中に見た被害がある建物はほとんど同じ崩れ方をしていた。現場に着くと男の人がこたつで寝ていてそのまま挟まっている状況だった。Tさんは隊の中でも小柄だったので中に入って救助活動を行った。救助が終わるとすぐに立花町の火災現場へと向かった。この火災で死者は11人と市内で最大規模の被害となった。地獄に行ったことはないが、地獄とはこのようなものではないかと感じた。このような現場での活動を隊交代を続けながら行った。幸いにも塚口出張所は水道が使えたため、夜になると地域の人に水を渡すことができた。翌日Tさんの隊は救助工作車で普段なら30分で行けるところを2時間かけて神戸の応援に向かった。普段明るい隊長が「今日は笑うのやめよな」と涙を流しながら言った。隊長は神戸の友達が亡くなったことを知ったそうだ。神戸に到着すると札幌消防などいろいろな都道府県の消防車両があり鳥肌がたった。尼崎の火災とは比べものにならないほどの規模で、亡くなった人は真黒でマネキンのようにになっていた。活動が終わり家に帰ってもサイレンやヘリの音が響き渡り落ち着ける状況ではなかった。「関西で地震は起きない」と言われていた時代に、阪神・淡路大震災が発生した。消防でも防災体制が変わるきっかけとなった。ほかにも地震をきっかけに「市のことは市で守る」という消防の中だけでなく、世の中の仕組みも変わっていった。

(3) お話を聞いて

私はこの語り継ぐを書くにあり、震災を経験していない母の話聞くのか、震災を経験した人の話を聞くのかとても悩んでいた。そこで自分の住んでいる場所で自分の将来就きたい職業である消防官の人が震災当時どのような活動をして、どのような被害があったのかを知りたいと思い、尼崎市消防局北消防署に行ってお話を聞くことにした。お話を終えた後、Tさんが「今だから涙を流さずに話せるわ」と言われた。その言葉を聞きこの30年間、どのような思いで過ごされたのだろうかと考えた。きっと様々な葛藤を乗り越え、様々な経験をされたのだと思う。自分にも大切な家族がいるけれど、多くの人の命を助けるために危険な所に行き活動する使命感を感じた。また、お話を聞きに行った時には、「誰かに聞かれないと話すことはなかった」「話してみようとエンジンをかけてもらった」と言っていた。震災の経験を語ることはとても大変なことなのだと思えば改めて感じるとともに、話していただけるきっかけを作れたことをうれしく思った。地獄のような現場で次々と助けを求める声を聞きながら、自分たちのできることを精一杯されている姿を想像すると、消防官という仕事の大変さとすごさを感じた。救える命も救えない命もあるのだということ、消防官にも心があり、それを押し殺して活動をされていること、そんな消防官の心の内を知ることができた。

2 環境防災科の活動

(1) 石川県災害ボランティア活動

私は1月1日に起きた令和6年能登半島地震の災害ボランティア活動に、発災直後の3月に参加し

た。発災直後の被災地に行くのは初めてで、高校生の自分たちに何ができるのか不安な気持ちもあったが、何か役に立ちたいという思いのほうが強かった。現地では、被災者のニーズを聞き取り、ボランティアの割り振りが行われていた。私たちは飲食店の片づけに参加した。もうお店は営業しないため、割れたコップやお皿だけでなく、割れていないお皿も災害ごみとして片づけた。お店の方が、「使えるけど仕方ないよね」とつぶやかれていた。被災直後のボランティア活動は、物理的な片づけだけでなく被災者の心の整理にもつながるものなのかもしれないと感じた。その他にも、大きな冷蔵庫を外に運んだり、家の周りの崩れた塀のがれき撤去をしたりした。どの家も高齢の方が多く、家族だけで片づけるのは難しいと感じた。私は、被災者の役に立ちたいという思いで活動を行っていたつもりだったが活動が終わってみると、私たちが被災者から元気をもたらしたように感じた。どこに行っても笑顔で「どこから来たの?」「来てくれてありがとう」と言葉をかけてもらった。能登の人たちの温かさを感じることができた。被災地ボランティア活動に参加し、被災地に行かないと感じられない思いを感じることができた。

(2) こばと聴覚特別支援学校との活動

私は1年生の時から続けてこのボランティアに参加している。活動内容は耳の聞こえにくい幼児に向けて手話を使って劇をしたりクイズをしたりして災害が起きた時の行動を伝えている。子ども達と防災を学ぶために体験して覚えるということが大切だと学んだ。火災であれば姿勢を低くして口と鼻を覆うこと、地震であれば頭や胸を守る姿勢になることなど実際に試してみることで覚えやすく、知識を身につけられると思った。また防災は怖いものという印象を与えないために絵本や劇で優しく伝えることも大切だと学んだ。相手に合わせた方法で伝えることの重要性を学んだ。私は将来消防官になって誰も取り残さない防災を実現したいと思っている。そのためにこれからも自主的に手話の勉強を続け、聴覚障害の方も救えるようにこの経験を生かしていきたい。

おわりに

私はこの語り継ぐを通して自分も被災しながら市民を救う消防官の姿に改めてあこがれを抱いた。そして環境防災科で経験したことや知識を高校生でやめるのではなく、大学生や大人になっても学び続けることが大切だと考える。また自分の中だけで終わらせるのではなく家族や友達、周りの人に想いを繋ぎ巻き込んで、防災と関わっていく人を繋いでいくことが大切だと思う。

違いと差

長谷川 虎粹

はじめに

近年、激甚化している自然災害は、人々に大きな脅威をもたらしている。その脅威から命を守る行動を行うには、様々な知識が必要になる。しかし防災対策には個人差があり、全く行っていない人もいれば、徹底的に行っている人もいる。これは災害に対する考え方や捉え方が人によって違うからなのだろうか。これらの違いは何が原因なのだろうと思ひ、災害を経験したことがある人（被災者）と経験したことがない人（未災者）では、これからの災害で被害の差が生まれるのではないかと考えた。そして私は、経験がある人（被災者）のほうが被害は少ないと考えた。それは被災者と未災者では、災害への我が事意識や防災対策などに差があり、それが被害の差につながると思ったからだ。

1 母の体験

(1) 地震発生の瞬間

当時 18 歳の母は神戸市中央区にある実家のマンションで寝ていた。大地震の体験は初めてで、震度 7 の激震でも気づかず起きることはなかった。揺れの最中、曾祖母の叫び声で目を覚まし、すぐに曾祖母のもとへ向かった。曾祖母の足元にブラウン管テレビが飛んでくるほどの激しい揺れだった。部屋の中を小さなライターで照らし周りを確認すると、食器棚は倒れ、冷蔵庫の中身は飛び出し、コンクリートの壁も剥がれ落ちてパイプがむき出しになって曲がっていた。ドアは歪んで開かず苦戦していると、仕事場から戻ってきた祖父と祖母がバールのようなものでドアをこじ開けた。曾祖母が関東大震災の経験者だったこともあり、ガスの元栓を確認したり部屋の中でも靴を履いたり、二次災害につながらないように意識をしていた。電気につかないため暗くて何もすることがなく、明るくなるまで呆然と空を眺めていた。テレビもつかずラジオもなかったため、詳しい様子がわからぬまま日が昇り外を見ると、変わり果てた街の姿に絶句した。2階建て家屋の屋根が地面に落ちて、中の家具や生活用品は四方八方に飛び出している。いつも活気あふれる商店街もめちゃくちゃになっていた。近所で火災こそなかったものの、そんな街の姿を見て母は、まるで戦争の空爆で破壊されたような感覚に陥った。

(2) 避難所生活

日が昇り、とりあえず避難所に避難しようと考えたが、日ごろから緊急時の対応を家族で話していなかったので「どこに避難すればよいか」や「何を持って行ったらよいか」が分からなかった。そのため近所に住んでいる方に尋ね、布団や服、食料品や貴重品を入れたリュックサックなどをもって、マンションに隣接する幼稚園に避難することにした。すぐ隣にあるということもあり早い時間に行くことができ、そこまで混雑はしておらず布団を床に敷き場所取りをした。時間がたつにつれ床が見えなくなるほど人が多くなってきて、遅くに来た人は敷地にも入ることができず追い返されていた。初めの 3 日間は何もすることがなく、4 日目に物資が届き、大人の方に言われるがまま物資を運ぶお手伝いをしていた。最初の物資でもらった乾いたパンは、賞味期限が切れていた。毎日同じパンや冷えて硬いおにぎりはおいしくもなく食べる気が起こらなかった。そんな中近所の方たちによる炊き出しがとてもおいしく今でも心に残っている。しかし小さな避難所だったためか、外からのボランティアが来ることはなかった。

(3) その後

母の友人は神戸市西区に住んでおり「家のシャワーのお湯が出る」ということを聞き、中央区から自転車で友人宅に向かった。それからたまにそこに通いシャワーを借りていた。祖父母が営んでいた店は当面営業が困難になり、母のバイト先もさんちか（三宮地下街）にありつぶれてしまった。仕事がないと生活ができないので母は京都に、叔母は淡路に住み込みで働きに行こうとしていたが、祖母に止められた。しかし周りの若い人は皆、神戸を離れ働きに出ていた。少し落ち着いてきたときに市の職員の方が家に来て、罹災証明をもらった。マンションは半壊の判定を受けたので、避難所を離れ、補強工事が行われている自宅へと帰ることができた。

2 父の体験

(1) 地震発生の瞬間

当時 17 歳の父は神戸市から遠く離れた北海道帯広市の実家で寝ていた。地震の影響で北海道が揺れることはなく、朝のニュースで大きな地震があったと知った。この地震で初めて神戸を知ったような、大きな衝撃であったが、同じ日本で起きていることでも「他人事」のような反応だった。当時インターネットは普及しておらず、地震の情報はすべてテレビのニュースのみからだった。その中でも高速道路が倒れている映像や、ビルが傾いている映像は強く記憶に残っている。

(2) その後

今ならインターネットで情報が上がり簡単に募金をすることができるが、当時は周りで募金活動をしているところもなく、ボランティアの情報もどう調べたらよいのか分からず、何もすることができなかった。北海道は阪神・淡路大震災以前からも地震が多く、北海道南西沖地震や釧路沖地震などの烈震もあった。特に釧路沖地震は父がいた帯広市も震度 5 の揺れに襲われ、地震とはまったくの無関係ではなかった。しかし防災対策を家族で話し合うことはなく、徐々に阪神・淡路大震災について考えることはなくなった。

3 話を聞いて考えたこと

母は震度 7 の激震地区に住んでおり、まるで現実ではないかのような惨状を目の当たりにし、絶望を感じたことを今でも鮮明に覚えている。私は、母の避難先の幼稚園に遅くに避難してきた人が追い返されていたという話が特に印象に残っている。授業で避難所運営について考えたことがあったが、定員を超えた避難者への対応は少しも考えていなかった。避難所が定員オーバーになり、入れなくなると、被災者の車中泊も多くなり、エコノミークラス症候群になる危険性も高くなると考えた。

対照的に、父は阪神・淡路大震災の揺れも届かない北海道に住んでいたため、地震発生当時の記憶はうる覚えであった。しかしテレビの映像だけは今でも強く覚えている。

被災者と未災者の違いにより、未災者である父は災害に対する意識が低く、正確な知識も乏しいので、発災しても危険を回避する行動をとることができないと思っていた。また家の防災対策は主に母が行っており、父はあまり干渉していないように見え、もし大災害が発生すれば、スムーズに行動できるのは父よりも母の方だと思っていた。しかし実際に、落雷により自宅を含む地域一帯が停電となったときに、冷静に行動できたのは父の方である。母は自宅の蓄電設備から電気を使えるかなどを調べるために、住宅の説明書を確認したり管理会社に片っ端から電話をかけたりと、とても焦っている様子であった。それに対して父は、最初から自宅の蓄電設備から電気にはできないことを知っていたり、仕事柄もあるが、大型バッテリーで冷蔵庫を冷やしたり、大型の充電式ライトで部屋を照らしたりと、様々な問題に冷静に対処することができていた。この「語り継ぐ」を執筆している途中でのでき事であったため、未災者である父がここまで行動できるとは思っていなかった。しかし違う場面で災害が起きたときに、いつも父が冷静に対処できるとは限らない。母が父よりも行動できる場面もあるのだと思う。

このように被災者と未災者の違いだけで、防災意識や災害時の被害に差があると決めつけるのは間違いであると考えた。

おわりに

被災者と未災者の違いが、意識や防災対策の差を生むとは限らない。結局は災害や防災対策への関心の有無で被害の大きさが変わる。災害や防災に興味がない人は備えを怠り、受ける被害も大きくなる。そこで災害や防災に関心を持つ、防災意識を高めるために一番有効的だと思うのが「語り継ぎ」だ。災害が日常的にあるこの日本では、SNS 等で災害を目にする機会が多くあり、誰しも「今地震が起きたらどうする」や「この建物は大丈夫なのか」などと、防災に関わりのあることをその一瞬だけでも考えたことがあると思う。しかしそこから実際に調べ、行動を起こす人はほとんどいない。そこで「語り継ぐ」が、防災の行動を起こすきっかけになるのではないか。実際の体験談だと、データを見るだけでは感じることでできないような感情を体感し、記憶にも根強く残るだろう。この「語り継ぎ」が災害や防災に興味がない人にとって、災害が特別なことではなく日常の一部であるという意識をもたせるものになってほしい。

若者が語り継ぐ理由

秦野 佑真

はじめに

阪神・淡路大震災から今年で31年をむかえる。阪神・淡路大震災の「30年限界説」を超えて語り継ぐことの必要性を感じた。被災者ではなく未災者である私たちが語り継ぐことで、過去の過ちをこの先生きていく私たちが繰り返さないようにしたいと考えた。

1 母の友人Sさんの体験

Sさんは当時小学5年生で父と母と祖父と祖母の5人で暮らしていた。震災当時は家の2段ベッドの下の段で寝ており、揺れがとて長く感じた。揺れが収まり部屋を見ると本棚は倒れ、ガラスは散らばっていた。また、ドアノブが破損してドアが開けられず部屋に閉じ込められた。なんとか自分で脱出することができ、父母のもとへ向かったが父母の部屋もドアノブが破損していたため隙間から脱出した。祖母の部屋へ行くと祖母は家具の下敷きになっており、家族みんなで家具をのけて救出した。祖父は午前5時から散歩に出ていて屋外で被災した。屋外で地震に遭ったことが原因かわからないが、阪神・淡路大震災以降歩くことができなくなり車いすでの生活になってしまった。

家族全員の無事を確認したが、家が全壊し電気やガス、水道も使えなくなっていた。冬で、日が落ちるのも早く、暗くなると何も見えなくなるのでロウソクなどを使用した。ガスは父が大阪ガスで働いていたため、給湯器をすぐに修理することができた。近所の子供の給湯器も修理してガスは他の地域より早く使えるようになった。水が出ないためトイレを流すことができず、ため込んでいた。給水車が学校に来ていたので水をもらうために並んだ。水をもらいに行った時に覚えているのは、泣いている人が多かったことだ。家は全壊していたが、避難所が満員だったため避難することができず自宅避難することになった。地震が起きて閉じ込められてしまうのではないかとドアを閉めることが怖くなり、トイレのときも入浴のときも少しドアを開けていないと心配だった。

しばらくするとテレビでは神戸が復旧した光景が映っていたが、実際は復旧していない箇所もたくさんあり、テレビ番組に対する不信感が募っていた。今でも地震への備えとしてガラスなどが散乱しても足を怪我しないために、日頃からスリッパをはく習慣や、寝ているときに地震が発生してもすぐに避難できるように、靴を近くに置いて寝る習慣がついた。

2 母の友人Kさんの話

Kさんは震災当時、中学3年生で、一人部屋で寝ていたところ被災した。ピアノとオルガンがドアを塞いでしまい、脱出するのに少し時間がかかった。当時は日本全体が阪神・淡路大震災のような被害を受けたと思い、高校受験が無くなって高校という存在が消えるかもしれないと思うほどだった。被災当日は、近くの集会所で泊まった。集会所は避難してきた地域住民がいっぱいで寝ることができる十分なスペースはなく、知らない人と集団で寝た。高速道路が倒れていたため支援物資が届かず、近くのスーパーなどで食料を一人一つのルールで配っていた。一人一つのルールでも家族分の食料をもらおうとする大人がいた。食料を求め大人の喧嘩が起こったり、店員がいないスーパーやコンビニエンスストア、誰もいない家に空き巣が入ったりするなど治安が悪化し、まるで戦後の光景を見ているようだった。水道は2月11日に復旧したがそれまでは破裂した水道管から水をくみ、トイレなどに使用していた。水があってもトイレトーパーが不足していたから、トイレはなるべく我慢してトイレトーパーの代わりに新聞紙などで代用していた。

3 話を聞いて

2人の話を聞いて、地震から30年たった今でも震災を体験した恐怖は残り続けるのだと思った。地震が発生したら財布などの貴重品をもって避難するよりも、靴を優先するという話はとても驚いたが大規模災害を経験すると、発生したときに何を持って逃げるかの優先順位が変わるのかもしれないと思った。2人とも震災当時は防災バッグを用意していなかった。神戸に自然災害が来たとしても台風くらいで、台風が来ても防災バッグを準備するほど強力ではなく、備える必要がないと考えていたためだ。正しい知識と備えがあれば、被害を小さくしたり、避難生活も送りやすくなったりしたと考えると、私は生まれてから大きな災害に遭ったことがないが、2人の話を聞いて普段から防災バッグを備えて

いても地震が発生したら、防災バッグを持ち出すことができるのか、持ち出しても避難所で活用することができるのかという不安を感じた。

私が参加したボランティアの中で、ふたば学舎で行った語り部ボランティアがある。被災者から直接お話を聞き、そのままの内容を他の方に伝えるというものだ。小学生の頃に人と防災未来センターで、語り部の話を聞いたことがあったが、未災者の自分が語り部活動をするという考えは全くなかった。語り部ボランティアをするにあたって、本当に自分が語り部として語り継ぐことができるのかという不安もあったが、被災者の経験や思いを伝えることの大切さを感じ、何度も練習を重ねて、本番では自分に語り部をしてくれた人の思いを伝えられたように感じて嬉しかった。また、台湾との交流では事前に中国語を書いた資料を準備したりジェスチャーを交えたりしながら、防災について伝えることができた。これらの活動を通して、伝えることの難しさとお大切さを実感した。また、環境防災科では多くのボランティア活動に参加したが、「ボランティアはしてあげるのではなく、させていただく」という言葉を大切にしている。テレビで自然災害の被害を受けた地域をボランティアの人々が助けているのを見て、ボランティアをしてあげていて凄いという気持ちだった。だがこの言葉を聞いて自分の中の価値観が変わった。相手のニーズを知り、そのニーズに沿って活動することが大切であると学んだ。私は将来、県民の人々を危険から守り、人の命を救うことができる警察官になりたいと考えている。警察官になった時にも、正しい知識を伝えること、相手のニーズを知ることが大切にしていきたいと考える。

おわりに

災害は何度も自分たちに襲い掛かってくる。災害を未然に防ぐことはできないが、災害の被害を最小限に抑えることはできると思う。最新技術などを活用して被害を抑えることもできるだろうが、過去の災害から何が災害の被害を拡大してしまったのかを学び、弱点を重点的に対策することで、災害の被害を抑えることができる。災害時に起こった困りごとを語り継ぐことで次の世代に繋いでいき、いつか起こるとされている南海トラフ巨大地震が発生しても、過去の災害から学んだことを活かしていけるように語り部活動を行い、災害の記憶を未来に継承していきたい。被害を最小限に抑えられるよう知識を伝える役割を担うのはこれから生きる私たちだと考える。

備えの意味

春名 嵩悟

はじめに

阪神・淡路大震災から31年が経ち、震災を経験していない世代は年々増加している。私もその一人である。31年前に起きたでき事を忘れること、そして、同じような被害を出すことは絶対にあってはならないことだ。阪神・淡路大震災の記憶を風化させないために、この3年間環境防災科で学んできたことや震災を経験した方からの話をこれからも語り継いでいきたい。

1 阪神・淡路大震災

(1) 叔父の話

叔父は当時、須磨警察署に勤務していた。地震を認知し、勤務地にいち早く向かうため車で移動していたが、通常であれば30分で行ける道のりに3時間かかった。須磨区内は、周りの家屋がほぼ倒壊している状況だった。勤務地に着くと、たくさんの人が至る所に座っていた。そこで、目に付いたのは、柔道着や剣道着を着ている人だった。寒さに耐えきれず、署内にある柔道着や剣道着を着て寒さをしのいでいたことが後から分かった。その状況を見て、逃げてきた人の大変さや必死さが分かった。上司からご遺体が病院内にあるから今すぐ病院に行って、遺体の搬送をしてくれとの指示を受けた。病院に到着したのは、発生日の午後3時頃だったが、病院内は地震の影響で電気がついておらず、真っ暗な状態であった。さらに、院内にはたくさんの人が詰めかけており、廊下やソファ、階段にはたくさんのお毛布が置かれて、足の踏み場がなかった。ご遺体がどこにあるか確認するために医師や看護師を探したが、なかなか見つけることができなかった。院内を歩いているとようやく1人の看護師を見つけたことができた。その看護師に、運ばれてきたご遺体が安置されている場所を尋ねたところ、看護師は一言も話すことなく無造作に廊下に置かれていた毛布を指さした。この時、初めて廊下やソファ、階段に置かれていた毛布は、ご遺体をくるんでいたものだと分かり、地震の怖さを思い知った。叔父は1日かけて遺体の搬送を行った。ご遺体の中には、高齢者や小さな子どももいた。搬送場所は、須磨区内にある大きな体育館であり、空っぽであった体育館がみるみるうちに、ご遺体で埋め尽くされていった。その体育館は、電気が点かず、ろうそくが灯され、ご遺体の枕元で泣き崩れている家族の姿は、今でも目に焼き付いている。また、遺体搬送が終了した時はすでに夜が明けており、飲まず食わずの状態、疲労は限界になっていた。

被災者からの救助要請に対応するために、家屋倒壊現場に向かうことになった。その現場は、すでに2階が1階部分に崩れ落ちている状態で、家族の人と思われる方が「おばあさんがまだ中にいます。助けてください。」と叫びに近い声で叔父に駆け寄って来た。地震発生後も、大きな余震が続いている中、倒壊している家屋に入り救助作業をするのは自分の命が危ないと思った。しかし、家族の方の悲痛な叫びと、何とか生きているのなら助けてあげたい、と思う気持ちから倒壊家屋の中に1人で入ることにした。人が中に入れる場所を探し、何とか奥に入ることができたが、崩れ落ちた壁や木材などで、前へ進むことは困難だった。また、大きな余震があるたびに倒壊した家屋がギシギシと音を上げ、今にも崩れそうな状況だった。その余震があるたびに「もうだめか。生きて戻ることはできないのだろうか。」と思ったが、「おばあさんを助ける。絶対に助ける。」という強い気持ちで何とかおばあさんが使用したと思われるベッドにたどり着いた。しかし、おばあさんに何度も声をかけるも返事がなく、がれきの隙間から白くなったおばあさんの手だけが見えていた。その状況からおばあさんは亡くなっていると判断した。家族の方には「おばあさんは亡くなっていました。生きている方の救助を優先することになります。すみません。亡くなられた方は最後になります。」と報告をしたところ、家族の方は泣き崩れながら「ありがとうございます。」と言った。人を助けることができない無力さを痛感した瞬間だった。また、亡くなっている人をがれきの下から出せないという虚しさを感じた。須磨警察署管内では約300人の方が亡くなり数えきれない人数の方が負傷した。

(2) 叔父の話を聞いて

叔父から阪神・淡路大震災の話聞いたのは、今回が初めてだった。話を聞いて印象に残ったのは、叔父の表情であった。普段の生活からは見られない表情で、31年経った今でも頭に当時の様子が残っていることを聞いて震災の恐ろしさを改めて実感することができた。また、身近な人から話を聞くこと

で、災害はいつ起きてもおかしくないものであり、より身近なものであると感じた。震災は、一瞬にして私たちの日常を奪い、被害をゼロにすることのできないものだとよく分かった。ゼロにはできないが、被害を小さくするためには、日頃の備えが必要であると感じた。備えとは、今当たり前のように過ごしている日常があつてこそできるものであり、後回しにすることは、備えではないと思う。私は、環境防災科で防災を学んでいるからこそ、自分の命は自分で守り、一人でも多くの人の役に立ちたいと思う。しかし、叔父からの話で人を助けることは簡単なことではないと思った。目の前に助けたい命があつても助けることのできなかつた苦しさは、生き残った人にしかないものだと思う。そして、その話をしていた叔父の表情が忘れることができない。また、残された方も辛いという言葉が頭に浮かんできた。そのため、震災が起きても大切な人と生き残れるように日頃の備えがより必要であることを感じた。

2 環境防災科

私は、この3年間でとても貴重な経験をさせていただいた。環境防災科であるからこそ体験することができた授業、外部講師の方からの講義、ボランティア活動、消防学校体験入校などを通して、命の大切さについて知ることができた。災害は、遠い存在のように思っていたが、実際にはいつ起こるかも分からないし、いつ起こってもおかしくない状況である。誰にも予想することができないからこそ日頃からの備えが大切だと気付かされた。災害時での救助活動で大きく割合を占めているのは公助ではなく、自助や共助である。私は、1年生の時に初めて芦屋特別支援学校との交流に参加した。出前授業ではなく、芦屋特別支援学校の生徒と一緒に学ぶ共同学習であった。最初に会ったときは、どう声をかけるのが良いのか分からなかつたが、挨拶をすると、笑顔で明るく返事をしてくれた。そこで、障がい者に対する見方が変わった。共助をすることは、顔見知りであることや日頃からコミュニケーションをとっておく必要があると思う。要介護者の方も一緒に助かるには地域同士の連携も必要になると思うし、要介護者のことをよく知る機会を設ける必要があると思う。そこで、障がい者との交流の機会をさまざまな場所で発展させていくことで障がい者、要介護者へ対する偏見が少しでもなくなるのではないかと思った。さらに地域の防災力を高めていくには、地域の方と日頃からコミュニケーションをとり、災害時に共助を素早く行える体制を作っておかなければならないと思った。その1つとして私は、近隣の方とすれ違った際には、挨拶をすることを始めた。小さなことでも積み重ねていくことで、それが、習慣となり気づかないうちに周りの人の支えになっているかもしれないと考える。また、私は将来、救急救命士になりたいと思っている。きっかけは、私が小学生の頃に目の前で弟が救急車で運ばれたことである。その時は、ただ見ていることしかできず、救急隊の助けを待っていることしかできなかった。救急隊の動きを目の前で見て、将来自分も人を助けることのできる職業に就きたいと思ったのがきっかけである。救急救命士の活動では、治療のみでなく、心のケアも行える人になりたいと思う。災害現場では、身体に傷を負っている人だけでなく、精神的なサポートを必要としている人もいる。私の強みは、不安になっている人に寄り添い、落ち着くまで話を聞くことができることである。強みを活かしていくために、この3年間で学んだこと、経験してきたことをこれからの活動に活かして、将来に繋げていきたい。

おわりに

この「語り継ぐ」の執筆を通して、入学前との変化を感じることができた。入学前までは、災害はあまり身近なものではないと思っていた。環境防災科での授業を通して、普段当たり前のように過ごしているこの日常が災害によって一瞬にして奪われるかもしれないと強く感じた。備えとは、何のために行うか考えたときに私は、生き残ったとしても大切な人やものを多く失っては意味がないと思ったため、失うものを1つでも減らすことだと考えた。また、今後来ると予想されている南海トラフ巨大地震に向き合っていくためにも、今の自分に何ができるかそれぞれ考える必要があると思う。一人ひとりにできることは、限りがあると思うが、災害と向き合っていくために、今の自分にできることは、自分の命を自分で守ることだと考えた。さらに、これから一人でも多くの人を助けていけるように防災を学び続けていきたい。

日々を大切に

藤原 功光

はじめに

日本では今まで数多くの災害が発生した。その度に町が破壊され、怖い思いをした。それでも町の復旧・復興を行い、次に来る災害に備えようとしている。そうできるのは先人たちが語り継いできた教訓があったからだとは私は考える。そんな教訓を未災者である私たちが伝え続けることが大切であると考え、震災を経験していない人に伝え、災害が多く発生する日本で、防災の重要性を知ってほしい。

1 阪神・淡路大震災

(1) 父の話

震災当時の父は西脇市に住んでおり、私と同じ17歳の高校3年生だった。午前5時46分地震が発生した。父は1人で自分の部屋で寝ており、虫の知らせなのか、眠りが少し浅かった。突然背中から「ゴゴゴ」と突き上げる地鳴りが起き、怖くてその場から動くことができなかった。恐怖のあまり「早くこの時間が過ぎてくれ」と願うことしかできず、「人はあのような場合、咄嗟に動くことはできない」と深く感じた。

震災の様子はテレビを見て知った。テレビで見た映像は全て悲惨なものだった。幸いなことに、家族や親戚などに被害はなく、自分の家や通学していた学校への影響も少なかった。また、父は高校卒業後、就職する道を選んでおり、すでに就職先が神戸市兵庫区に決まっていた。そのため会社への影響が心配だったが、大きな被害はなく、無事に就職できたので安心したようだ。父は就職後、同僚や先輩方に、瓦礫の下から救助された話などを聞いた。研修期間の1年間はボランティア活動をした。父は今回の経験を通して、急な災害への対応はできないかも知れないが、備えはできると考え、現在も、防災避難訓練等を通してできる限りの準備をしている。

(2) 母の話

震災当時の母は多可郡多可町に住む高校2年生であり、震災が起きる前日に学校の修学旅行で長野県に行っていた。午前5時46分に地震が発生。長野県では揺れを感じなかったため、地震発生以降も寝ており、午前8時頃に周囲がざわざわとしてきて目を覚ました。目が覚めたばかりで頭も回っておらず、いったい何が起きているのかがよくわからなかった。なぜこんなにも騒がしいのか周囲の友だちに聞くと「兵庫県で震度7の地震が起きた」と伝えられ、急いでホテルのロビーにあるテレビまで行き、どのような状況になっているのか確認した。テレビでの情報はどれもまだ夢を見ているのではないかと疑う程のものだった。兵庫県には母の家族が住んでいることもあり、他人事ではなかったため、ものすごく焦ったようだ。当時は現在ほど携帯電話が普及しておらず、多くの生徒が携帯電話を持っていなかった。そのためホテルに設置してある公衆電話を利用して家族に安否確認を行った。電話はつながり、「色々物は倒れたけど家族みんな怪我とかしてないから大丈夫やで」といつも通りの母の声を聴き無事に安否を確認できたため緊張が和らいだ。今すぐにも家族に会いに行きたかったが、修学旅行の最中であり、帰る日程期間は予定通りだったので「本当にお母さんたち大丈夫やったのかな」などの気がかりが残りつつも修学旅行を過ごした。修学旅行が終わり、バスで帰ろうとしていたが帰りの道は地震の影響で通れなくなっていたため、日本海側の道を使って帰った。家に着くと戸棚から様々な物が落ちていて、家の一部にヒビが入っていた。幸い、ライフラインは使える状態だったため、家族全員家で過ごした。

2 話を聞いて

父は私が信頼し尊敬している人だが、そんな父でも災害時何もできずにただ願うことしかできなかったことから、今まで以上に災害の脅威を知ることができた。当時の父は就職することが決まっていたが、もし就職する会社が大きな被害に遭っていた場合、就職する時期が遅くなったり、就職が取り消しになってしまったりしていたかもしれない。災害が発生することで、この先の人生が大きく変わってしまう恐れがあることを再確認することができた。また父の話から急な災害への対応はできないかも知れない。しかし備えはできる。そのため現在も、防災避難訓練等を通してできる限りの準備をすることが大切だとよくわかった。大切な人を守るためにも私は家族と避難計画などを前もって話し合うなどの備

えをしておきたいと考える。

母は修学旅行で偶然震災を経験しなかったが、もし日にちが少しでもずれていたら、被災していたかもしれない。そう考えると災害はいつ、どこにやってくるのか分からないということを改めて感じさせられた。母は当時ホテルに設置してある公衆電話を使って家族に安否確認をしていたが、もしその電話が繋がっていなければきっと修学旅行中、常に不安でいっぱいだったと思う。そのため災害時でもお互いに安否の確認ができるように家族に災害用伝言ダイヤルの存在を知ってもらうなどの備えを行う必要があると強く感じた。

私は今回初めて両親から詳しく震災の話聞き、家族や親戚、友人など大切な人の存在は必要不可欠だと感じた。これはどちらの話にも共通して言えることであった。大切な人がいることで、災害でどんな辛いことや悲しいことがあっても一緒に乗り越えて、気持ちを前向きに生きていける。そのためこれからは災害について語り継ぐ際、大切な人の存在の大切さをしっかりと語り継いでいきたいと感じた。また自分が誰かにとっての大切な人でもあるので、今を生きている人達全員が自分自身を守る方法についても語り継ぐ必要があると考える。

私は将来 JRA(日本中央競馬会)で働きたいと考えている。JRA は災害に対する備えとして、競馬場には非常用発電機をはじめ、3日分程度の水やクッキー、簡易トイレやブランケットなどの防災備品を常備している。他にも様々な災害対策を行っていることから、大規模災害時に競馬場の馬場が一時避難所や広域避難所として使用される。私たちの身近にある阪神競馬場にもこのような災害対策が行われている。また災害時に必要な水や食料などを準備しているだけでなく、定期的に防災訓練を実施し、従業員の防災意識の向上も行われている。実際に東日本大震災では、福島競馬場が避難所として活用された。

私は今回両親から阪神・淡路大震災の話聞いて備えが大切だと分かった。個人の備えや JRA で行われている備えなどを多くの方に伝える方法として、馬と災害対策を絡めたイベントを企画し、災害に対する備えを広げていきたい。現在の JRA は消防と協力して行う消火器体験や煙避難体験、住宅防火の対策を教えるなどのイベントを開いている。しかしこのようなイベントでは消防による体験しかないので、消防に興味がある人だけが来てくださり、あまり多くの方に防災を知ってもらえないと考える。そのため消防と協力して行うイベントの際、馬との触れ合いや写真撮影、乗馬体験などを一緒に行うことによって、馬に興味がある人にも来てもらえて、今まで以上に多くの方に防災が広まると考える。

おわりに

今回「語り継ぐ」を執筆している中で、大切な人の存在がどれだけ大事なものなのか、また災害に対して備えるということはとても重要であると再確認することができた。今回の語り継ぐを通して、私が今まで知らなかっただけで、身内にも災害を体験し、前を向いて歩いている人がいたことを知ることができた。環境防災科に入学して、多くの人から話を聞いてきたが、父を含め全員がそれぞれの体験談を話してくれて、そこから阪神・淡路大震災の悲惨な現実がはっきりと伝わり、より一層防災について学ぶ必要があると感じた。

私はこの3年間環境防災科で災害の影響や思いを多く語り継いでもらった。話してくれた人の中には災害の記憶がフラッシュバックしてしまうからあまり話したくなかったという人もいるかもしれない。そう考えると語り継ぐには大きな責任が伴うことを知った。本当に自分が語り継いでよいものなのか、嫌な気持ちになってしまう人もいないかなどの不安があった。しかし、私に語り継いでくれた人たちは少なくとも災害による影響を忘れてほしくないという思いがあったはずだ。私はその思いを大切に、多くの方がお話して下さったことをしっかりと責任をもって次の世代へと語り継いでいかなければならないと思った。

はじめに

私は生まれてからまだ一度も、大きな地震や災害を経験したことがない。この執筆をするにあたって、大きな災害の経験がない私たちが語っても説得力がないかもしれない。しかしこれから震災経験のない世代が増えていく今だからこそ、被災者の思いが風化されていくことのないよう「語り継いでいくこと」が今を生きる私たちにできることだと思う。

1 父の話

阪神・淡路大震災の日、父は高校1年生で舞子にあるマンションの1階に住んでいた。早朝だったので、地震で目が覚めた。かなり大きな揺れだった。食器はすべて割れていて、冷蔵庫は2、3cm前に押し出されていた。本震の後、余震が長く続いたのでその間は家で自宅待機をしているしかなかった。朝は部活動があったが、停電していたので部活動も学校も行けなかった。その日を含め学校は2週間ほどなく、家では水も出なかった。そのため、近くの飲食店に水を汲みに行った。その水はトイレなどの生活用水に使用した。そして、一番復旧が遅かったのはガスであった。料理をする時はしばらくの間カセットコンロを使用していた。当時所属していた部活動はとて厳しくて、きつくて嫌だったけど、その地震によって当たり前ができなくなり、いつも通りの生活へのありがたみを感じた。毎日の当たり前に感謝して生きていきたいと語ってくれた。

2 父の話を聞いて

父から阪神・淡路大震災の話を聞いて、改めて災害の恐ろしさを感じた。私はこれまで大きな災害を経験したことがなく、地震の被害についてもニュースや教科書の中のでき事としてしか捉えていなかった。しかし、父が高校生のときに実際に体験した話を聞くことで、そのでき事が一気に現実味を帯びた。水やガスが使えなくなり、生活用水を汲みに行ったり、カセットコンロで料理をおこなったりしていたという話を聞いて、ライフラインの大切さを強く実感した。私は蛇口をひねれば水が出て、スイッチを押せば火が使える生活を当たり前のもので過ごしてきた。しかし、それは決して当たり前ではなく、災害によって簡単に失われてしまうものなのだと気づかされた。父が「当たり前の生活へのありがたみを感じた」と話してくれたことが、特に心に残っている。厳しくて嫌だった部活動や、普段の学校生活さえも、災害を経験したからこそ大切な日常だったと気づいた父の言葉には重みがあった。私はまだそのような経験をしたことがないからこそ、今の生活を当然のものとして過ごしてしまっている部分があると思う。

今回、父の話を聞いて、災害はいつ誰の身にも起こるかわからないものだと改めて感じた。だからこそ、日々の生活に感謝する気持ちを忘れず、もしものときに備えて防災について考えていくことが大切だと思った。

3 私の夢

私は臨床心理士になるという夢がある。それは、毎年1.17や3.11の日になるとテレビやSNSを通して被災者が経験した悲しみや恐怖体験が語っている姿とともに当時の映像を見たのがきっかけだ。そこには避難所での過酷な状況の中、被災者に寄り添って話を聞いている人たちがいた。その人たちはボランティアとして避難所などで支援活動をするために、全国から駆け付けた心理学関係の方達だった。そして避難者の方々は話を聞いてもらって「ありがたかった」「気持ちが軽くなった」と前向きな気持ちを取り戻しているのを見て、被災者の心のケアをすることは重要なことなのだと知った。それと同時に自分も困っている人の役に立てるような職に就きたい強く感じ、臨床心理士という仕事に強いあこがれを抱いた。この職業の業務の1つとして臨床心理的地域援助というものがあり、災害などの被災者に対する心のケアについて学ぶことがとても重要であることを知った。自然環境や環境防災についての知識を身に付けることで、相手の立場やその時の状況を知ってより被災者の心に寄り添って話ができるし、災害への備えについてアドバイスすることもできると考えた。令和6年能登半島地震の被災地募金を行った際には思った以上にたくさんの方が募金に協力してくださった。自分たちの活動に協力してくださったことに嬉しさを感じたが、それ以上に「ありがとう」「お願いします」といった復興を願う声や地域の人の願いが

伝わってきたことがとても嬉しかった。募金活動を通して人の温かさ感じ、少しでも被災者の方やボランティア団体に協力していきたいと思ったし、これからも募金活動を続けていきたいと思った。

おわりに

「語り継ぐ」の執筆をしながら、改めて減災や防災についての意識を高めていくことの重要性について考えた。インタビューを終えたとき、父から聞いた当時のリアルな話で、災害はとても身近なことであると再認識した。そして今、私たちが普段普通に生活できていることや、当たり前のことがいつ途切れるかわからないことも改めて感じた。だからこそ被災された地域にはボランティアや支援という形で当たり前という幸せを届けていきたい。そして被災者の思いが風化されないよう、語り継ぎの輪をひろげていきたい。

復旧・復興

益田 滯

はじめに

阪神・淡路大震災から31年になり、過去の災害を体験していない人が多くなってきている。経験していない人でも過去の災害を知る必要がある。減災に繋げるには、語り継ぐことが大切だ。私が3年間学んだことを、自ら語り継いでいこうと思う。

1 父の話

父は、当時兵庫県姫路市に住んでいた。高等専門学校の5回生だった。学校に行くために起きたとたん地震が起きた。ゴーと音がした瞬間に家が揺れた。幸いにも、本棚から本が落ちただけで建物に大きな被害はなく、家族にも被害はなかった。学校があるかないかわからないので7時過ぎに家から姫路駅まで歩いていった。駅に着くと地震の影響で電車が止まっているのを知った。電車が止まっていたので学校に行くのは断念した。加古川の友達に電話で安否確認をした。友達は生きていた。神戸に住んでいる友達とは電話が繋がらず安否確認ができなかった。家に帰りテレビを見ると神戸市長田区が燃えている映像を見た。見たとき神戸は終わったと思った。神戸の学校も被害があると思った。姫路は被害が少なくいつも通りの生活を過ごしていたが、神戸の被害は時間がたつにつれて甚大であることが分かった。

2月まで学校がなかったので引っ越しのアルバイトをしていた。その中で被災した人の引っ越しが何回かあった。その1つは三木市への引っ越しだった。被災地から三木市へ向かうと隣の市なのに被害は少なく、地域によってこんなに被害が違うのかと複雑な気持ちになった。4月に兵庫区の建設会社に就職し、2週間の研修が終わるとすぐに現場監督になり、災害復旧工事に携わった。阪神高速道路を見たときは絶望した。兵庫突堤の災害復旧工事現場は瓦礫の山で、きれいな神戸のイメージとは真逆の景色だった。余震も続いており不安の中での現場環境だったが、「もう二度とこんな被害を出さないように」との思いで、仕事仲間と協力しながら任務を果たした。地震によって生じた地盤の変化や、構造物の弱点を的確に見極め、より安全な橋を再び築き上げるため昼夜を問わず働いた。3年で災害復旧工事という名前の工事は終わった。そこからは高速道路の橋を数々作ってきた。あれから31年経ち、現在は過去に行った工事の耐震化をしているが、災害での地割れ傷が目立ち、過去のでき事を思い出す。しかし、自分が作った橋を自分が直すことは、父の仕事で誇りだと語ってくれた。

2 父の話を聞いて

父の話を聞いて父が災害復旧工事に携わっていたことを知った。父は朝早くから夜遅くまで現場で働き、疲れた顔で帰ってきていたそうだ。そんな父を誇りに思う。地震によって大勢の命が奪われ、インフラが崩れ、都市の機能が止まった。そんな中で、父は人々の暮らしを取り戻すために、自ら危険な現場に立ち続けた。その姿勢からは、単なる仕事を超えて「人のために働く」という責任と覚悟が伝わってきた。私は将来、どんな道に進むにしても、父のように誰かのために力を尽くせる人間になりたいと思う。震災の教訓を忘れず、備えることの大切さ、人を支えることの重みを胸に刻みながら、これからの人生を歩んでいきたい。父が命がけで支えたその橋の上を、今、安心して多くの人々が通っていることに、尊敬を感じる。また、父は単に壊れた橋を直すのではなく、「次に同じようなことが起きた時、命を守れる構造にしたい」という強い思いを持って取り組んでいた。その使命感を私は真似したいと思う。また、大きな災害の復旧工事では、多くの人たちと連携しながら進める必要がある。父は現場でリーダー的存在として、仲間を励まし、協力して困難な仕事をやり遂げた。人をまとめ、導く力があるところも尊敬している。

3 将来の夢

私は、将来海上保安官の潜水士になりたいと思い、環境防災科に入学した。父が道路を守り人の命を守ろうとしたように、私は海を守り、海難事故や海でのトラブル、自然災害から人の命を守りたいと考えている。環境防災科では、地震や津波などの自然災害について学ぶ機会が多くあった。授業や実習を通して、災害時にどのように人々を守るか、地域の安全を保つには何が大切かを深く考えるようになった。

た。その中で、災害派遣や国防などを行っている海上自衛隊の活動を知り、国のため、人々のために行動する姿に強く魅力を感じた。次第に、私の将来の夢は「海上保安庁の潜水士」から「海上自衛隊の潜水士」として働くことに変わっていった。私は高校1年生の時から毎年、芦屋特別支援学校との交流及び共同学習に参加している。芦屋特別支援学校では阪神・淡路大震災や南海トラフ巨大地震のことを共に勉強した。障がいがある同い年の人と勉強するのは初めてだった。芦屋特別支援学校は海が目の前にあるので津波の怖さを一番伝えたかったが、なかなか上手に伝えることができなかった。さらに、私たちが考え付かないような困難があることを知り、みんなが安全に避難することの難しさを知った。この経験を通して、災害時だけでなく困っている人を助ける仕事に就きたいとより強く思うようになった。将来は、海上自衛官として人々の命を守るだけでなく、自分が学んだ防災の知識や津波の怖さ、そして助け合う心を多くの人に伝えられるような人になりたい。私の夢は、海と人の安全を守り、誰もが安心して暮らせる社会をつくることだ。

おわりに

父から話を聞いて、自分たちが生まれる前の人々が災害復旧工事などをして住みやすい神戸を作ってくれたことがよく分かった。過去に起きた災害は忘れずに語り継いで行く必要があることを知った。環境防災科に入り防災やボランティア活動を行ったことはとても良い経験だ。学んだことを次の世代に語り継いで行きたいと思う。これから起きると言われる南海トラフ巨大地震ではいかに減災できるかが課題だと思う。私が海上自衛隊の潜水士になったら、環境防災科で学んだことを生かしていきたい。海での人命救助に携わり、誰一人命を落とさせないのが目標だ。日本の海を愛し、守り、津波の犠牲者をゼロにすること目標である。また、父が阪神・淡路大震災の復旧工事に携わり、多くの人々の命と暮らしを支えたことを知り、多くの誇りと尊敬の気持ちを抱いた。私も誰かのために働ける人になりたい。

あの日を忘れないように

松浦 博央

はじめに

阪神・淡路大震災から31年の歳月が流れた。あの日のでき事、そしてそこから得られた教訓は、決して風化させていけないと思う。震災を経験した人々は、失われた命や街の記憶と向き合いながら、防災の大切さを後世に伝えるべく、その体験を語り継いできた。そして今、その語り継ぐという営みは、私たちの世代へと受け継がれてきた。防災の意識を次の世代へ伝えていくことは、私たちの責任であり、未来を守るための大切な一歩だ。震災の記憶を風化させず、そこから学び、備え、行動する。その姿勢を言葉にし、形にして伝えていくことこそ、過去を無駄にしないことにつながる。その思いを胸に、私は今、防災の重要性について執筆する。

阪神・淡路大震災

(1) 母の体験談

当時、母は中学生で神戸市西区に住んでいた。母は叔父2人と祖父・祖母の5人で一軒家に暮らしていた。突然、激しく上下にたたきつけられるような揺れが起こり、母は急いで布団の中にもぐり込み、怯えながら揺れが収まるのを待つしかなかった。体感では10分ほど揺れていたと思っていたが、実際は数十秒であったことを後から知り、驚いたという。揺れが収まった後、祖父が部屋にやって来て家族の安否を確認した。祖父はその日、たまたま仕事のために早く起きていたため、布団の上に倒れてきた本棚の下敷きにならずすんだというのは、まさに奇跡であった。家は皿が割れたり本棚が倒れたりした程度の被害しかなく、大きな損壊はなかった。周囲の人々も被害は少なかったため、「少し大きめの地震」程度だと思っていた。しかし、昼頃にテレビをつけると、長田区の大規模な火災の映像ばかりが映し出され、母は恐怖で頭がいっぱいになると同時に、地震の被害の大きさをそこで初めて実感したという。少し落ち着いたころ、当時大阪に住んでいたいとこが安否確認を兼ねて食料や生活用品を持って来てくれた。阪神・淡路大震災が起きるまでは、地震をどこか他人事のように考えていて、家族で防災バッグを準備することはなかった。しかし、実際に地震で被害を受け、食べ物や飲料水に困った経験をしたことで、母は「次に同じような災害が起きても困らないように、防災バッグを必ず用意しておかなければならない」と強く感じるようになったという。また、防災バッグだけでなく、災害が起きた際に家族が集合する場所についても改めて考え直した。阪神・淡路大震災は朝方で、家族全員が家にいたためすぐに安否確認ができたが、家族は別々にいたときに災害が発生した場合を考え、集合場所を決めておく必要があると語ってくれた。

(2) 従兄弟の体験談

従兄弟は神戸市長田区のマンションに住んでいた。突然、地面の下から突き上げられるような衝撃が走り、その直後に激しい横揺れが襲ってきた。目が覚めたというより、「叩き起こされた」という感覚であった。部屋の家具は次々と倒れ、食器棚からは食器やガラスが飛び散り、従兄弟は何が起きているのかわからないまま、布団の中で身を縮めて揺れが収まるのを待つしかなかった。ようやく揺れが収まった後、明かりをつけようとスイッチに手を伸ばしたが、停電していたため部屋は真っ暗だった。外に出ると、空はまだ夜のように暗く、遠くで火の手が上がっているのが見えた。ガスも水も止まり、ライフラインはすべて途絶えていた。特にショックだったのは、長年通っていた商店街が丸ごと焼け落ちてしまったことだ。前日まで当たり前存在していた「日常」が、一晩で瓦礫と灰に変わってしまい、従兄弟は大きな悲しみを感じたという。避難所に向かうと、近所の人々が毛布にくるまりながら寒さに震えていた。誰もが放心状態で、言葉を発する人はほとんどいなかった。幸い、従兄弟の家族は全員無事だった。しかし、友人の家は全壊し、身内を亡くした人もいた。「あたりまえの生活」がどれほどありがたいものなのか、従兄弟はこのとき初めて深く実感したという。復興には何年もの年月が必要だったが、人と人とのつながりの力、そして支え合うことの大切さを身をもって学んだ体験であったと語ってくれた。

(3) 感じたこと

阪神・淡路大震災の体験談を母と従兄弟から聞き、私は「災害が人の生活をどれほど一瞬で奪ってし

まうのか」を改めて強く感じた。母は神戸市西区で朝方の激しい揺れに襲われ、何が起きているのかわからないまま布団の中で恐怖に耐えていたという。揺れが続いている間の数十秒が、10分にも感じたと話していた。その後、家の被害こそ大きくはなかったものの、テレビで映し出される長田区の大火災を見て初めて震災の深刻さを理解したと聞き、私自身も胸が締め付けられた。従兄弟の話はさらに衝撃的だった。長田区のマンションで、突き上げる揺れと横揺れに襲われ、停電や断水によって完全に日常が奪われた状態の中、火の手が上がる街をただ見つめることしかできなかったという。いつも利用していた商店街が一晩で灰になり、友人の家が倒壊し、命を失った人もいたと聞き、「あたりまえの生活」がどれほど尊いかを強く感じた。

私がこの体験談を聞いて特に考えさせられたのは、人は災害が起きて初めて、自分がどれほど多くのものに支えられて生きているかを実感するということだ。母も従兄弟も、震災後に地域の人たちと助け合ったり、遠くに住む親戚が駆けつけてくれたりしたことで、不安な状況の中でも救われたと言っていた。私はこの「人を支える力」を持った存在に強く憧れるようになった。そして、その思いはやがて「警察官になりたい」という目標へとつながっていった。

環境防災科の授業の中で、警察官や消防士、自衛隊などの公務員の方々のお話も聞かせていただいた。阪神・淡路大震災での救助活動の様子は、一般に語られるものよりもはるかに生々しく、恐ろしさが強く伝わってきた。実際に現場を経験した人たちの話には重みがあり、その覚悟もひしひしと感じられた。消防士も警察官も、災害現場ではほとんど眠れず、常に強い緊張感の中で活動していたと語っていた。また、阪神・淡路大震災では、助かった人の多くが公助よりも共助によって救われたという事実を知った。さらに、「地域の人々が日頃からコミュニケーションをとり、お互いの状況を理解していたことが、死者を少なくすることにつながった」という話も心に強く残っている。この話を聞き、私自身も地域の人々との関わりを日頃から大切にしなければならないと改めて感じた。警察官は犯罪から人を守るだけでなく、災害時にも避難誘導や救助活動など、住民の安心と命を守る大切な役割を担っている。実際、震災の映像や記録を見ると、警察官が懸命に瓦礫の中を進み、人々を助け出す姿が映っている。あの日、母や従兄弟のように不安でいっぱいだった人々を支えていたのも、地域のつながりとともに、そうした公助に携わる人々の存在だったのだと思う。私も将来、誰かが困っているときに真っ先に行動できる人になりたい。日常が突然消えてしまうような大きな災害が起きたとしても、人の力になり、地域の安全を守れる存在でありたい。阪神・淡路大震災は、私が直接経験したでき事ではない。しかし、身近な家族が語る「恐怖」「喪失感」「助け合い」を聞くことで、私の中に「誰かの安心を支える仕事がしたい」という強い思いが生まれた。この気持ちを忘れず、警察官になるための努力を続け、いつか人の命と暮らしを守れる存在になりたいと考えている。

おわりに

私が「語り継ぐ」を書く前から、母から阪神・淡路大震災でどのような経験をしたのか、断片的ではあるが聞いたことがあった。しかし、今回あらためて詳しく話を聞いたことで、あの地震がいかに恐ろしいものであったのかを、以前とは比べものにならないほど強く実感することができた。その瞬間、震災の記憶を決して風化させてはならないという思いが、私の中でこれまで以上に深く刻まれた。南海トラフ巨大地震の発生が危惧されている今、想定をはるかに超える被害が生じる可能性は十分にある。私たちが当たり前のように過ごしている日常は、ある日突然失われるかもしれない。その現実を受け止めた上で、私は大切な人々との笑い合える時間を守るためにも、防災の重要性をこれからも伝えていきたいと強く思っている。環境防災科で学んできたことを将来にも活かし、多くの人々の思いを未来へとつなげていきたい。現代を生きる私たちが、過去から未来へと「語り継ぐ」ことこそ、与えられた使命であると考えている。その第一歩として、この「語り継ぐ」という作品を作成し、多くの人々の思いを確かな形で伝えていきたい。

生存者になるために

松下 承太郎

はじめに

今年で、阪神・淡路大震災から 31 年の年を迎えたが、どれだけの時間が経っても、被災者、亡くなった方々、またその亡くなった方々の遺族の思いが薄れたり、消えたりすることは決してない。これは阪神・淡路大震災だけでなく、東日本大震災やその他のさまざまな災害でも、同様である。その思いをこれから起きるとされている南海トラフ巨大地震でも、絶対に繰り返さないため、大切な人やものを失ってしまわないように、私は「語り継ぐ」を執筆する。

1 環境防災科に入学しようと思った理由

大規模な災害を経験していない私にとって、当時から近いうちに起きるかもしれないと言われていた南海トラフ巨大地震は、大きな脅威であった。もしそれが起きた時に自分は何もできずに家族の助けを待つだけなのは、絶対に嫌だと考えた私は、環境防災科で生存者になるための知識、生存者を増やすための知識を身に着けたいと思い、環境防災科への入学を決めた。

2 環境防災科での経験で印象に残っていること

環境防災科で参加したボランティア活動で印象に残っているのは、小東山小学校での出前授業である。入学するまで、災害、防災のことについてほとんど知らず、教えてもらう立場だった私が、小学生に災害、防災のことを伝えることができたのはとても大きな経験であった。準備では、私たちと同じように、小学生も阪神・淡路大震災はもちろん他の大きな災害を経験していないので、私たちが今まで授業や講義で学習したものをそのまま伝えるのは難しいところがあった。小学生にどんな授業をすれば楽しみながら学習してもらえるかということ考えた。結果的に小学生に興味を持ってもらいながら、楽しく授業を進めることができ、多くの小学生に伝えることができた。

また、募金活動では毎回多くの街の方々からお気持ちをいただいた。令和 6 年能登半島地震発生後の募金活動では、計り知れないほど多くのお気持ちをいただくことができ、被災地に行って活動することだけでなく遠くからでもサポートできることを実感し、継続して参加することの大切さがわかった。

3 阪神・淡路大震災時の母の体験談

当時、母は名谷に住んでいて、祖父母と母と叔父との 4 人で暮らしていた。いつも通りの生活をしていて、いつも通り 23 時頃に寝た。地震発生時、まだ寝ていたが、突然下から突き上げるような大きな揺れが、家と家族を襲った。母の部屋には落ちてくるようなものは置いてなく、被害はなかったが、リビングやキッチンではテレビが倒れていたり、食器棚の扉が開いて食器が落ちていて割れたりしていた。また、ベランダに置いていた花瓶も倒れて土が散乱していた。祖父母は母と叔父の安全を確認した後、ガスが漏れていないか確認した。そのあと、家の外に出ると近隣の住民がちらほらと出てきていて、周りの住民と話している様子だった。家の周りには、自転車が倒れるなどはしていたが、火事や家屋の崩壊は無く、大きな被害が出ている様子ではなかった。しかしそのあとテレビで長田区の家屋がほとんど崩れていて、大きな火災まで発生しているというニュースを見て、まさか近く地域が大きな被害に遭っているとは思ってもおらず、映像を見て驚いた。幸いなことに、家族はけがなく無事に生き残ることができた。その日は学校だったが、母の家はその学校からとても近かったため、問題なくいつも通り登校することができた。

4 感想

この話を聞いて、印象に残ったところは、いつも通りの時間に寝て、いつも通りの朝を迎えるはずが、そうならなかったというところである。普通に暮らして早朝に大きな揺れに襲われ、もしかしたらそこで命を落としていたかもしれない考えると、災害の怖さが本当に伝わってきた。

また、どれだけ対策していても早朝に襲った揺れに冷静に対応するのは本当に難しいと感じた。だが備えをしていればしているほど後々心の余裕ができるというのは間違いないことだと思し、防災

に100点満点はないと思うので、もし母が長田に住んでいたら生き残ることができたかは、わからない。そのためにも日ごろから備えをしておくのはかなり重要なことだと感じた。

また、防災は個人だけの問題ではない。家族や友人、そして近隣の方々とともに、「全員が生存者となる社会」を目指すことが何よりも大切だと考えている。また、私の一番の思いは、自分を含め家族や親せき、大切な友人が誰一人として死んでほしくないし、生存者になってほしいことだ。そのためには、日常から災害に向き合い、自然との共存を意識した暮らし方を心がけ、地域の中で防災意識を共有していく姿勢が大切だと、改めて感じた。

私は将来、理学療法士になりたいと思っている。小学生のころからスポーツをしていて、体が小さかったこともあり、体への負担が大きく、怪我をすることが多々あった。そのたびに病院に行って、理学療法士の施術を受けていた。そこで将来の夢や職業を考えた時にこの経験と、災害時には人の役に立ったり、助けたりしたいという思いがあり、理学療法士に興味を持った。理学療法士は、怪我や病気、加齢などで身体機能に障害のある人に対して、理学療法を用いて日常生活の立つ、座る、歩くなどの基本動作の回復や維持、悪化予防をサポートする。また、災害時は、現地に行って、避難所で生活している方の体のケアをすること、家と全く違う環境で生活することの不便さや、負担によってたまっているストレスの緩和もするような活動をしている。私は理学療法士として患者や被災者の体を治すことだけでなく、施術しながら被災者の抱えている思いを受け止め、共感することで被災者の心を少しでも楽にできるようになりたいと思っている。

おわりに

私は環境防災科での3年間を通して、自然災害の脅威や、それに立ち向かうための知識・技術、そして人とのつながりの重要性を学んできた。特に南海トラフ巨大地震のような未曾有の災害が今後起こる可能性が高まっている中で、ただ知識を持つだけでなく、「自分に何ができるのか」「どう行動すべきか」を日々考えるようになった。

卒業後も、防災についてさらに深く学びたいという思いは変わらない。大学では、防災・減災を専門的に学べる環境に身を置き、現場で活躍する人々や研究者から様々な知識やスキルを吸収しながら、知識や技術をさらに高めていきたい。そして将来、そこで得たものを活かして、人々の命や暮らしを守る仕事に携わっていくつもりだ。防災とは一度学んで終わるものではない。社会の変化、気候の変化に対応しながら、常に更新されていくものである。そこにうまく付き合いながら対応していかなければならない。大きな災害を体験していない私たちにとって、できることは限られているかもしれないが、これからの社会を生き抜いていく人間として防災面でも人間としても成長していきたいと考えている。

言葉を繋ぐ

森本 みなみ

はじめに

私たちは阪神・淡路大震災を実際に経験していない。経験していない人でも過去の震災について知り、備えることはできる。だからこそ阪神・淡路大震災を経験した方からお話を聞き、災害の恐ろしさや、防災の大切さを私たちから多くの人に伝えたい。震災をなかったものにしたくないという思いで「語り継ぐ」を執筆する。

1 母の被災体験

阪神・淡路大震災当時、母は高校3年生で神戸市西区の一軒家に家族7人で住んでいた。地震が起きた時、母は2階にある寝室の2段ベッドの下で寝ていた。下から「ドンッ」と突き上げるような衝撃があった後、体が布団の中で「ゴロンゴロン」となるくらい横揺れが激しかった。家がミシミシという音を立てているのが聞こえ、何が起きたのか分からないが、とにかく長く揺れていた。家が壊れてしまうと思ったが、それ以外は何も考えられなかった。揺れが止まったことに安心したが、これが何だったのか、どうなっているのかというのを受け止めるのが怖かった。数分後、祖母の「助けて」という声が聞こえてきたため、慌てて隣の部屋の祖母の寝室に行ってみると座っていた祖母の背中の上にタンスが乗っている状態だった。母は急いでそのタンスを持ち上げ、祖母は脱出することができた。その時、火事場の馬鹿力は本当なのだと感じた。祖父以外は2階で寝ていたが、祖父は朝早くから仕事があったため、5時には起きており、朝食を食べようとしていた。その時に地震が起きたので、祖父は1つの食器棚を必死に押さえていた。食器棚は補強しておらず、開閉式の扉だったため、揺れによって開いてしまい、祖父が押さえた棚以外は食器がすべて出てしまった。

揺れが収まり、部屋の中は危ないと全員でガレージに停まっている車の中に避難した。1月の早朝だったため、辺りは真っ暗で、地震の影響で電気も止まっており、ほとんど何も見えなかった。テレビはつけられないので車のラジオで関西の方で地震があったと知ることができた。日が明けて家のリビングで一番大きい窓ガラスが割れて家の中に散らばっている状態を目の当たりにした。真冬だが窓がなく吹き抜けの状態でも過ごしていた。家は瓦屋根の一軒家だったため横揺れに弱く、周りの家よりも被害が大きく半壊の状態だった。

数日後には明石に住んでいた親戚がカレーなどのあたたかい食べ物を持ってきてくれた。水が出ないためお風呂に近くの川で汲んできた水を浴槽に溜めてその水でトイレを流していた。お風呂は家の近くに公衆浴場があり、何日か置きに家族で入りに行くことができた。神戸がどのような状態でどのくらい被害が出ているのかしばらく分からなかった。数日後、学校に行き校庭に集まった際に、長田の方に住んでいる子は家が焼けて制服も燃えてしまい、パジャマで登校している人もおり、長田での被害の大きさを感じた。

今でも地震が起きると、阪神・淡路大震災の時のとにかく揺れが長く、時間が経つにつれて強くなる揺れを思い出し、少しの地震でも今から酷くなるのではないかと一気にあの時の記憶が蘇る。多くの人助けがあり、避難所に行かずに過ごすことができたため、人とのつながり、ありがたさを感じ協力して暮らしていきたいと思ったそうだ。

2 話を聞いて

身近な人に震災当時の話を聞くのは初めてで、聞いているだけでも地震の怖さが伝わり、どのように言葉にして反応したら良いかが分からなかった。話を聞きながら、今まで感じたことのない揺れだったのにその時どうして冷静に動けたのだろうと何度も考えた。もし自分が同じ状況だったらパニックになって動けなかったのではないかなと思う。特に印象に残ったのは地震発生直後に祖母の部屋に駆けつけ、タンスの下敷きになっていた祖母を助けたという話だ。「火事場の馬鹿力」という言葉を聞いたことはあったが、母が実際にそれを体験し、祖母を救うことができたという話は強く印象に残った。また、家が大きく揺れ、瓦屋根のせいで家が半壊状態になってしまったことや、ガラスが割れて危険な状態になってしまったことなど、想像するだけでも恐ろしかった。当時は冬の早朝で停電の影響で周辺は真っ暗で何も見えず、不安や恐怖はとても大きかったのではないかなと思う。数日後に親戚が温かいカレーを届けてくれたことにも助け合うことの大切さや人のあたたかさを感じた。また、学校に登校した時、長田の方に住んでい

た友達がパジャマ姿で来ていたという話も印象的だった。家や制服が焼けてしまったのにもかかわらず学校に来ていたのは、「友達に会いたい」「普段の生活を取り戻したい」という強い思いがあったからだと思う。その人の姿には強さと前向きな気持ちを感じた。

話を聞いて、命を守るために私たちが今できることは何かを考えさせられた。例えば、タンスや食器棚をしっかり固定したり、扉をスライド式にしたりするなど、家の中の備えをすることはとても大切だと改めて感じた。震災を経験していない私たちには、被災した人の恐怖や不安を完全に理解することは難しいかもしれない。だからと言って無関心でいてはいけないと思う。話を聞いて想像し、少しでもその時の気持ちに寄り添おうとすることが大切だと思った。実際に震災を経験した人の話を直接聞く機会は多くない。聞いた話を私だけで終わらせるのではなく、周りの人にも伝えていくことが私にできる役割なのではないかと感じた。阪神・淡路大震災についてもっと深く知り、同じような災害が起きた時にどう行動すれば良いのか考える必要があると思った。また、母の話から、人とのつながりの大切さを改めて感じた。避難所に行かずに過ごすことができたのも親戚や地域の人々の支えがあったからだと思う。私も多くの人の協力があるからこそ不自由なく毎日を過ごすことができているということに感謝しなければならないと強く思った。これからはもっと人との関係を大切にして、いざという時にお互いに助け合える関係性を築いていきたいと思う。日頃から「ありがとう」と感謝を伝え、防災の知識を持ち、家族や友人と共有しようと思う。

おわりに

私は母から体験談を聞いて文章にまとめる中で、人の体験談や自分自身の思いや感じたことを自分の言葉にして伝えることの難しさを知った。環境防災科に入り、様々な過去の災害について学んできたが実際の被災体験には教科書などでは知ることのできない声が詰まっていると感じた。実際の地震の恐ろしさは私たちの想像をはるかに超えるものだと思う。私たちは聞いた話を受け止め、自分に落とし込んで私たちの言葉で伝える責任があると思う。

また私は出前授業で小学生に防災について授業をするというボランティアの活動を通して「伝える」ということの難しさを実感した。知識を持っていてもそれが伝わらなければ意味がないため、楽しく、分かりやすく伝える工夫、相手の立場に立って考えること、年齢に合わせた伝え方、言葉を選ぶことなどの大切さを学んだ。震災を知らない世代に「防災」や「命を守る大切さ」を伝えることは大切な役割だと感じた。

私は看護師としてこれから先も防災に関わり、災害時には強い不安を抱えている方々の心にも寄り添える存在でありたいと思う。環境防災科の3年間、出前授業などのボランティア活動での学び、培った「知識」や「伝える力」、「相手の立場に立って相手を思いやる視点」を活かし、被災した方々の災害の記憶や命の尊さ、同じ思いをしてほしくないなどの様々な想いの言葉を繋いでいきたい。

過去を活かす

柳瀬 晁大

はじめに

阪神・淡路大震災を経験していない私だからこそ、語り継ぐことの大切さを強く感じている。あの日、多くの人が突然日常を奪われ、助けを求め、恐怖や不安の中で必死に生きようとしていた。その1つ1つの体験には、その後の人生を形づくるほどの重みがある。それらをただ「過去のでき事」として片付けてしまうのではなく、今を生きる私たちが受け取り、未来に繋げていかなければならないと思う。

1 父の被災体験談

父は当時中学生だった。地震が発生する直前、父は周囲がいつもより静かな気がして違和感を覚えた。当時神戸市西区の川が近くにある自然が豊かなところに住んでいた。周囲に住んでいる人は少ないが、近所付き合いは多く、ほとんどが顔見知りだった。周辺に住むほとんどの人が高齢者だった。足の悪いおばあちゃんや、目があまり見えないおばあちゃんも近くに住んでいた。そんな中で悲惨な地震が起こった。地震が発生すると、身動きが取れなくて言うこともままならない状態だった。そんな中でも幸いケガは無かったが、皿は割れ、それは悲惨な状態だった。揺れが収まった時、父は真っ先に近所に住む1人暮らしの近所のおばあちゃんのもとへ向かい安否確認を行った。おばあちゃんにはケガは無かったそうだが父は私に「もし何かあって誰も助ける人がおらんかったらメッチャ怖いな」と父は言った。

2 母の被災体験

母は明石市二見に住んでおり、海に面した細い道が入り組んだところだった。あまり広くはない家だったが祖父母と母と叔父の4人で暮らしていた。あの日もいつもと変わらない朝で、目を覚まして朝ご飯を食べていた。突然、家全体が大きく揺れだし、食器棚が音を立てて揺れ、次の瞬間には皿がいくつも床に落ちて割れた。震源地からは少し離れていたため、父がいた神戸市西区ほどの大きな被害は無かった。それでも家の壁にはひびが入り見慣れたはずの風景が一変した。地鳴りのような音とともに続く余震、家具がきしむ音、食器が割れる音、それらが現実とは思えず、何が起きているか全くわからず、ただただ動揺していた。

母は普段、あまり慌てるタイプではないと思っていた。どんな時も冷静でいようと心がけていたが、その日は違った。頭が真っ白になり家族の顔を見るまで自分が何をしているのかすら分からない状態だった。叔父や祖父母も動揺していたが、声を掛け合いながら無事を確認し、とにかく外に出ることにした。避難所には行かなかった。というより、どこに行けばいいのかも分からず、自宅で様子を見ることしかできなかった。周囲の家も同じような状況で、人々が外に出て、お互いに声を掛け合っていたのを知っている。どこか不安そうな顔をしていてそれが余計に母の心に重くのしかかった。停電や断水はなかったものの、今後どうなるか、もしまた大きな揺れが来たらどうするのかという不安が常につきまとった。テレビをつけても、ラジオを聞いても、聞こえてくるのは被害の大きさや亡くなった方の情報ばかりで、安心できる材料は何処にも無かった。「安全だと思っていた場所が、一瞬で壊れてしまうんだ」という恐怖が芽生えた。そして、その中で「自分はどうやって家族を守るのか」「何をすべきだったのか」と、考えても答えの出ないことばかりが頭をよぎった。今振り返ると、あの時避難所に行かなかったことも、誰かに頼れなかったことも少し後悔として残っている。しかし、あの混乱の中で精一杯だったのも事実だった。何が正解なんて分からなかった。ただ、家族が無事だったことが唯一の救いだった。あの震災から学んだことは、「日常は当たり前ではない」ということだ。そして、どんなに強いと思うとも、災害の前では誰もが無力だという現実を突きつけられた。それでも、家族と声を掛け合って過ごしたあの日々が、母にとっては忘れられない大切な記憶になっている。

3 話を聞いて

公助が機能しなくなってしまうたら近所の人と助け合う共助、自分の命は自分で守る自助が生き残るために必要不可欠だと学んだ。ただ公助を待つのではなく、自分の命は自分で守る、人と助け合うことをしなければいけないと思った。防災の授業を学んでいくうちに、自助の重要性をとっても感じたため、有事のことを想定して、私たち家族は、いつ津波や河川の氾濫が来てもいいようにハザードマップを見て避難

する場所を決めている。公助の力は必要だが、どれだけ準備や訓練を行っていても、さらにその上の被害が及ぶ災害が起こる。私は、昔から消防士になりたいという夢がある。もし、私が消防士になった時は、予想以上の災害を想像して、日々訓練と準備を怠らず続けていきたいと思った。

おわりに

震災の記憶が薄れていく中で、「もう昔のことだから」と無関心になるのではなく、自分自身が学び、行動し、周りの人に伝えていくことが必要だと感じている。だからこそ、私はこれからも防災への意識を高く持ち、家族や地域の人たちと声を掛け合い、助け合う関係を築いていきたいと思う。

震災は決して「過去」で終わるものではない。そこから学ぶことで今も、そしてこれからも変わらずに存在し続ける。私は、父や母が経験した恐怖や不安、そして人と支え合う強さを忘れず、その思いを次の世代にも伝えていくことで、震災の記憶を未来へつなぐ一人になりたい。語り継ぐことこそが、あの日を生き抜いた人たちへの敬意であり、これからの命を守る第一歩だと思っている。

過去から学ぶ

吉田 七果

はじめに

阪神・淡路大震災から31年という長い時間が経ち、震災を体験していない世代が増えている。今後必ず発生するといわれている南海トラフ巨大地震から自分の命を守るには過去の災害から学ぶことが一番大切だと考える。阪神・淡路大震災で得た教訓から、今後発生する災害に備えるために未災者の私が語り継ぐ。

1 阪神・淡路大震災

(1) 被災したKさんの体験談

Kさんは53歳で阪神・淡路大震災を経験された。当時は神戸市垂水区に夫とその母と3人でアパートの1階に暮らしていた。幸い、Kさんの住んでいた場所は高台だったこともあり、特に大きな被害はなかった。地震が発生したときKさんは夫のお弁当を作るために台所で料理をしていた。午前5時46分、大きな音と揺れが起こり、引き戸だった食器棚から食器がすべて落ちて割れていた。Kさんの家はアパート内でも被害が少なく、食器が割れたことと寝室の棚の上に置いていた人形ケースが落ちただけだった。しかし5階に住んでいたKさんの友人の家では台に置いていたテレビが吹っ飛ぶなどの被害が出ていた。Kさんはその日、老人会で三社参りに行く予定だったが、中止になった。中止になったことを知り、住んでいた土地周辺では大きな被害がなかったが大規模な地震であったことを実感した。また、Kさんの実家は須磨にあり、友人の多くが須磨に住んでいた。Kさんはバイクでデコボコになった道路を走り須磨へ向かった。その時の須磨の様子はほとんどの家が半壊や全壊で燃えていた。炎の熱さを肌で感じ、地震が街へ及ぼす危険性に加えて火災の力の大きさに恐怖を感じた。実家も特に大きな被害を受けることはなかったが、友人の数人が火災に巻き込まれて亡くなった。その時に何もできなかった自分に対して無力さを感じた。

Kさんの自宅は壊れる心配はない状態で、夫の母の足腰も弱っていたので避難所には行かず、自宅で過ごした。自宅での生活では余震が続き、また大きな揺れが来るのではないかと怯えながら過ごした。そんな生活の中でも、自分の布団で夜眠れることができたのが何より安心した。しかし、自宅での生活は楽なものではなかった。一番しんどかったことは水が出なかったことだった。給水車がアパートの横の広場にきたときはバケツややかんなど水を入れられるものすべてに水を入れた。それでも足りなかったときにはバイクを走らせ、少し下った場所まで水をもらいに行った。道は隆起していたり割れていたり非常に悲惨な状態になっていた。ガスや電気がなくても生活はできるが水は生活に欠かせないものであると改めて実感した。ガスや電気も途絶えていたので暖をとることができなかった。唯一暖をとることができたのは石油ストーブだったが、石油は使えばなくなってしまうことに加え、火災の原因になることから使うことを躊躇していた。一刻でも早く元通りの生活が戻ってくることを考えているうちに、今までの生活は非常に恵まれていたことに気づかされ、何気ない日々が送れていることを当たり前だと思てはいけなさと感じた。

(2) 経験談を聞いて

私は初めて身近な人から被災体験を聞いた。身近な人からのお話ということもあり、Kさんとの思い出などを思い浮かべながら話を聞くことができ一番心に響いた。いつも通りだったはずの日々が地震による揺れによって日々の生活を奪い、変えてしまうことの恐ろしさを改めて実感した。Kさんは幸い大きな被害を受けなかったものの、住んでいた地域の被害の大きさや、普段の生活が奪われた不安は計り知れないと思った。特に水やガスが止まったと聞いた時には、寒い中体を温めることができなかった姿が想像でき、災害時の生活の大変さが伝わってきた。当時の様子を昨日のこのように細かく話すKさんには、いつもの明るい笑顔をなく、どこか悲しそうな顔をしていた。それほど印象に残った震災だったのだろうと思い、とても胸が苦しくなった。

私はKさんのお話を聞いて日ごろからの備えの大切さ、そして助け合いの心を忘れずに生きていきたいと感じた。また、これまで以上に誰かに伝えたいと思った。未災者の私たちが次の世代へ阪神・淡路大震災を語り継ぐことに不安があったが、このお話を語り継ぐことができるのは私にしかできないことだと思うので、この語り継ぐを通して多くの人に伝えていきたい。

2 東日本大震災のお話

たくさんのお子さんが亡くなった大川小学校や幼い子どもを亡くされた親御さん、生徒を亡くされた先生などからお話を聞いて、非常に胸が痛くなった。立場はバラバラだったが、お話をしてくださった方はとても苦しそうにお話してくださっていた。たくさんのご遺族の方からの生の声を聴かせていただいて、二度と同じ被害を出してはいけないと強く感じた。守れたはずの尊い命を一瞬にして奪ってしまう災害から身を守るために、私は過去の災害を語り継ぐ必要があると感じた。多くの方が目を潤ませながら当時の話をされていて、東日本大震災から14年の時が過ぎても、被災者の想いは薄れることはなく今でも鮮明に記憶に残っていた。この想いは阪神・淡路大震災の被災者の方と変わらず、これからも被災者の心に残り続けるのだろうと感じた。

阪神・淡路大震災と東日本大震災の大きな違いは津波が襲ってきたことだった。私は、阪神・淡路大震災を直接経験していなければ、東日本大震災もテレビで見た程度で記憶には残っていない。そのため津波がどれほどの威力があり、多くの命や町全体を奪っていくのか知らなかった。授業で津波の映像などを見ても自分事としてとらえることができなかった。しかし、東北訪問を通して被災者の話を聞かせていただいて、津波は命や町だけでなく人の心も思い出も奪ってしまうことを知った。

3 語り継ぐことの大切さ

(1) 防災ジュニアリーダー

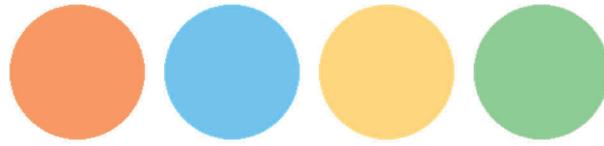
私は3年間、兵庫県のジュニアリーダーの人たちと活動報告や意見交流をしたり、講師の方から講義を聞いたりして、幅広く防災を学ぶことができた。災害時に自分たちで正しい判断をして行動できるよう校内で防災教育、避難訓練を実施した。堅苦しいイメージのある防災を楽しく学んでもらうためにクイズを導入したり、水消火器や簡易トイレのデモンストレーションなどの体験型の授業をしたりと様々な工夫をしてきた。ただ単に防災を伝えるのではなく、学んだことを災害時の活かすことができるように体験型の防災教育をして、知識だけでなく実際の判断力を身に付けられるようにしていきたいと考えている。いつ発生してもおかしくない自然災害から自分で自分の身を守り、全員で助かるためには防災力を高め災害に向き合う必要がある。私たちジュニアリーダーがその率先者となり、校内だけでなく地域全体の防災意識向上を目指しこれからも伝える活動していきたいと強く感じている。

(2) 視覚特別支援学校

災害時にすべての人が助かるためにはまずはその人のことを知ることが大切であると思い、多くの人と関わりを持つことに力を入れた。特に障がい者との関わりを持ちたいと思い、視覚特別支援学校との交流に参加した。交流を通して、目が見えない分お互いの声を頼りにすることの大切さを学んだ。また、先輩方が作った卒業制作を使って災害や防災について考えた。災害伝言ゲームをした際には口頭で伝えている内容はどんどん変化することが分かった。このことから避難所ではどのような配慮が必要かを改めて考えることができた。また、災害が起こったときに困ることや不安なことなどを聞かせていただくことができ、視覚に障害がある人の立場で災害や防災を考えることができた。災害時には状況がつかめず不安なことが多くある。話すときにはいつもより明るい声で話したり、ジェスチャーを付けたりするなどの工夫をすることで視覚に障害がある人は状況をつかみやすくなることなど学んだことを伝えていきたい。

おわりに

環境防災科に入学したての時はただ人の命を守りたいと思っていたが、高校生の私に何ができるのだろうと感じていた。しかし高校生の私たちにも案外できることがたくさんあることを3年間学んできて気づくことができた。多くの講義や地域の方との交流を通して、小さな声に耳を傾けることや、誰かの不安に気づき寄り添うことも立派な防災の一歩で、誰かの心の支えになっていることを知ることができた。また、ボランティアや避難所運営のワークショップをする際には健常者だけが助かるのではなく、高齢者や子ども、障がい者、動物など全員が助かるためにはどのような工夫や配慮、準備が必要かを考えて取り組むようになった。この3年間は私にとって一番成長することができた時間になった。それはこの3年間でたくさんの方からご講義をしていただき、環境防災科でしかできない経験を通してたくさんの方のことを学び、先生方や友達、家族など多くの人たちのサポートがあったからだと感じている。今までの学びをここで終わらせるのではなく、今後も防災を学び続けるとともに伝えていきたいと強く思う。



『輪』

~We are ONE PIECE~

環境防災科 22 期生は 1 人ひとりの素直さや元気、思いやりや優しさを、時には直球で、時には変化球で表現する、個性豊かなメンバーが集まりました。だからこそ、1 つのピースになるのには 3 年の時間が必要でした。ぶつかりあいながらも団結し助け合って過ごしてきたからこそ、私たちは私たちの言葉で伝え、それぞれの個性を生かして輪となりました。

今回初めて、「語り継ぐ」に卒業制作を載せることになりました。卒業制作は、興味のあることを形にして残そうとした、3 年間の集大成です。私たち個性あふれる 22 期生の輪を、少しでも感じていただけると嬉しいです。

・研究の動機

近年、世界規模地球温暖化による災害の激甚化への対策が求められている。
そのため、環境負荷が低く、災害に強いエネルギーの選択について研究することにした。

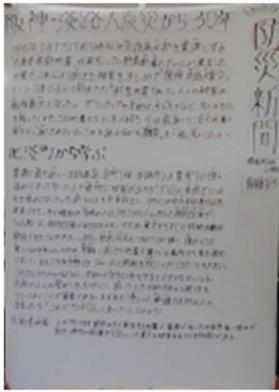
・研究結果

地球温暖化の対策に加え、災害時の停電の対策として、再生可能エネルギーと蓄電池の利用が有効と考え、レポートを制作した。蓄電池を活用することで、余剰電力の問題を低減しつつ、外部からの電源の供給が途絶えた際の備えになるのではないかと考察した。身近な例としては V2H システムがある。これは、EV を蓄電池として利用するもので、昼間に太陽光パネルで発電した電力を、EV に充電するという仕組みだ。夜間に充電された電力を使えば電気代の節約になるため経済的であるのに加えて、災害によって外部からの電力の供給が停止した際にもライフラインの維持に役立つ。また、電気料金体系の変化も、これらのシステムの導入を促進することから有効であると考えた。例えば、九州電力の「おひさま昼トクプラン」では、太陽光発電の発電量が多く、家庭での電力消費の少ない昼間の電気料金を低くすることにより、この時間帯に電気を購入して充電することで、電気代の節約になることから、蓄電池や EV の導入のインセンティブを生み出している。また、この取り組みは余った電力を販売できることから、電力会社にとってもメリットがある。そのほかにも、電力需要の高いときに、通常の買い取り価格よりも高い値段で電力を買い取る FIP 制度の導入なども、家庭などでの再生可能エネルギー及び蓄電設備の導入の促進につながると考えた。また、ペロブスカイト型太陽電池のような安価な再生可能エネルギー設備の量産も、家庭での導入のハードルを下げることに繋がると予想できる。

・あとがき

今回考察した、再生可能エネルギーと蓄電池による災害対策については、アメリカのフロリダ州・バブコックランチで事例があり、路上の太陽光パネルで発電した電力を蓄えていたことでハリケーンの被害の中、停電が起きなかったというものだ。この街では、消費電力の全てを街の中の太陽光発電による自給自足で賄っており、大規模蓄電池によって、余剰電力や発電量の気候による変動といった再生可能エネルギーの欠点の補完を行っている。

また、日本国内でも、福島県で路上太陽光発電の実証実験が行われているほか、静岡県の蜜柑農園では、太陽光パネルを苗畑の上に設置し、過度の日射や地温の上昇を防ぎながら発電するシステムを導入している農園がある。地域の産業と再生可能エネルギーを組み合わせる取り組みが進んでいる。これらの例から、環境に配慮し、地域産業と一体化した再生可能エネルギーの開発は、住民一人一人の持続可能な生活基盤の実現に大きく貢献するだろう。



☆制作に至ったきっかけ

卒業制作を将来の夢である新聞記者にどのように繋がられるかを考えていたとき小学生への出前授業で作成した壁新聞のことを思い出した。ライフラインについてまとめたものや言葉やイラスト、色使いを工夫して制作し、実際に授業で使用すると児童たちはよく見て真剣に話を聞いてくれた。小学生にとって馴染みの薄い新聞でも、工夫をすれば興味をもって読んでもらえるのだと感じ、その経験から私が大切だと考える防災の知識をまとめた壁新聞を制作した。

みんなで読もう!!

防 災 新 聞

☆内容

①阪神・淡路大震災から 30 年

環境防災科で学んでいく上での基盤でもあるため、阪神・淡路大震災は語り継ぐ責任があると思い、1番大きな記事にした。被害の概要をただまとめるだけでは私が書く意味はないので、この新聞を通して私が伝えたいと思うことを記した。

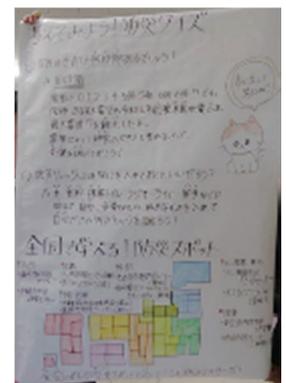
環境防災科22期生
朝藤 里歩

②北淡町から学ぶ

この北淡町のでき事は、私が地域コミュニティの重要性を深く考えるきっかけとなった。当時の住民同士の支え合いの様子を知り、人と人とのつながりが命を守ることに繋がるという事実強く心を動かされた。しかし、現在では近隣住民とのつながりが昔に比べて弱くなっていると感じ、これを防ぐには人々が互いに支え合うことの大切さを伝える必要があると思った。地域コミュニティを強めることは、防災の面でも大きな力になる。私が新聞記者になれたら住民同士の交流のきっかけになるような記事を書き、地域に寄り添った記者になりたい。その1歩目として、読んだ人が自分の命を守るためにも、地域の人と協力し、町全体で助け合うことの重要性に気づくきっかけになってほしいと思い記事にした。

③考えてみよう！防災クイズ

1 問目は、ボランティア活動でクイズを出した際、多くの人が答えられなかったため作成した。震度の大きさによって出る被害の大きさを知っておけば、取るべき対策もわかるため防災につながると考えたため作成した。2 問目は、Active 防災 I の授業で「防災ポーチ」を作成したときに、災害時水や食料を備えていることも大事だが、日常を守るために自分の好きなものを食べたり、好きなことをして過ごしたりできるように備えることも必要だと感じ、作成した。



④全国で学べる！防災スポット

防災を身近に感じるためには、楽しみながら学ぶことが大切だと考えた。そこで、全国には防災について学べるさまざまな施設があることを多くの人に知ってもらい、防災を観光に取り入れ、堅苦しいものにならず楽しんで学ぶきっかけにしてほしいと思い作成した。

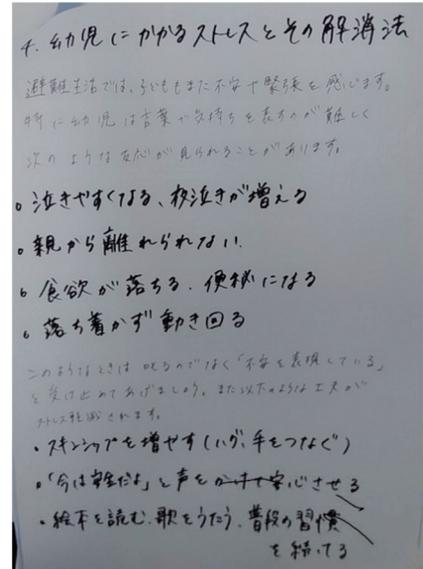
デジタル化が進む現代では新聞離れが課題となっている。そこで私は「新聞でしか伝えられないこと」について考えた。新聞は記者が時間をかけて取材し独自の視点でまとめるため、内容や表現に個性が表れる。私はこの個性こそが新聞の魅力だと感じている。今回はインターネットで調べた情報と自分の経験をもとに作成したが、将来は記者として自ら取材し唯一の価値を持つ記事を書きたいと強く思った。

制作に至った経緯

災害時の災害関連死は甚大なものである。実際避難所生活で孤立することや周りの援助を受けられず命を落としてしまうもの少なくない。そんな中で幼児を育てる家庭はこういった避難所生活で援助を受けることができないケースが多い。そのため子どもと乗り越えることのできる避難所生活ガイドの制作に至った。

家庭でできる防災対策（幼児向け）

幼児のストレスを軽減するために防災バッグの中に幼児のおもちゃを入れておくことも大事。圧縮タオルやベビー用ワセリンを常備しておくことで幼児の体の健康と安全を守ることができる。



避難所でできる（保護者向け）

保護者自身が清潔を保つことや、相談窓口を訪ねる。
人に頼ることでストレスを軽減でき、情報共有もと
ることができる。

役立つもののランキング

- 1位：圧縮タオル
- 2位：ベビー用ワセリン
- 3位：ベビー用段ボールベ
ット

制作後の感想

災害時や避難所で必要なものを調べていく中で知ってお
くだけで安心するというのが防災への関心への一歩だと
実感した。



絵本と防災

内林 小都泉

制作の背景

- ・子どもと関わる仕事に就きたいという想いから、防災に関連した絵本を作成した。
- ・小さい子に楽しく防災を学んでもらえるように触れたり、飛び出したりする絵本にして小さい子に興味をもってもらえるものにした。

テーマ

- ・キャラクター(ゆれるくん・なみちゃん など)を使って地震・津波について知ってもらう。
- ・地震と津波が起きたときの町の様子を知ってもらう。
- ・自分の身を守る方法を知ってもらう。
- ・防災バッグを知ってもらう。

絵本の説明

- 1, 地震が発生したとき、家がどのように揺れるのかをゆれるくんが飛び出す絵で説明する。
- 2, 地震が発生したとき、体の守る部分をクイズ形式で伝える。
- 3, なみちゃんと5才の男の子が会話中に津波が来たら何をすればいいかを伝える。
- 4, 地震発生後、津波が来るときの状況を飛び出す絵を使って伝える。
- 5, 防災バッグの中に何が入っているかを紹介しながら、地震・津波への備えを伝える。
- 6, 地震・津波が来てもあせらずに、逃げる行動をとり、命を守る方法を伝える。

絵本の表紙



地震発生時の様子を飛び出す絵で説明



レポート あなたは知っていますか？

～消火器と消火栓～

梅林 涼太郎

1 研究に至った経緯

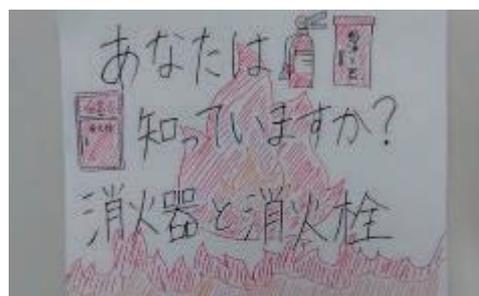
初期消火において消火器や消火栓の使用は非常に重要になる。しかしボランティア活動を通じて地域の方にこれら2つの使用方法や知識が不足していると感じた。そこで地域の方がどれくらい使い方を知っているかを調査し、そこから出る課題やその解決策をまとめることにした。この研究を通して地域の防災意識を高め、いざという時に自助・共助ができる街を目指したい。

2 研究の流れ

- ・地域の消火器・消火栓の位置を把握し地図にまとめる。
- ・住民の消火器・消火栓についての知識を調査する。
- ・問題点と改善点を考える。

3 調査方法

- ・調査地域：神戸市垂水区乙木小学校校区
- ・実際に地域を歩いて消火器・消火栓の位置を確認する。
- ・地域住民10人へ消火器・消火栓の位置、使用方法を知っているかの2項目についてアンケートを実施する。



4 調査結果

消火器11個、消火栓3か所を確認した。

傾向：集合住宅地の敷地内やマンション、公園やその周辺に設置されていた。分かりにくい場所に設置されているものもあった。消火栓はいずれも公園に設置されていた。

消火器の位置を知っている：10人中3人 消火栓の位置を知っている：10人中2人

消火器の使用方法を知っている：10人中8人 消火栓の使用方法を知っている：10人中3人

傾向：消火器の使用方法を知っている人は比較的多かったが、消火栓の使用方法を知っている人は3割にとどまった。消火栓は普段使わないうえに日常に触れないものであり、私の地域では近年防災訓練も行っていないことが一因だと考えられる。

5 課題の整理

- ・消火器、消火栓の位置の知識が普及していない。
- ・消火栓の使用方法を知らない人が多い。
- ・設置場所に偏りがある。

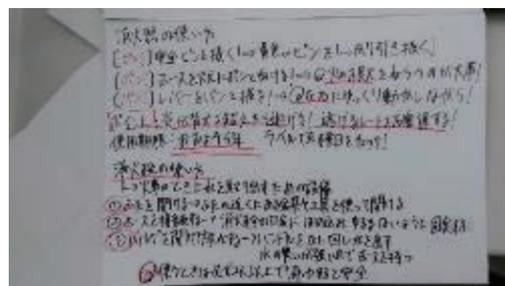
解決策：地図やアプリで防災設備の位置を共有する。

地域の防災訓練を実施し、消火器・消火栓の使い方を体験する。

学校、自治会で防災マップを作製、掲示を行う。

6 研究を通して

今回の調査で、防災設備の認知度や使い方に課題があることを実感した。いざという時に命を守るためには、地域全体で防災意識を高めることが必要である。私は将来消防士になり、人々の安全を守る仕事に就きたいと考えている。この研究をきっかけに、防災の知識を広め、安心できる街づくりに貢献していきたい。



自分の地域にある避難梯子

大山 翔輝

1, 研究に至った経緯

環境防災科での学習を通して、地域の防災力向上に関する意識が高まった。特に、「自分の住んでいる地域の安全について知る事の大切さ」に気づき、身の回りの防災設備を見直すようになった。その中で、自宅近くに設置されている避難梯子の存在に気づき、「これは実際にどんな場面で使われるのか」「誰が使えるのか」「メンテナンスはされているのか」といった疑問を持ち、調べてみようと思った。

2, 研究の流れ

- (1)自分の地域にある避難梯子が設置されている状態を確認する
- (2)メンテナンスがされているかどうか管理人さんや代表者に聞く
- (3)実際に避難梯子の状態を確認する

3, 調査方法

調査地域: 神戸市垂水区小束山地区

- ・地域を歩いて、実際に設置されているかどうかを確認する
- ・作動するか確認してみる

4, 調査結果

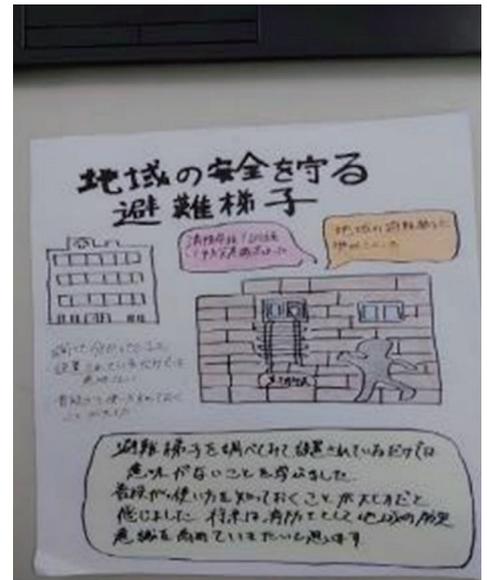
管理人・代表者への聞き取り

- ・定期点検(年1回以上)を実施していたのが4カ所
- ・簡易確認のみ(明確な記録なし)が3カ所
- ・全く実施していないのが1カ所

点検記録簿を備えていたのは3カ所のみであり、多くの施設で管理体制が曖昧であることが分かった。

5, まとめ

この研究では、地域における避難梯子の設置状況および維持管理の実態を確認することを目的とした。まず、自分の住んでいる地域の建物や集合住宅に避難梯子が設置されているかを実際に調査した。その結果、避難梯子のメンテナンス状況について、管理人や建物の代表者に直接聞き取りから、定期的な点検や交換が適切に行われていないところがあるとわかった。これらの調査・聞き取りを通して、地域の安全対策の現状を把握するとともに、防災設備の重要性を再認識することができた。今後も、防災意識を高め、地域全体でより安全な環境づくりを進めていく必要があるといえる。



心理学と防災

岡本 篤大

テーマ「心理学と防災のつながり」

〈概要〉

日本では、地震や豪雨などの自然災害が頻発している。しかし、危険性を認識していても、実際には避難行動が取られないことが繰り返し起きている。こうした避難の遅れの背景には、人間がもつ心理的な特徴が大きく影響している。そのため、防災の効果を高めるためには、災害時に人がどのように考え、どのように行動するのかという「人を動かす心理」を理解することが不可欠である。

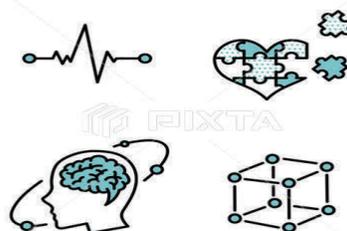
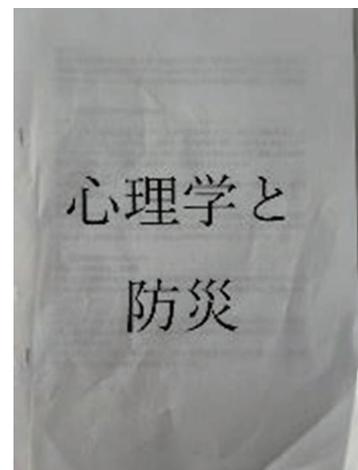
〈目的〉

本研究の目的は、災害が起きたときに人々がなかなか避難しないのはなぜか、その理由を心理の面からわかりやすく整理することである。地震や豪雨などの危険を感じていても、実際には「大丈夫だろう」と思ったり、周りの様子を気にして行動できなかつたりすることが多い。こうした心の働きが避難の遅れにつながっていると考えられる。そこでこの冊子では、避難を妨げる心理を明らかにするとともに、「どうすれば人が避難しやすくなるのか」という視点から考える。

〈工夫点〉

専門用語をできるだけ少なくし、初めて内容を読む人でも理解しやすいように簡易な文章でまとめた。また、研究の流れが一目でわかるように、背景・目的・結果・考察といった構成を整理し、情報の配置をわかりやすくした。さらに、図や見出しを活用することで、重要なポイントが視覚的にも把握しやすいよう配慮した。これらの工夫により、研究内容をより簡潔に、かつ読み手に伝わりやすい形で示すことを意図している。

心理面から防災対策していこう！！



pixta.jp - 91183079



～「命を守り、次の世代へ伝える」ために～

片山 暖人

制作物・・・防災クイズ

< 作成した思い >

防災は命を守り、次の世代へ伝えるであり、よって「語り継ぐ」ことが大切である。たとえ自分だけが防災を知っていたとしても、周りの人に発信しなければ防災力を高めることができない。だからこそ、気楽に防災について学び、普段の生活で災害が起こってもすぐに対応できる力を身に着けてほしい。



< 目的 >

この企画は、楽しく防災を学びながら、「自分ごと」として考えられるようになってほしいという思いを込めて制作した。また、この問題を解いてもらいまわりの人に共有することで、地域全体の防災意識を高めることを目指している。地震や津波のことを「こわい」と思うだけでなく、クイズで楽しく学んで、自分のいのちを守る力を身に着けてもらうことが目的である。クイズは日常で生活している際に災害にあった想定で出題している。家族や友達と一緒にクイズに解き、みんなで防災について考えてほしい。

例) クイズ1 海で遊んでいるときに災害が発生しました。最初にする行動は。

クイズ2 防災バックの中身は何を入れておくのがよいでしょう。

< 楽しく防災を学ぶ意味 >

① 防災を「こわいこと」ではなく、「生きる力」として学べる

防災というと、地震や津波などの「こわい」というイメージが先に浮かぶ。

そこで正しい知識を身につけることで、「災害が起きたときにどう行動すればいいか」、「生きる知恵」として自然に身につけることができる。

② 継続して学ぶことができる

最初は興味をもっても長くは続かない。

クイズ・ゲーム・体験など、「おもしろい!」と感じる学び方をすると、子どもから大人まで、自分から進んで防災を考えるようになる。

防災を「習慣」にするためにも、楽しく学ぶことが大切。

③ 家族や地域との「つながり」をつくる

楽しい防災イベントやクイズを通して、家族・友達・地域の人と一緒に考えるきっかけが生まれる。

「一人でできる防災」ではなく、「みんなで助け合う防災」へ。



< 工夫した点 >

防災をこわいものではなく「楽しく学べる」ものとして伝えるため、クイズ形式を作成し、子どもから大人まで気軽に参加できるように考えた。また、日常の場面を想定した問題にすることで、実際に災害が起きた時の行動を具体的にイメージしやすくした。すべての問題を三択で答えてもらうのではなく、答えが複数ある問題を作ることで、考える時間が生まれ、家族や友達と自然に会話する場を作り、防災について知ってもらえるきっかけになってもらいたいと思い作成した。

今だからできる備えを考えよう!!

日本とアメリカの災害時の早期警戒システムの違い

加藤 朱里

1. はじめに

私は、日本とアメリカの災害時の早期警戒システムの違いを調べた。東日本大震災が起こった時、日本では気象庁が一齐に津波警報を出し、多くの人々が避難した。しかし、一齐に同じ情報を出しても色々な理由によって避難できなかった人もいて、情報が届くことと行動に移すことは別のことだと感じた。その点から、警戒システムの違いの仕組みだけでなく、国民の意識や文化も関係していると思い、このテーマを選んだ。

2. 日本とアメリカの防災の仕組み

日本 : 気象庁が全国に向けて災害情報を発信する。国がまとめて動く形でテレビやスマートフォンで一齐に同じ情報を提供することができ、国民全体で同じ行動をとりやすい。

アメリカ : FEMA という国の機関が全体を調整しているものの、実際に警報を出したり避難を呼びかけたりするのは地域の判断で行う。

3. 文化の違いが生むシステムの違い

日本は集団で行動することや人と協力することを大切にしてきた。そのため、国がまとめて情報を提供することで国民が一齐に同じタイミングで行動できるようになっている。しかし、国の情報が正しいとは限らないという懸念点がある。それに対して、アメリカは「自分のことは自分で決める」という考え方が根付いている。そのため、国よりも地域が中心となって自分で判断して行動することを重視している。しかし、個人の判断が尊重されると、逃げ遅れてしまう危険もある。このように、文化や考え方の違いが制度の違いにも表れているといえる。



4. 考察

私は、早期警戒システムの違いには、どのくらい情報を信用しているかや人々の行動の違いも関係していると考えた。日本では、昔から地震や津波などの災害が多く、みんなが避難する意識が強い。そのため、国の出す公的な情報を信じて行動することが根付いている。一方アメリカでは、自分の命は自分で守るという考え方が強く、地域や個人の判断を大切にしている。また、国土が広く地域ごとに災害が異なることもあり、地域ごとにあったシステムの仕組みが維持されている。日本とアメリカのそれぞれの早期警戒システムの仕組みは、国ごとの考え方や文化が反映されていると感じた。

みんなで学ぼう！！防災かるた

～自分の命・他人の命を守るために～

加藤 海音

「制作物」・・・防災かるた

- ・子どもから大人まで防災カルタで災害について知ることができる。
- ・誰でも簡単に取り組める。

「制作したきっかけ」

・小さい子どもに防災や災害に興味関心を持ってもらうには楽しく学ぶことが必要だと考えた。楽しく興味を持ってもらうためにはどんな防災や災害に関するゲームがよいか考え、「防災かるた」を制作した。かるたはとても簡単で誰でも取り組めることができ、子ども向けにつくって少しでも興味を持ってもらえるような楽しめるカードを制作した。



「かるたの特徴・工夫点」

- ・誰もが見やすいように大きなカードにした。
- ・ラミネート加工をしてカードを分厚く丈夫にした。
- ・かるたの内容は小さい子どもが分かるように簡単な内容にした。
- ・小さい子どもでも読めるように読み札は全部ひらがなにした。
- ・かるたの角を丸く切って安全に遊べるようにした。

「かるたを通して伝えたいこと」

- ・かるたを通して小さいころから災害が起きた時の対応や災害が起きる前にしておく行動などを知ってもらいたい。
- ・いざ、災害が起きた時には学んだことを思い出して、実践してほしい。
- ・家族などでかるたを行うことによって自然と防災に関する会話をするきっかけにってもらいたい。

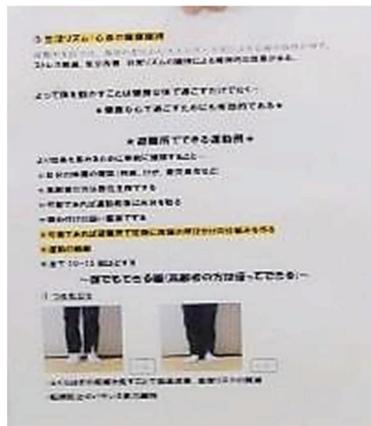


避難所でできる運動マニュアル！！

鎌野 萌生



私は、災害関連死や避難所での体を動かさないことによる健康被害のことを考え、「避難所でできる運動マニュアル」を作成しました。子どもから高齢者までそれぞれの年代にあったオリジナル体操や身近なものを使ってできる運動を冊子にまとめました。過去の事例や体を動かすことによるメカニズムを詳しく書きました。また私は将来アスレティックトレーナー(AT)になって避難所での健康被害を減らしたいと考えています。そして、いざ避難所生活になったときにこのマニュアルを見て、被災者の体だけでなく心の健康被害も減らせるような冊子になればと考え制作しました。



制作の中身（9ページ）

☆内容の説明☆

災害関連死とは

災害時の建物の倒壊や火災などの直接的な被害ではなく、避難途中や避難生活等における精神的・身体的負担によって引き起こされる死のこと。

体を動かさない危険性

- ・長時間の座位からエコノミークラス症候群になる
 - ・筋力・関節機能の低下
 - ・リラックスできない
- 体を動かさないことは命の危険につながる！

★避難所でできる運動例を紹介★

エコノミークラス症候群予防

・つま先立ち【かかとの上下を繰り返す】



上げる→

←下ろす

・足の指運動【グーパーを繰り返す】



★日常でもできるのでぜひやってみてください★

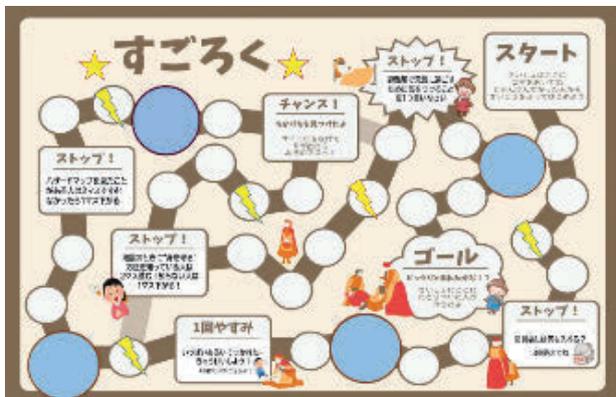
子どもすごろく

岸 宥里

心がつかれたよーって人はこのすごろくをしてみよう！



すごろくには PFA(心理的応急処置)の考えを取り入れています。
PFA とは、災害のあとに人の心を落ち着かせて、安心できるようにする対応のことです。すごろくのマスには「2分間話す」「笑顔を作る」など、心があたたかくなる行動を入れました！



すごろくには誰でも楽しく防災を学べるマスをたくさん用意しているよ！マスの中には「ストップ」マス、⚡や●マスがあるよ。アイテムカードを使って楽しく遊ぼう！

登場人物は6人で好きな人物を選択することができるよ！人物の姿や名前、性格は一人一人違って、だれを選んでもたくさん楽しめるよ！

1人で悩んでいる時は、だれかと話すと心が軽くなる

おしゃべり
2分間みんなで話そう！
友達のマスに移動できる

防災クイズ

海のちかくで大きなじしん！高いところににげる
○か×か

高いつなみが来るかもしれないから、できるだけ高いたてものにしよう！

アイテムカードは被災した人が少しでも落ち着いたり、自分の気持ちを言葉にしてみたり、自然と笑顔になれるカードだよ！カードのお題をクリアできたらいいことがおこるかも?!

防災クイズのカードで、△マークに止まった時に必ずしないといけないクイズだよ！難しい問題は少ないけど災害にあった時に知っておくとよい知識をクイズにしたよ。裏の解説もしっかり読んでね！

防災かるた

河野 黎

1. 防災かるたを制作したきっかけ
 - ・防災をもっと身近に感じてもらいたかった。
 - ・防災は、難しい・怖いと思われがちなので、楽しく学べるようにした。

2. 防災かるたの目的・狙い
 - ・小学生でも楽しく学べる。
 - ・遊びながら防災の知識を覚えられる。
 - ・友達や家族など誰とでもできる。

3. 工夫した点

- ・具体的な行動の描写
抽象的な「避難」ではなく、「机の下に隠れる」「あたまを手で守っている」「足元を気にしながら歩く」など、取るべき具体的な動作を明確に描くことで、何をすべきか(How-to)を伝わりやすくした。
- ・危険性・重要性の強調
「家具を固定している」「お風呂の水をためる」「非常袋をチェックする」など、平時から行うべき事前準備の重要性を忘れずに描写に盛り込んだ。
- ・子どもの視点でのリアリティ
「夜におばあちゃんと避難」「物資の送るものを考える」など、子ども(若者)が当事者として直面する可能性のある状況や、彼らが担える役割を描き、自分ごととして防災を考えるきっかけを作った。



4. 研究概要

- 背景:近年、地震・豪雨・台風などの自然災害が多発しており、防災意識の向上が課題となっている。
- 問題意識:防災教育は重要だが、学校や地域での活動が「知識の暗記」に偏ってしまうと、子どもたちの関心を引きにくい。
- 目的:「楽しみながら防災を学べる教材」を開発することで、防災意識を自然に高めることを目指す。



高齢者も安心！

～安全な暮らしを守ろう～

小林 珠生

1. 防災チェックリストを作成したきっかけ

- ・祖母が寝ている間に火事が起きたら怖いと言っていたから。
- ・高齢者向けで気軽にできるチェックリストがなかったから。

2. 研究内容

高齢者の平常時や災害時の心理状態を調べて、それに合わせてチェックリストを作った。

3.工夫した点

毎日続けられるようにチェック項目の数を多すぎないようにした。

4. 毎日の防災チェック

日々の備えが、命を守る

- 寝る前にコンセントを抜く
- 電気ストーブの電源を切る
- 電気毛布・こたつのスイッチを切る
- 通路に物を置いていない
- 避難経路を家族と確認する
- 懐中電灯をすぐとれる場所に置いておく
- 防災バッグを玄関に置く
- 携帯電話の充電ができている
- ペットボトルの水を枕元に置く

1 制作の背景

3年間で地域と関わる活動に多く参加し、地域の防災会議やイベント、防災訓練を通して、防災の知識を学び伝えた。活動を通して子どもからお年寄りまで多くの方に関わり、防災に興味を持っている方が多いと知った。地域と密接に関わる機会を活かして災害時の栄養や備えについて地域の方に分かりやすく伝えたいと思い、気軽に手に取って読める冊子を制作した。

2 目的

- ① 災害・防災への関心を高める
- ② 備えの大切さを知ってもらう
- ③ 災害に向けて備えてもらう
- ④ 災害時に自分や家族を守る力を高める

3 冊子について

(1) 対象：学生（中学生以上）、大人

(2) 内容

- ・非常用持ち出し袋の中身（1ページ）
非常食や日用品など災害時に必要なものについての説明
- ・災害時の食（2～3ページ）
ライフラインの途絶えが災害時の食事に与える影響について
不足する栄養素について
- ・食料の備え（4～9ページ）
どのような食料を災害に向けて備えれば良いのか
備える量
ローリングストックについて
- ・備蓄食品チェックシート（10～11ページ）
主食・副菜・主菜・果物・飲料の現在の備蓄量
不足しているものや期限・調理の有無を確認して書き込む

非常用持ち出し袋の中身

非常用持ち出し袋とは、災害発生時に避難生活を送るうえで最低限必要なものをまとめたものです。そのため災害に備えて非常用持ち出し袋を準備することが大切になります。各家庭によって必要なものは異なります。家族で話し合っ
て中身を確認しましょう！



非常用

食料品、水

+

ブランケット、カイロ
ラジオ、携帯トイレ
マスク、消毒液
懐中電灯…

ミルク、紙オムツ、離乳食
おしやぶり、おしりふき、抱っこ紐…



薬、大人用オムツ、杖
栄養補助食品、入れ歯…

食料を備えよう！

・簡単に食べられる
・普段から食べ慣れている
・長期常温保存が可能
・ゴミや洗い物が少ない

食料を主に準備して、災害にむけて備えましょう！

カセットコンロとガスボンベも準備しておくも電気・ガスが
使用できなくても簡単な調理が出来ます

主食



アルファ化米
お湯や水を加えると
炊きたてのようなご飯になる



パックご飯
湯煎で温め可能



カンパン
握持しやすい
長期常温保存が可能



乾麺
カセットコンロ・ガスボンベ
水だけで調理可能

4 課題と展望

- ・小学生に向けたやさしい日本語の冊子の作成
- ・外国人に向けた英語の冊子の作成
- 英訳の難しさが課題である
- ・地域イベントへ参加する機会を活かし、地域の方に冊子を読んでもらう。チェックシートを渡し、家で備蓄量を確認してもらい、災害に向けて備えてもらう。
- 防災意識が高い地域を目指す

「個別避難計画」を作成する

阪上 菜穂

制作の経緯

私の地元である淡路市は高齢化が著しい。そんなまちの一員として、みんなで災害から命を守るためには個別避難計画の作成が必要だと考えた。個別避難計画はまだ認知度が低いため、身近な人から普及させていきたいと考え、実施した。

個別避難計画とは？

高齢者や障がいがある人、病気で避難に支援が必要な人（＝要配慮者）を対象に、誰が・どのように・どこへ避難するかをあらかじめ決めておく計画のこと。個別避難計画の作成は市町村の努力義務となっているが、普及率は低い。

〈Mさんの個別避難計画〉

※兵庫県のHPに掲載されている個別避難計画を参考に作成
 (☆印は既存のものに追加した記入項目)

〈個別避難計画に基づく避難訓練の実施〉

Mさんについて

介護認定：要介護4
 障がい者手帳：4級

○避難時の留意事項；
 歩行不可（車いす利用）

○避難先：
 自宅から徒歩15分の小学校

【課題】

- ・避難先までの道が狭く、道面が整っていない箇所があった。
- ・地下道を通る必要があるが、急な坂になっている。

➡ Mさんは車いすを利用しているため避難経路を再検討する必要がある。

まとめ

今回の研究を通して、要支援者への支援を要支援者の家族だけでなく近隣住民の方も協力して行うために、日頃からの顔見知りの関係や緊急時に助けあえる信頼関係がとても大切だと感じた。地元である淡路の高齢者が多いという脆弱な部分を理解し、対策を検討することで災害時に助け合いができる災害に負けないまちにしていきたい。



☺☺高齢者・障がい者向けの「防災運動パンフレット」

～いざという時のために、今からできる体づくり～

佐藤 雅希

・目的

運動能力の低下が著しく低下してしまう高齢者や障がい者にとって、災害時の避難などは一般の人と比べるとより困難になる。そこで高齢者や障がい者にでも無理のない運動で日ごろの運動能力を上げて、避難時や避難所での生活を少しでも楽にするためにこのパンフレットを作成した。

また、日ごろからこのパンフレットを見ることで災害を意識しながら生活できるようにした。

・作ろうと思ったきっかけ

私は将来理学療法士という職業につきたいと思っている。この職業は高齢者や身体の不自由な人、スポーツで障がいを持ってしまった人などに対して一人一人に寄り添いながら身体の回復をサポートする仕事である。しかし、この職業自体が世の中で認知があまり高くないとされていて、これからこのパンフレットを通じて一人でも多くの人にこの仕事をより知ってもらうことがこのパンフレットを作ろうと思った。

また、理学療法士になった後には、このようなパンフレットの内容の活動をしていきたいと思っているので、先にこのような作品を作ることで今後の生活に生かせると思った。

★高齢者用☺

- 常備薬 お薬手帳や処方箋のコピー☺
- 救急セット(絆創膏など)介護用品(おむつなど)☺
- 体温計(必要な人のみ)☺
- 飲料品(1人1日約1Lを最低3日分)☺
- 食料(保存食の缶詰などがおすすめ!!)☺
- スプーンや割りばし 着替えの衣類(下着など)☺
- 毛布や防寒着、カイロ(冬のみ)懐中電灯☺
- 携帯電話・スマートフォン(充電器なども)☺
- 緊急連絡先の書いたもの(家族や友人) 笛☺
- 靴(歩きなれたもの、滑りにくいもの)☺
- 自分の趣味になるもの(本や、ラジオなど)☺

趣味になるものは、☺

例となるページ→

①高齢者・障がい者向け運動メニュー☺

ここでは、実際に高齢者・障がい者向けの簡単な運動をわかりやすい解説や、具体的な秒数、回数、写真などを載せているので、是非やってみましょう!!☺

①足踏み運動☺

- ・椅子に座った状態で足を交互に動かす運動
- ・狙いは水ももの筋力強化、心肺機能の向上など☺

30回×1セット☺

足踏み運動 

②背伸び運動☺

- ・両手を上に伸ばして背筋を伸ばす
- ・狙いは姿勢の改善、呼吸を整えるなど☺

10秒×3セット☺

背伸び運動 

・パンフレットの主な内容

この「防災運動パンフレット」ではまず防災運動とは何なのか、実際に高齢者、障がい者の災害時に起こりそうな問題とその解決策などの紹介をしている。高齢者や障がい者の方でもできる足踏みの運動や背伸び運動、肩回し運動などを図で表したり、秒数を決めたいと具体的なことから、避難時の重要なもののチェックリスト、「マイ避難計画」などの項目があり、いざという時に役に立つものが盛りだくさんである。

このパンフレットがあれば、災害時の様々な問題に対処することができる。

**このパンフレットで日ごろから、
そして災害時も動ける体を目指しましょう!!**

目次☺ 

①防災運動の大切さ☺

☺

②高齢者・障がい者の災害時リスク紹介☺

☺

③高齢者・障がい者向け運動メニュー☺

☺

④災害持ち出しチェックリスト☺

☺

☺

☺ 

防災カードゲーム

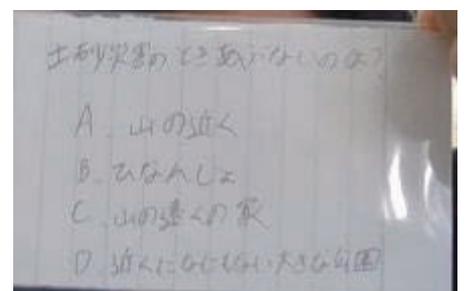
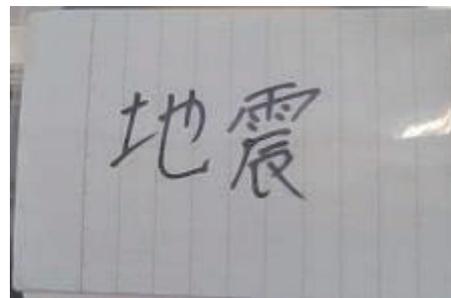
杉本 友彌

作ろうと思ったきっかけ

私は中学生の時はあまり防災に触れる機会がありませんでした。環境防災科に入ってから防災を学び始めました。こういうきっかけがないと防災を学べないのでは防災は広まっていきません。私はもっと身近で、楽しみながら防災について学べるきっかけになるものを作りたいと考えました。そこでカードゲームを作り楽しく学びながら、防災を学ぶきっかけにするとともに、一問一答形式の問題で防災の基本的知識を習得してもらいたいと考えました。

ルール

- ・問題を書いたカードの引く。
- ・カードに書いてある問題をみんなで解く。
- ・最初に正解した人は2ポイント、それ以外の正解者は1ポイントを与える。
- ・災害発生カードを引いたら、その災害に対応した避難行動をする。正しく行動できた人に1ポイントを与える。



「布団太鼓でつなぐ災害に強いまちづくり」

目次

砂川 翔瑚

1. 布団太鼓の概要
2. 布団太鼓と防災の関わり
3. 練り歩くルート安全性
4. 消防団の取り組み
5. まとめ

〈制作のきっかけ〉

私は、布団太鼓に興味があります。布団太鼓は、祭りの準備や運営を地域で協力して行います。そのため、災害時にもその経験が活かされるのではないかと思います。そして、布団太鼓が練り歩くルートは、幅が広く通りやすい道しか無理なため、その経路が避難経路にも活用できると思い、制作のきっかけになりました。



布団太鼓の概要

歴史：明治29年に日清戦争の戦勝記念に制作された。漁業の安全と大漁を願う神事で、鎮守は瑞丘八幡神社である。

特徴：練り歩くだけでなく、走ったり、角を曲がったり、急停止・回転などの練り回し技、担ぎ手が布団太鼓を高く差し上げるなどを行う。

布団太鼓と防災の関わり

- ①地域コミュニティの強化
- ②避難経路・交通規制の経験
- ③連携作業や協力の強化
- ④災害時の情報伝達
- ⑤心理的な支え

練り歩くルートの危険な場所

- ① 空き家から木がととも出てきていて、災害発生時に倒木の可能性あり
- ② 曲がり角が狭いため、瓦礫などで通れなくなる可能性あり
- ③ 川の氾濫で橋が通れなくなる可能性あり
- ④ 道が狭いため、通れなくなる可能性あり
- ⑤ フロック塀が倒れる危険性あり

消防団の取り組み

〈平常時〉

- ・消防団としての訓練
- ・地域住民に向けた訓練指導

〈災害時〉

- ・消火活動
- ・避難活動の支援

〈消防団の身分〉

消防団員は、災害時や地域の防災訓練で活動する非常勤の特別職地方公務員

「だれでも参加できる防災クイズ」



関 歩 飛

きっかけ

ボランティアに参加した時、小さい子どもが防災クイズに参加していなかったのを見て、だれでも参加できるクイズを作成しようと思ったことがきっかけです。

目的

時間や場所、災害の種類から適切な判断ができるのかを知ってもらい災害の意識を強くする目的があります。

工夫点

できるだけ多くの方々に見てもらうために点字などを入れました。
子どもから大人まで楽しんでもらえるように簡単な問題から難しい問題まで作成しました。

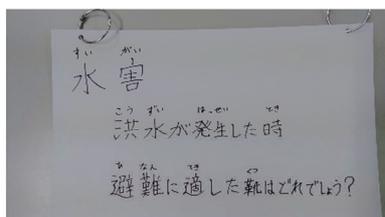
概要

子どもから高齢者、障害のある人まで幅広い方々が参加できるように点字やイラストを入れ、楽しく防災について学べる防災クイズになっています。

クイズの内容

多肢選択型（複数の選択肢の中から正答を選ぶ）のクイズ
災害（洪水、地震、津波、火災、豪雨）から出題しています。
選択肢のイラストや文字を見て答えを導き出します。

<防災クイズ制作物>



問題



選択肢

障がいがあったとしても

高橋 人逢

〈きっかけ〉

芦屋特別支援学校でのボランティア活動です。この芦屋特別支援学校でのボランティア活動では、障がいがある高校生と一緒に新聞スリッパを作ったり、私たちが防災についてお話ししたりするボランティア活動をしました。芦屋特別支援学校の生徒たちは、活動を進めていくと質問をしてくれたり、話しかけてくれたりして私たちと変わらない高校生だと思いました。この活動をきっかけに、多様性をテーマにした絵本制作をしました。

〈工夫したところ〉

この作品で工夫したところは2つあります。1つ目は、どの年代の人でも読めるように、漢字をあまり使わず、使う場合はフリガナをふりました。2つ目は、絵と文字数のバランスを整えたことです。文字が多すぎると最後まで読みたいと思わないし、絵が多すぎると内容の理解が難しいと考えられるため、絵と文字の分量の調整をしました。

〈絵のあらすじ〉

P2-3:家族の紹介

P4-5:シロくんの特別なところ

P6-7:あそぶけど、なやむ

P8-9:迷子になる

P10-11:さがす家族とキラキラの毛

P12-13:見つけてもらえた

P14-15:ちがいは たからもの

P16:みんなでいっしょ



p 10~11 の内

〈この作品を作った感想〉

この作品を作ってみて私は、絵本で伝える難しさ、絵本の内容と防災を関連させる難しさを学びました。絵の構成やどんな絵にするかを一から考えることは、とても難しかったです。次回このような機会があれば、絵のページを増やしてみたり防災との関係をもっと増やしたりして、工夫していきたいです。またこの絵本の広め方も考えていけたらいいと思いました。

「災害食レポート」

高畑 成

[きっかけ]

- ・以前に災害食を食べた際に他の災害食も気になったから
- ・防災バックを自分で作った際に災害食も入れてみたいと思ったから
- ・実際に災害が起きた時に災害食で大丈夫なのか疑問を持ったから

[目的]

- ・災害時に備えた食の大切さを知る
- ・家庭で備蓄する非常食の選び方を学ぶ
- ・さまざまな災害食の味・手に入りやすさ・見た目を知ってもらいたいから



[災害食とは]

- ・災害時、ライフラインが止まったときに食べる保存性の高い食品のこと
- <保存期間の例>
- ・アルファ米:約5年
 - ・缶詰:約3~5年
 - ・栄養バー:約1~3年

[調査方法]

自分の気になった災害食を購入する。



栄養面・味・コスト・見た目で評価する。



実際に災害が起きた際の想定をし、災害食で対応できるのかを検証する。



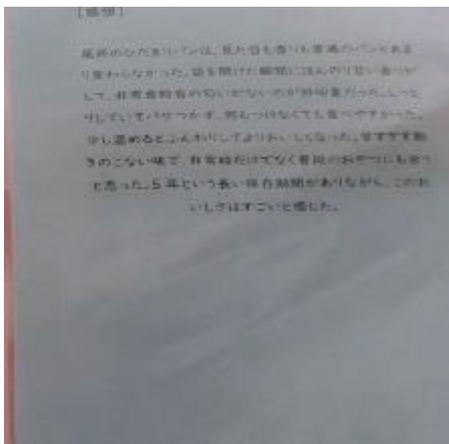
検証を踏まえて災害時の対応を考え直す。

災害時に向けて栄養面を考え、実際に災害食を食べた上でレポートする。

[実際に災害食をレポートした一部]

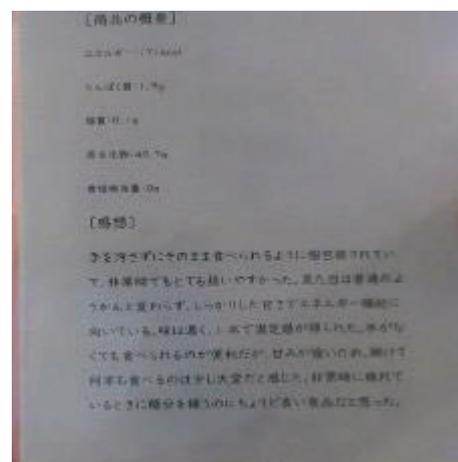
<尾西のひだまりパン>

- ・ふんわりしていた
- ・見た目も香りも普通のパンとあまり変わらなかった
- ・しっとりしていて、食べやすかった



<井村屋のえいようかん> おすすめ

- ・見た目はほとんど変わらない
- ・一本で満足感が良く、甘い
- ・エネルギー補給に向いている



手話と防災 ～手話を知ろう！～

田中 千恵美

制作物

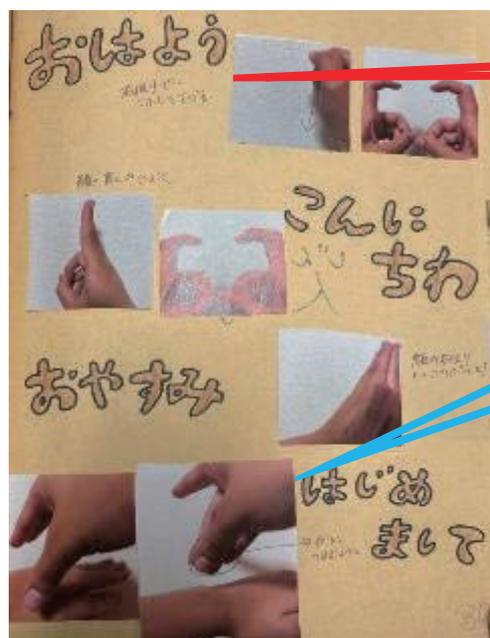
耳が聞こえる方に向けた手話の本

制作理由

- ・聴覚障がい者の方は災害時にコミュニケーションをとることができる人が少ない。
→手話を知っている人の存在が聴覚障がい者の方の安心感につながる。
- ・自分が手話を学ぶ際に角度や向きなど分かりやすい冊子が欲しいと感じたから。



工夫点

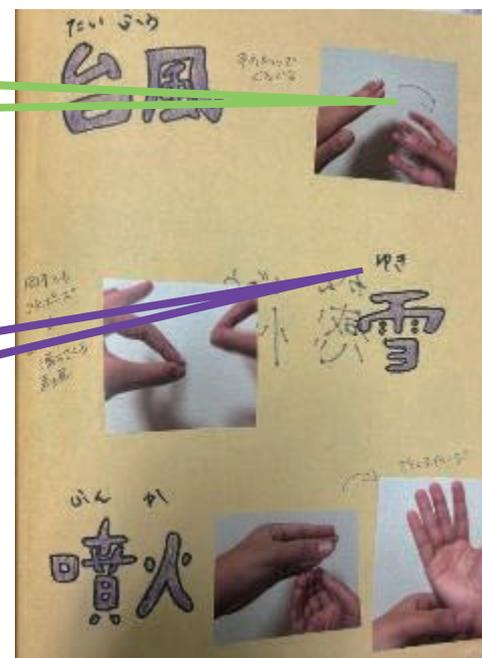


写真だけでなく文章も使用してポイント解説

写真を2枚にすることでより分かりやすく想像が付きやすいように

矢印を書いて方向を分かりやすく

振り仮名をつけて誰もが読めるように



感想

- ・実物があるから手に取りやすくいいと思う。(Yさん)
- ・学んだことをすぐ実践できるから覚えやすい。(Kさん)
- ・矢印だけだと分かりにくい手話がありました。改善としてQRコードを取り入れると、読み込むと動画で手話を学ぶことができるので良いと思います。(Nさん)
- ・次のページの文字がうっすら見えていて、少し見えにくさを感じました。また冊子を作成する際には、冊子の生地感や使用するペンなどにも工夫をしてほしいです。(Tさん)

展望

準備の段階から見る人の視点に立って考えることで、完成品に大きく違いが出ることを知りました。また大学は福祉系に進むため、次は福祉に関連した手話の冊子を作製したいと考えています。誰もが簡単に理解できる冊子が作れるよう、冊子の生地を変更することやQRコードの導入、字体、イラストなどについて検討していきたいです。

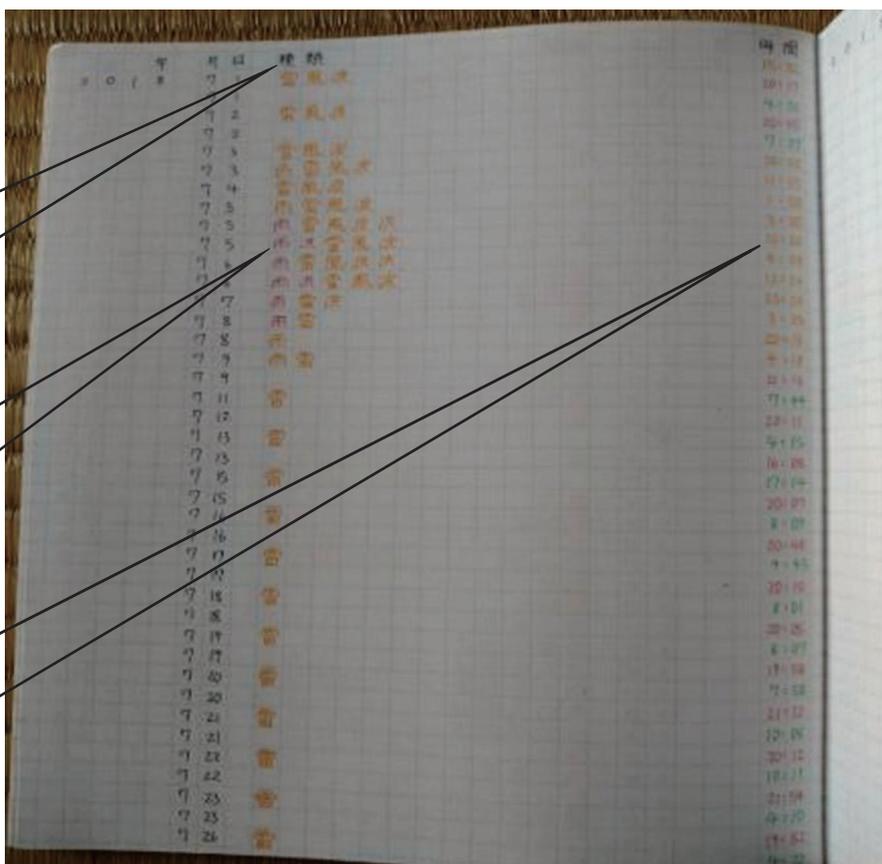
気象特別警報・警報・注意報記録本

田上 空也

大雨や台風など災害が起こりそうなときに気象情報で警報や注意報を聞いたことがあると思います。警報が発表されたときは重大な災害が発生する可能性があり、自分の身を守る必要があります。さて、この特別警報・警報・注意報ですが過去にどれくらい発表されてきたか気になりませんか。発表されてきたものを知ること、次の災害に対する対策を行う際に1つの指標として活用することができます。この本は昔に発表されたものを1つずつ記録しています。2013年1月1日から2025年10月26日まで記録しています。

【ポイント】

- ①注意報の種類
種類は全部で16種類のため、16種類すべてを書くことができるようになっていること
- ②警報・注意報の種類
黒文字は特別警報
赤文字は警報
黄文字は注意報
- ③警報・注意報の発表時間
緑色時間は発表開始
黄色時間は発表中
赤色時間は解除
黒色時間は発表なし



特別警報・警報・注意報の種類

特別警報	大雨	暴風	波浪	高潮	大雪	暴風雪
------	----	----	----	----	----	-----

特別警報は、警報の発表基準をはるかに超える大雨等が予想され、重大な災害が発生するおそれが著しく高まっているときに発表し、最大級の警戒を呼びかけます。

警報	大雨	洪水	暴風	波浪	高潮	大雪	暴風雪
----	----	----	----	----	----	----	-----

警報は、重大な災害が発生するおそれのあるときに警戒を呼びかけて行う予報です。

注意報	大雨	洪水	暴風	波浪	高潮	大雪	暴風雪	雷
	濃霧	乾燥	なだれ	着氷	着雪	融雪	霜	低温

注意報は、災害が発生するおそれのあるときに注意を呼びかけて行う予報です。

気象庁 https://www.jma.go.jp/jma/kishou/now/bosai/warning_kind.html

考察

この調査結果から、ここ数年で豪雨災害が増加傾向であることで毎年、大雨警報が発表されていることが分かりました。今後2026年5月下旬以降の防災気象情報の改定に注視していく必要があります。

架空のまち防災町から学ぶ防災

災害図上訓練を立体に！

田村 洸太

理由

私は、災害図上訓練を実際に体験したときにとてもわかりやすく、災害時の対応を具体的に学ぶことができました。

しかし、小学生などのまだ実際の地域の様子や地形をよく知らない人にとっては、地図だけではどんな場所なのかをイメージするのが難しいと感じました。

そこで、訓練で使う地図を模型にして立体化することで、よりリアルに想像でき、子どもから大人まで幅広い人が楽しく学べるようにしたいと考え、今回模型を作ることにしました。

工夫した点

災害の起こりやすい架空の地域を作ることによって様々な災害の対応を考えるきっかけになるように工夫しました。

また、リアルなまちを作ること为目标に全国に実際にあるまちの地図を元にして、考えたオリジナルのまちでリアリティを持たせました。

そして、まちには様々なリスクと備えを行いました。あえて完璧な備えではないところを作ることで、そのことに気付いてもらうことでより深い学びができるように工夫しました。

土砂災害のリスク



火山の噴火リスク

リアス式海岸
津波のリスク

完成品について

まちにはリアス海岸があり津波の被害が大きくなるリスクと活火山のリスクという大きなリスクが二つあります。

まちの中には津波に備えた堤防や津波避難タワー、火山に対する大規模な砂防ダムなどがあります。しかし実際にハード面だけではすべての災害を防げるわけではありません。自分たちがどのようなものを備え、どのような行動を取るべきなのかを具体的に考えるきっかけになればと考えています。

ゲームルール

1. 模型に自分の家のピンを立てる
2. 全員が立てたそれぞれの家の位置のピンのリスクを考えて話し合う
3. 2で考えたリスクにはどんな備え、備蓄が必要か話し合う
4. 別紙の解説を確認する
5. 最後に学んだこと、気付いたことから家に帰って備えるものを書く

もしもに備えるカードゲーム で伝える防災

作品の作成への経緯

小学生の時、高校生がカードゲームを使って楽しく防災を教えてくれたことが、今でも頭に残っていた。このことをきっかけに防災に興味がない人にもカードゲームを使って、楽しく学んでもらい防災に関心をもってほしいと考えた。

小学生に 伝える理由

小さい頃から自分で自分の命を守る意識を高めることで、小学生だけではなく、保護者や先生なども迅速な行動がとれる

ゲームのメリット

- ゲーム形式で楽しく競いながら学ぶことで頭に残る
- 防災意識を小さいころから持ってもらえる
- 防災バックの中身一つ一つに重さについても考えることができる

もしもに備えるカードゲーム



「もしもに備えるカードゲーム」のルール

- ① 非常食と水のカードを1枚ずつ持った状態でスタートする
- ② 山札から5枚ずつ配る
(好きな人と交換してほしいカードを交換することができる。その場合は理由も伝える)
- ③ 災害時ハプニング発生(問題に対して対策案を考え話し合う)
(例:トイレが使えない・炎天下・極寒・感染症・地震発生)
- ④ 発生したハプニングカードの下に記入されているカードを多く持っている人にポイントが与えられる(例:炎天下なら水を1番多く持っている人)
- ⑤ 発生したハプニングでどんなものがあればもっといいか話し合う
- ⑥ 最終的に持っているカードの重さが1番軽い人はポイントがもらえる
- ⑦ ポイントが一番多い人が優勝

為村 龍星

防災カードゲーム

～答えのない問題に立ち向かう～

寺崎 慎人

1. なぜ防災カードゲームにしたのか

「こちらを立てればあちらが立たず」という状態を「ジレンマ」と言う。

防災や災害対策においてはたくさんのジレンマが発生する。なぜなら、立場が違えば考え方やしてほしいことも違うからである。しかし、そんなときにも人によりよい解決法をすばやく判断しなければならない。ジレンマに立ち向かう判断力が身につけば、災害時に役立つはずだと考え、「防災カードゲーム」を作った。



2. クロスロードとは(内閣府 HP より抜粋)

災害対応カードゲーム教材「クロスロード」は、カードを用いたゲーム形式による防災教育教材である。

ゲームの参加者は、カードに書かれた事例を自らの問題として考え、YES か NO かで自分の考えを示すとともに、参加者同士が意見交換を行いながら、ゲームを進めていく。

目的

災害対応を自らの問題として考え、また、様々な意見や価値観を参加者同士共有すること。災害対応においては、必ずしも正解があるとは限らず、また、過去の事例が常に正解でないこともある。ゲームを通じ、それぞれの災害対応の場面で、誰もが誠実に考え対応すること、また、そのためには災害が起こる前から考えておくことが重要であることに気づくことが重要である。

進め方

- ① 5～7人でグループを作る
- ② グループの中でファシリテーターを1人決める
- ③ ファシリテーターが状況設定カードを1枚読む(例 300人が避難してきている避難所に200人分の食料が届きました。あなたなら200人分を配りますか)
- ④ カードに書かれた状況に対し自分の意見を「はい」か「いいえ」で選択
- ⑤ なぜそのように考えたのか、理由を参加者同士で話し合っ「成解」を考える

3. 工夫した点

制作している際に、クロスロードはファシリテーターの役割が重要で難しく、誰でもできるというものではないとアドバイスをいただいた。誰でも楽しく学べるクロスロードにしたかったので、初めての人でも進められるように進行のヒントになるカードを問題の裏につけた。

4. 課題

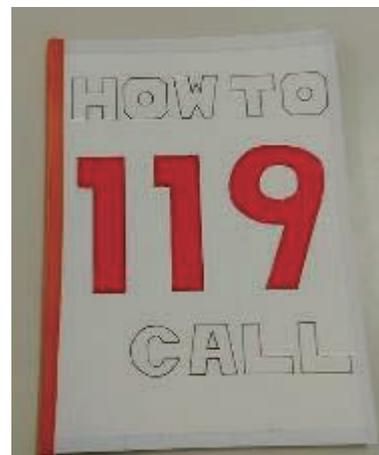
難しいゲームになりがちなので、より簡単な言葉を使うなどして小学生でも楽しく防災を学べるものにしていきたい。

外国人向け絵本『HOW TO 119 CALL』

二宮 杏樹

なぜこの制作物を作ろうと思ったのか

私は外国人との交流がとても好きという気持ちと将来の夢である消防官をつなげることはできないかと考えていた時に、ふと疑問に思ったことがあります。外国人が日本に滞在中 119 番通報をしないとイケない状況になった際に番号を知っているのかということです。そこで私は外国の火事、救急時の緊急電話番号を調べました。するとアメリカでは 911、イギリスでは 999 と国によって異なっていることがわかりました。そのため、外国人が日本に滞在中、緊急通報をしなければならない状況になった際に、すぐに対応できるようにするため、この制作物を作成しようと考えました。



表紙

制作物について

この絵本は外国人に向けたもので、すべて英語で書いています。だれでもわかるように簡単な英語を使い、「旅行中」という想像しやすいシチュエーションにしました。文字で説明するだけではわかりにくい部分もあるので、イラストで 119 番通報の流れを書きました。また、日本の新しい制度を取り入れて安心安全に日本に旅行することができるように工夫しました。

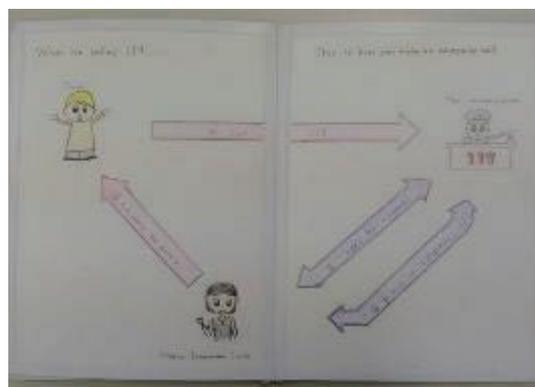
制作物を作り終えて

この卒業制作を通して私も勉強になったことがあります。それは外国と日本の緊急電話の番号が違うということ、「日本の緊急通報のシステムが進化している」ということです。外国と番号が違うことはこの制作を通してわかったことなので自分が外国に旅行などに行く機会があれば、もしもの時のためにいろいろ調べておくべきだと思いました。日本の外国人に対応するための緊急通報システムが進化していることについてもほとんど知らなくて、日本人でも知っている人が少ないと思います。そのため外国人に知ってもらうには日本人の多くの人に知ってもらうことが大切だと考えます。そうすることで世界中に広まっていくのではないかと思います。私はこの制作を通して新しく蓄えた知識を多くの場所に広げていきたいです。

絵本の内容



旅行中



三者間同時通

田舎と防災研究レポート ～山口県周防大島の防災を知る～

長谷川 虎粹

周防大島とは？

正式名称は「屋代島」といい、山口県南東部に位置し、瀬戸内海に浮かぶ島の中では、淡路島、小豆島に次いで3番目に大きい島となっています。島の大部分が山地で、豊かで美しい自然を有しています。そのような美しい自然と穏やかな気候を生かし、農業では柑橘類が多く生産されています。そのことから“みかんの島”と呼ばれています。また、1963年にハワイ州カウアイ島と姉妹島提携を結び、現在でも文化交流が行われていることから“瀬戸内のハワイ”とも呼ばれています。



※○部分が周防大島

周防大島のライフライン

交通

本州に架かる大島大橋から自動車・バスで行く経路と、愛媛県や本州からのフェリーで行く経路の2つ。



電気・水道

電力と水道は大島大橋を通じて本州から供給されている。橋が分断されると供給が停止される。



ガス

周防大島は都市ガスの供給エリアはなく、プロパン（LP）ガスが主流になっている。



このように周防大島の交通・インフラにとって、唯一本土とつながっている大島大橋が命のラインとなっています。そのため大島大橋が事故・災害等で使用ができなくなった場合、周防大島は交通や電気・水道・物資の供給がすべて停止する可能性があります。しかしプロパンガスは都市ガスと比べて、復旧が早く、大きな被害は発生しにくくなっています。

実際に周防大島に行って実施したこと

①町役場でインタビュー

周防大島町役場の消防防災班の職員の方に周防大島の災害・防災についてインタビューを行いました。短時間でしたが、多くの質問に丁寧にお答えいただきました。事前に調べた内容とは違った、生の声を聞くことができ、今回の研究を通して自分自身で深く考えることができました。また今後の研究のためにも、周防大島との関係を持ち続けたいです。

②大叔母と避難行動確認

周防大島に住んでいる大叔母と一緒に、防災グッズの確認や避難ルートの確認などを行いました。話し合う中で「家が木造で築100年以上」「犬を飼っている」「防災バッグが無い」など様々な問題が浮き出してきました。実際に会って一緒に活動することで、少しでも防災に興味を持ち、災害から命を守ってほしいと考えています。

外国人でもわかる防災マニュアル

秦野 佑真

作成理由

卒業制作のテーマは外国人でもわかる防災マニュアルです。私がこれを作ろうと思った理由は、日本を訪れる外国人の数は年々増加しており、日本語がわからない外国人の方に日本の防災を伝えたいと思ったからです。また、学校の授業で日本を訪れている外国人の人数を知り、災害が発生したら困るのではないかと考え、防災マニュアルを作成しようと思いました。

防災マニュアル

外国人でもわかる防災マニュアル

Disaster prevention manual that even foreigners can understand

외국인 방재 매뉴얼

外国人防災手冊

外國人防災手冊

目次 1 p ~ 8 p 日本語

9 p ~ 17 p 英語

18 p ~ 32 p 韓国語

33 p ~ 38 p 中国語

39 p ~ 45 p タイ語

1 災害を知る

・地震

地震とは、地下の岩盤(プレート)が周囲から押される、もしくは引っ張られることによって、ある面を境として岩盤が急激にずれる現象のことをいいます。この岩盤(プレート)の急激なずれによる揺れが周囲に伝わり、やがて地表に達すると地表が「揺れ」と言います。私たちはこの「揺れ」を地震といいます。「揺れ」にも種類があり初期微動と主要動、そしてそれらを引き起こす地震波の種類としてP波(縦波)とS波(横波)があります。初期微動は小さな揺れでP波によるもので、主要動は大きく揺さぶられるような揺れでS波によるものです。

日本は太平洋プレート、フィリピン海プレート、ユーラシアプレート、北米プレートの4つのプレートに囲まれており、地震が多く日本は地震大国と呼ばれています。過去に発生した大規模地震は1995年に発生した「阪神・淡路大震災」、2004年に発生した「新潟中越地震」、2014年に発生した「東日本大震災」、2016年に発生した「熊本地震」が発生しており、最近では2024年に発生した「能登半島地震」が発生しています。

2 津波

地震が起きると、震源付近では地面が持ち上げられたり、押し下げられたりします。地震が海域で発生し、震源が海底下の浅いところにあると、海底面の上下の変化は、海底から海面までの海水全体を動かし、海面も上下に変化します。このようにもたらされた海水の変化が周りに波として広がっていく現象のことを津波といいます。また、津波は海底下で発生した地震の断層運動に伴い発生することが多いですが、火山現象等に伴い津波が発生することもあります。これらは地震に伴う津波とは異なり、津波の原因となる現象を覚知することや津波が観測される前に津波警報等を発表することはとても困難です。そのため、原則として国内で津波が観測された場合に、津波警報等を発表します。取るべき行動は、地震に伴う津波の場合と変わりません。津波警報等を見聞きしたら、海辺から離れ、より高

○目次

1. 地震について
2. 津波について
3. 避難所生活について
4. 避難方法について

○言語

日本語、韓国語、中国語、英語、タイ語

訪問外国人の出身地を調べ、その訪問者数の多い国の母国語を調べてマニュアルに組み込みました。

○工夫した点

日本語特有の言葉や言い回しを外国人でもわかるように似たような言語で表記することを工夫しました。

感想

今回、卒業制作では「日本を訪れた日本語がわからない外国人の方に日本の防災を伝え、災害時に外国人が困らない」ように作成しました。また、自分自身が警察官になった時に災害が発生しても外国人に対応できるような防災マニュアルを作成しました。今回の製作で見つかった課題は、文字が多いことです。マニュアルを見た人が視覚的にも分かるように写真を入れたり、図を使ったりして説明すれば良かったと思いました。

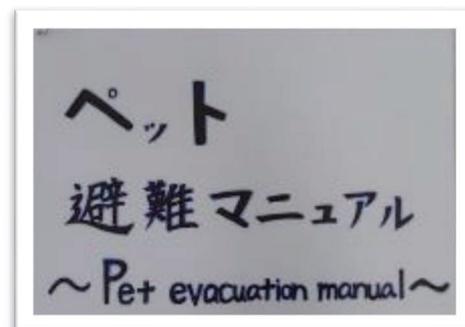
外国人むけペット避難マニュアル

～ Pet evacuation manual for foreigners ～

春名 嵩悟

1, 制作理由

卒業制作でペット避難マニュアルを選んだ理由は、過去の災害でもペットが置き去りになって犠牲になった事例が多くあったからだ。私もペットを飼っており、ペットを置き去りにするようなことは、あってはならないことだと思った。今回の制作では、犬を飼っていることもあり犬のペット避難マニュアルにすることにした。

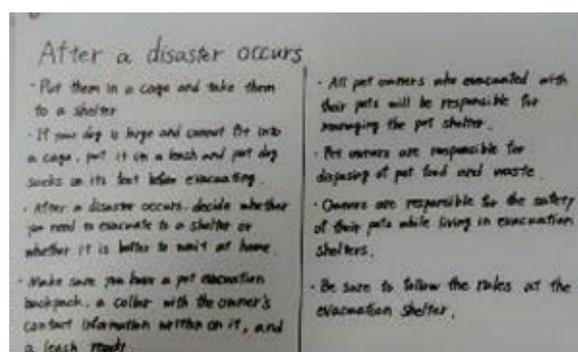
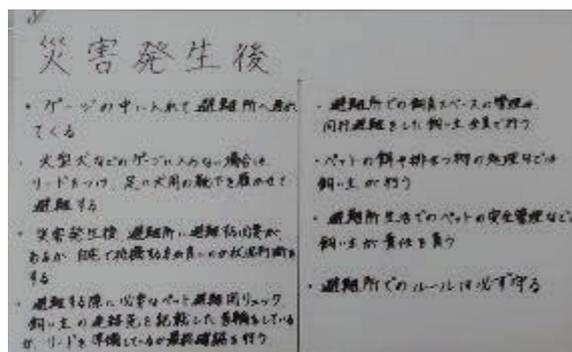


2, 外国人むけにした理由

過去の災害では、言語の壁があり他国の方とコミュニケーションを取れないケースがあった。私も海外で災害に遭ったら、どのように行動することがよいのか分からず困ると考えたため、世界共通語でもある英語で表記しようと思った。最近では、私の住む地域でも外国人移住者が増えており、ペットを連れてくる外国人も多いと感じたため、日本人だけでなく外国人にも対応したペット避難マニュアルを卒業制作として作成することを決めた。

3, 同行避難について

同行避難とは、災害発生時に飼い主がペットを連れて安全な場所まで避難する行為のことである。ペットと飼い主の安全確保を目的としたもので、避難所での人間とペットの同室での生活を保証するものではない。そのため、避難所では飼い主と離れて生活をする人が多い。このことから、飼い主は事前に避難所のルールを確認することとペットをゲージに慣らしておく必要がある。



～同行避難リュックの中身～

- ・1週間分の食事、ペットフード、水、療法食、薬、ペットシート、排せつ物の処理セット、食器
- ・ペットの気に入っているおもちゃ
- ・首輪やリード（伸縮しないもの）
- ・ペットの写真、飼い主の連絡先、動物病院での情報
- ・その他（各自で必要なもの）

ペットを飼っていないあなたへ ～災害時、ペットを守るためにできること～

藤原 功光

動機

私はペットを飼っていない。それでも、高校生活で聞いた数多くの講義で知った「災害時のペット問題」のことを考えるたび、どうにかできないのかと深く悩み、「自分には関係のないこと」と思うことができなかった。災害が起きた際、命の重さに人も動物も違いはないはずだ。しかし現実には、避難所でペットの受け入れをめぐるトラブルや、飼い主が肩身の狭い思いをする場面がある。そうした問題を少しでも減らすためには、ペットを飼っていない私たち一人ひとりの理解と協力が欠かせないと考えた。特別な知識や道具がなくても、災害時に支え合う方法はたくさんある。ペットを守ると同時に飼い主の心を守り、地域の安心を守ることもつながると考えられる。そのため私は自分にできる小さな一歩を見つけ、ペットと災害に関するハンドブックを作成した。



目的

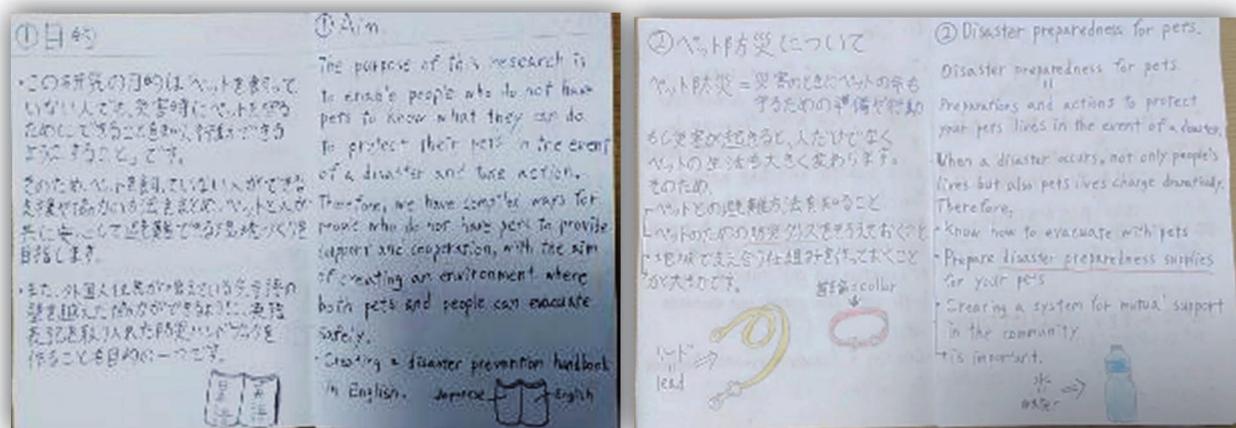
このハンドブックでは、ペットを飼っていない人でも災害時にペットや飼い主を支える方法を知り、行動できるようになることを目的としている。また卒業研究を通して、命の重さに「人も動物も関係ない」という意識を広め、ペットを飼っていない人への理解や行動によって救われる命を増やすことにつながるということを伝えていきたい。

内容

①	ペット防災について
②	ペットを飼っていない人も関係ある理由
③	過去の災害から学ぶペット防災
④	災害前にできること
⑤	災害発生時にできること
⑥	地域でできること
⑦	まとめ

- ①②ではペットと防災がどのように関わっているのかをまとめた。
- ③ではどんな悩みや苦しみがあるかをまとめた。
- ④⑤⑥では実際に行えることをまとめた。
- ⑦でこれからどうなってほしいか、また全体を通してのまとめを書いた。

サイズは嵩張らないようにA6 (105mm×148mm)にし、小さめの本の形でまとめ、防災バッグや防災ポーチなどに入れられるようにした。



学校防災とケア

本田 茉音

制作内容

災害ごとの説明や学校にいるときに災害が起こった際に想定されるリスク、避難する際に危険となりそうな箇所、危険箇所を場所別で確認を行い、危険箇所を理解するためのチェックリストを書いた。そして、小学生でもできる日頃からの防災意識を高めるための習慣や災害後のケアについてもまとめた。

制作にあたっての経緯

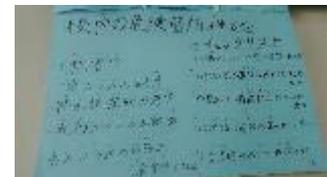
自分の将来の夢が教育系の職業に就くことなので児童・学生と教育者を対象にした。校内で災害が起こった時にどんな箇所が危険なのか、小学生でもできる防災意識を高めるための習慣と、自分でできるケアの方法を知ってもらい実践できるようにと制作を進めた。

学校で想定される主な災害

1. 地震のリスク
2. 火災・土砂災害のリスク
3. 台風・大雨・洪水のリスク
4. 竜巻・突風のリスク
5. 感染症のリスク



校内の危険避難箇所確認+チェックリスト



・教室内

→窓ガラスの破片 掲示物・照明の落下 配線コードによる転倒 出入口付近の荷物が障害物になる

・校内・グラウンド

→サッカーゴール 大雨時のくぼみ 竜巻・強風による飛来物 プール周辺の転倒リスク

・体育館

→大型照明・バスケットゴールの落下 観覧席の崩落 木製床の浸水 体育館倉庫の器具の崩れ落ち

小学生でもできる防災の習慣と身体的ケア

- 自分の持ち物を決まった場所に置く
- ハンカチ・ティッシュを毎日持つ(煙・怪我の時に役立つ)
- 家族と“避難場所”を話し合っておく



かいおう 海王

益田 滯

昔から海が好きで、海に関わる仕事に就きたいという思いがずっとありました。特に、海の安全を守り、人の命を救う海上自衛隊の潜水士という職業に強く惹かれました。しかし、海の世界の魅力や奥深さは、実際に触れる機会が少なく、伝わりにくいと感じていました。そこで、小学生に知ってもらうため、「海王」というカードゲームを制作しました。カードの中には、海の災害やルールなどを入れました。このゲームを通して、海に親しむきっかけになり、海に関わる仕事を目指す人が増えたら嬉しいと思っています。自分自身が将来潜水士として海を守る一方で、「海王」を通して海の魅力も広げていければと考えています。

<カードゲーム全体>



<カードの例>



【ルール】

- ① カードを1枚ずつ、裏向きにして配る。
- ② プレーヤー全員で目標の数字を決める。
- ③ 配られたカードは見ないように、自分のおでこの前に掲げる。
- ④ 相手の反応や言動から、自分のカードに載っている数字を推測する。
- ⑤ 会話や質問をして、他のプレーヤーの心理を揺さぶる。
- ⑥ カードの交換は1人1回まで可能。自分よりも目標数値に近いカードだと思ったら交換できる。
- ⑦ 最後は「せーの」で全員のカードをオープン。カードの数字が一番近い人が勝利。

勝った人はそのカードのお題（海に関する問題）に答える。答えられなかったら全員からカードをもらう。間違えたり答えられなかったりしたらカードはもらえず、また最初からゲームのスタート。最後にカードを多く持っている人が「海王」。

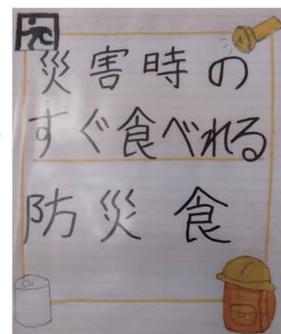
災害時のすぐ食べられる防災食

松浦 博央

制作物の意図と対象

避難所でもおいしい物を食べ、少しでもストレスを軽減したいという思いから、この制作物を作ることにしました。

対象者は、小学生以上全年齢です。このことを意識してまとめました。



防災食の例

●キャベツと塩昆布和え

材料

- ・キャベツ適量
- ・塩昆布大さじ1
- ・醤油小さじ1

ポイント

食物繊維やミネラルが豊富な栄養たっぷりのメニューです。キャベツを一口サイズに切り、すべての材料を袋に入れて混ぜるだけで完成します。



●カップ麺の水戻し

材料

- ・カップラーメン
- ・水

ポイント

災害時は電気やガスが使えないことが多い。カップラーメンは水で戻せば食べられる。少し時間はかかるが、火を使わず安全で、貴重な食料として役立つ。いざという時に覚えておきたい方法です。



実際に作って感じたこと

災害時には調理が難しいことがありますが、キャベツと塩昆布があれば簡単に一品作れます。キャベツを手でちぎり、袋や容器に入れて塩昆布と和えるだけで完成します。火を使わず、水もほとんど必要ありません。塩昆布のうま味で味付けも簡単で、食物繊維やミネラルも取れます。非常時に役立つ料理です。

メリット：火を使わず簡単に作れるため、災害時でも安全です。材料が少なく、調理器具もほとんど必要ありません。食物繊維やミネラルが取れて、栄養面でも役立ちます。

デメリット：キャベツは日持ちしにくく、保存方法に注意が必要です。味が単調になりやすく、長期間続けると飽きやすい点もあります。

スマホアプリと防災

松下 承太郎

〈作成に至った経緯〉

現代は多くの方がスマートフォンを使用しており、それを防災につなげられる方法がないか考えた。調べてみると防災に役立つアプリがいくつかあったのでその中でも気に入ったものをいくつかピックアップし、内容やおすすめ度をまとめた。

〈工夫した点〉

制作にあたって、調べたことをまとめるだけでなく、実際に使用してみて何を感じたか、使いやすさはどうかなど、具体的にどのようなところが使いやすく、一方でどのような部分に改善点があったのかを、複数のアプリと比較してまとめた。

また、幅広い世代に対応し制作物を見た人が一目で内容を理解できるように、見やすく色を使い分け、大きめの字にする等の工夫をした。

〈おすすめアプリ〉

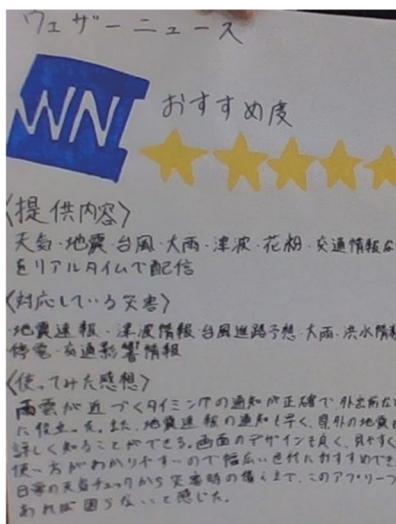
・ウェザーニュース→正確な雨雲レーダーで日ごろから使える便利さから、地震速報やさまざまな災害の通知も届くので防災面にも適していると感じた。

・ココダヨ→家族や友人と位置情報を共有することで災害時にすぐに居場所がわかるので、非常に安心感があり、心強かった。

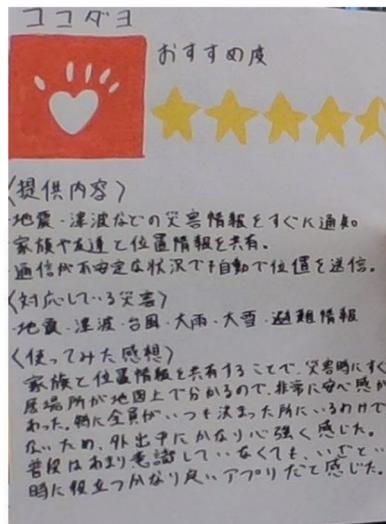
・ニュースダイジェスト→災害の通知が素早く届くのと、ポイントをためて商品に交換できる機能があるが、難しかった。また通知が多すぎると感じたので他のアプリで良いと感じた。

〈制作物の一部分〉

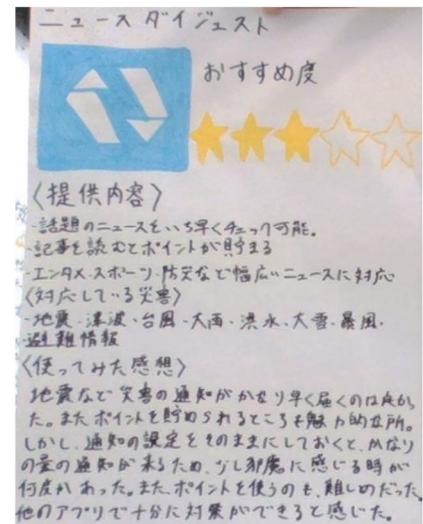
ウェザーニュース



ココダヨ



ニュースダイジェスト



イラストで学ぶ応急手当

森本 みなみ

制作の経緯

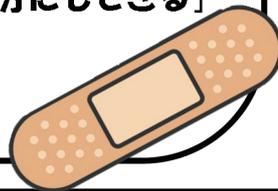
応急手当は怪我の悪化を防ぐことに繋がる。災害時の応急手当の重要性を感じ、誰でも理解できるものを作りたいと感じた。将来看護師として働きたいと考えており、その時にも使えるものを作りたいと考えた。

小学生は応急手当の方法を文字だけで理解するのが難しいと考え、イラストで「見てすぐわかる」教材を作ること、楽しみながら正しい知識を学べるようにしたいと思い、手書きの冊子を制作した。



目的

- ・小学生でもわかるように、身近な怪我の手当を学べるものを作る。
- ・応急手当の関心を高める。
- ・いざという時に「自分にもできる」と感じてもらう。



テーマ

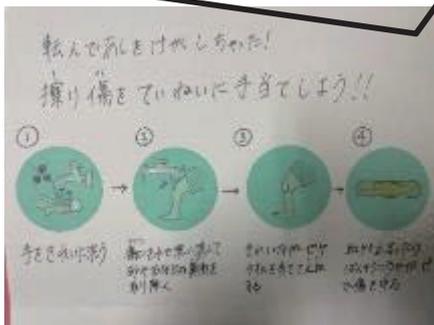
怪我の悪化を防ぐためにも、応急手当の方法を知ってもらう

課題

手当の種類が少ないこと、小学生対象であったが、低学年と高学年では理解の差があり、すべての児童に合った内容にできなかった。

制作物の特徴

小学生にもわかりやすいように文章を簡単にし、イラストを用いて制作した。また、イラストや大切な部分には色画用紙を使い、わかりやすく見やすくなるように工夫をし、すべて手書きであたたかみのあるものにした。



消火器使用法の多言語化マニュアル

柳瀬 暁大

作成理由

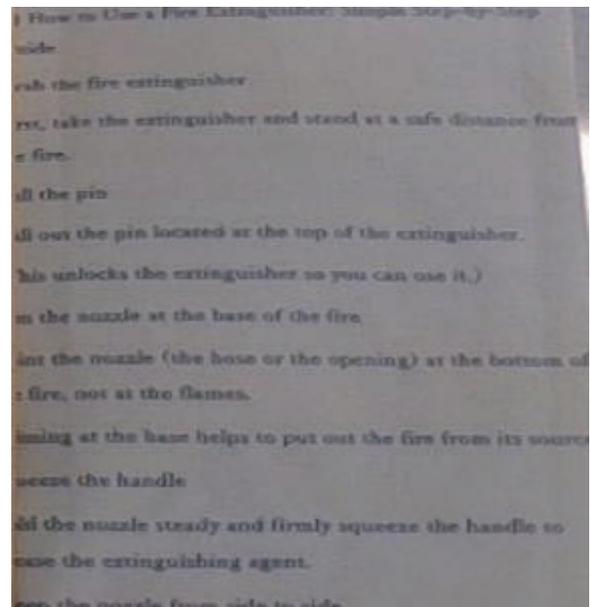
消火器の使い方を海外の方にも知ってほしいと思ったから

作成方法・特徴

日本語・英語・スペイン語・中国語の4種類に分けてマニュアル冊子を作る。

1. 消火器の特徴

- 素早く消火できるが、浸透性がなく再燃の可能性がある。
- 再燃防止には更に水をかけるなどをする必要がある。
- 放射時間が、比較的短い。
- 狭い空間では薬剤が充満し、視界が悪くなる。
- 冷却効果が高く、消火液のかかった部分は再燃しにくい。
- 放射時間、放射距離が長い。
- 浸透性があるため、木材などの火災防止。



2. 簡単な使用方法

- ピン（ピンを抜く）**:安全ピンに指をかけ、上に強く引き抜く。これでレバーを握れるようになる。
- ポン（ホースを構える）**:ホースの先端を上引き上げ、ピンが抜けた本体をしっかり持って、火元に向ける。レバーを握らないように注意する。
- パン（レバーを握る）**:レバーを強く握り、燃えている物の根元に消火剤を放射する。炎に直接ではなく、燃えている物体にほうきで掃くように放射すると効果的。

3. 消火器使用時の注意点

- 安全な距離を保つ**:火元から約3～8メートルの距離で放射する。
- 炎の根元に噴射する**:炎全体ではなく火の根元を狙ってほうきで掃くように動かしながら噴射する。
- 避難経路を確保する**:消火に集中しすぎないように、常に逃げ道を確保しておく。
- 判断を急ぐ**:天井に火が届くほど燃え広がった場合は、消火器での消火は不可能。すぐに消防へ通報し、避難を最優先とする

防災をさわってみよう！！

～みんなで遊بينながら学ぼう～

■作品の経緯・背景

ワークキャンプで障がい者施設を訪れ、みんなが楽しそうに神経衰弱をしている姿を見た時に、「防災もこんな風楽しく学べたらいいな」と感じた。

防災に関心がない人にも、楽しみながら防災の大切さを伝えたいと思った。

さわって体感できる遊びにすることで、誰でも遊びながら防災を考えるきっかけになると考えた。

●テーマ

「さわって学ぶ防災」

見えなくても、聞こえなくても
“触れる”ことで学ぶ

●目的

防災を「むずかしい」から「楽しい」に
かわるきっかけにしたい。

遊びを通して防災を身近に感じてもらう。

●特徴・内容

- ・さわって体感できるカードゲーム
- ・ペアで学ぶことで防災に対する理解や意識を深めることができる。
- ・地震・津波・火災・防災グッズの防災ペアカードを作成した。
- ・災害によって違う感触やデザイン
- ・誰でも参加できる。



●作品の遊び方・ねらい

- ・ペアでカードをそろえる
- ・感覚や体験を通して理解を促す工夫

↓

ただカードをそろえるのではなく、「自分ならどうするか」を考えるきっかけを作る楽しみながら防災を考える時間を作る。

●実践しての気づきと改善

<気づき>

- ・カードの変化に気づきにくい。
- ・ルールが難しく、理解しづらい。

<改善>

- ・対象年齢によって遊び方を変える。
- ・素材の違いをはっきりさせる。

吉田 七果



兵庫県立舞子高等学校

〒655 - 0004 神戸市垂水区学が丘3丁目2番

Tel : 078 - 783 - 5151 Fax : 078 - 783 - 5152